

Ⅲ 的場 2 号墳

目 次

第Ⅰ章 序 章	123
1. 調査に至る経過	123
2. 調査の経過と体制	123
3. 遺跡の立地と環境	124
第Ⅱ章 調 査	128
1. 古墳周辺の調査	128
2. 古墳の調査	128
1) 調査区の設定と調査の方法	128
2) 墳丘	128
3) 周溝	131
4) 墳丘盛土	131
5) 石室	132
6) 閉塞	139
7) 遺物	139
第Ⅲ章 総 括	145

挿図目次

第 1 図	八坂川・高山川流域の古墳分布図	第 8 図	的場 2 号墳初葬時床面実測図
第 2 図	的場古墳群位置図	第 9 図	〃 閉塞部実測図と遺物出土状況
第 3 図	的場 1～4 号墳墳丘実測図	第 10 図	〃 出土遺物実測図 1
第 4-1 図	的場 2 号墳墳丘実測図	第 11 図	〃 〃 2
第 4-2 図	東西(横断)セクション図	第 12 図	〃 〃 3
第 4-3 図	南北(縦断)セクション図	第 13 図	〃 墳丘縦断模式図
第 5-1 図	的場 2 号墳平面図	第 14 図	的場 2 号墳、七双子 1～5・8 号墳石室平面図
第 5-2、3 図	〃 見透し図		
第 6 図	〃 石室実測図		
第 7 図	〃 玄室内遺物出土状況		

図版目次

図版 トビラ	的場 2 号墳空中写真	図版 22	床面(第 2 次)
図版 1	的場 2 号墳遠景	図版 23	初葬時床面
図版 2	〃	図版 24	玄室内遺物出土状況
図版 3	的場 2 号墳調査前	図版 25	坏蓋(1)
図版 4	〃	図版 26	〃 (2)
図版 5	的場 2 号墳墳丘断面(4 トレ)	図版 27	〃 (3)
図版 6	〃 (3 トレ)	図版 28	〃 (4)
図版 7	〃 (3 トレ周溝部)	図版 29	〃 (5)
図版 8	的場 2 号墳閉塞部断面	図版 30	〃 (6)
図版 9	石室・周溝全景	図版 31	〃 (7)
図版 10	閉塞状況	図版 32	坏身(8)
図版 11	〃	図版 33	〃 (9)
図版 12	閉塞除去後	図版 34	〃 (10)
図版 13	閉塞受部根石	図版 35	〃 (11)
図版 14	遺物出土状況(閉塞部)	図版 36	〃 (12)
図版 15	鉄器出土状況	図版 37	〃 (13)
図版 16	〃	図版 38	坏セット(5、9)
図版 17	土器、鉄器出土状況	図版 39	坏一括
図版 18	〃	図版 40	高坏、平瓶、提瓶、甕
図版 19	羨道部と排水施設	図版 41	杏葉
図版 20	玄室	図版 42	鉄鏃、辻金具、鋌金具、刀子
図版 21	〃		

第 I 章 序 章

1. 調査に至る経過

大分空港道路の路線が杵築市大字八坂字的場に所在する的場 2 号墳にかかり、大分県教育委員会は県土木建築部の委託を受け、昭和63年5月中旬より発掘調査を実施することとなった。調査は古墳とその周辺の路線内において実施し、調査面積は約400m²である。

調査は路線内の遺構確認から行なったが、古墳の南側は近世期の耕作に伴うと考えられる段状の遺構のみであり、古墳時代に遡る遺構・遺物はほとんど認められなかった。古墳についてはその約2/3が路線として買収されていたが、残余は路線外であることが判明し、地権者の承諾と協力を得て墳丘のほぼ全域を調査対象とすることとなった。また、調査中に道路は当面片側 2 車線の建設であり、的場 2 号墳は将来 4 車線とする場合工事の対象となることが明らかとなった。このため、調査は古墳墳丘の約1/2と石室内部に留め、石室・周溝等は当分の間現状のまま保存されることとなった。

2. 調査の経過と体制

古墳の調査は雑木の抜開作業より始め、次にトラバース測量を開始した。その後、古墳の主軸と想定される南北方向に 1、3 トレンチを、これと直交する東西方向に 2、4 トレンチを設定し、これを含む古墳全体に(1)~(4)の調査区を設けた。

トレンチ調査の結果、本古墳は直径約11mの円墳で主体部(横穴式石室)、墳丘ともに遺存状況が非常に良好であることが判明した。このため墳丘部の掘下げ、遺物の探索を慎重に実施することとなった。また、閉塞部もそのまま残されているうえに、主体部には大量の土砂が流入しており調査に多くの日数を要したが、杵築市教育委員会、工事関係者、地元作業員の皆さんの協力を得て10月下旬調査を無事終了した。

調査の体制

調査主体 大分県教育委員会

調査指導 賀川光夫(別府大学長)、小田富士雄(福岡大学)、横山浩一(九州大学)
西谷 正(九州大学)、水野正好(奈良大学)、入江英親(大分県文化財保護審議会委員)

調査 後藤宗俊(文化課課長補佐)、清水宗昭(文化課埋蔵文化財第 1 係長)、高橋徹
(同第 2 係主査)、宮内克己(同第 1 係主任)、丸山啓子(同第 1 係嘱託)

調査庶務 今永一成(庶務係長)、西哲弘(同係主任)

調査補助員 平川信哉、阿賀岡希子

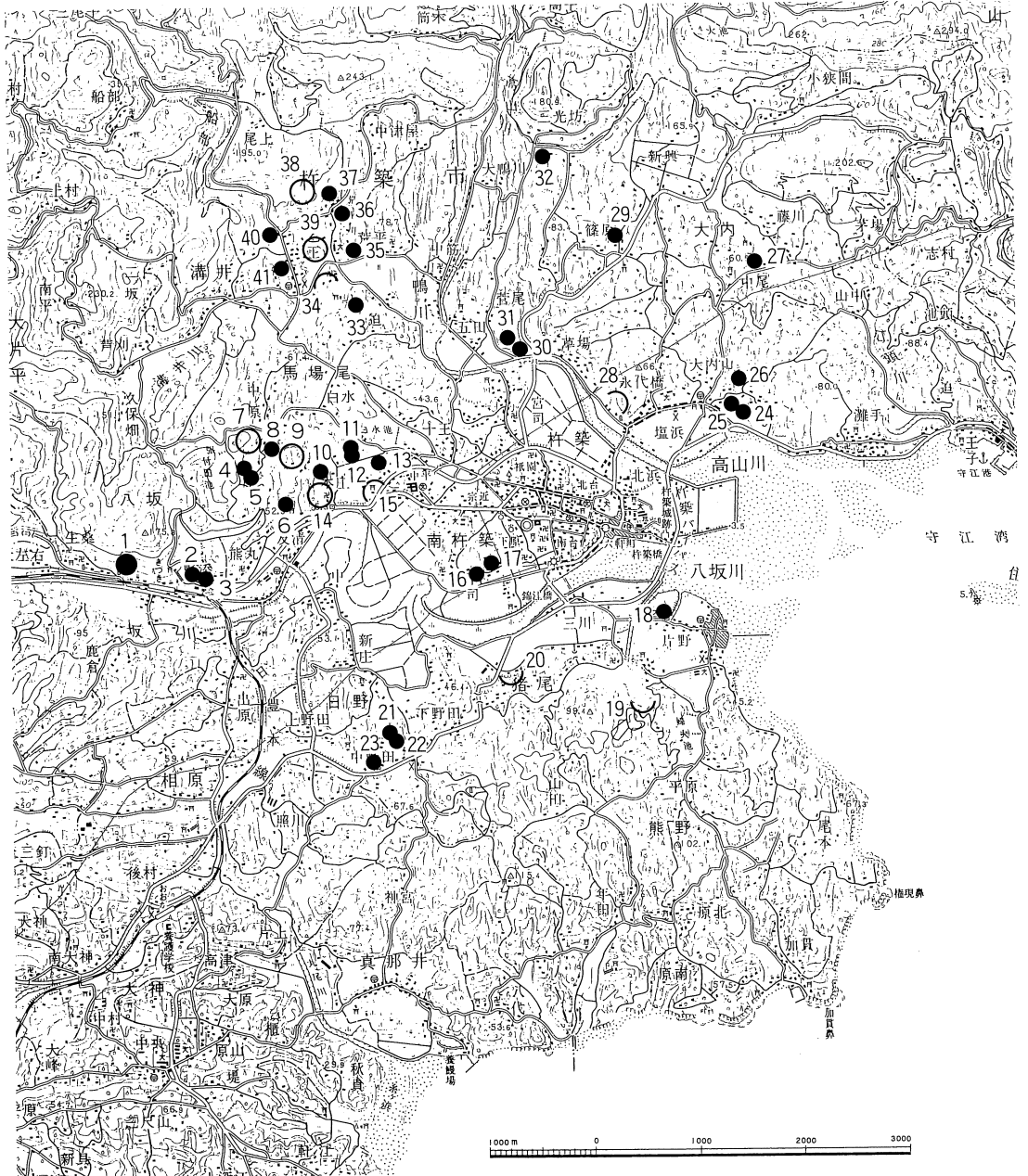
調査協力 木村元保(杵築市教育委員会社会教育課長)、伊藤裕康(同課長補佐)、井村哲士(同主事)、大分県土木建築部道路課、森永到・一子(地権者)

3. 遺跡の立地と環境

的場古墳群(4基)は、杵築市大字八坂字的場の丘陵南側裾部に位置する。的場古墳群の前面には八坂川によって形成された沖積地が拓け、古墳群との比高差は約10mである。

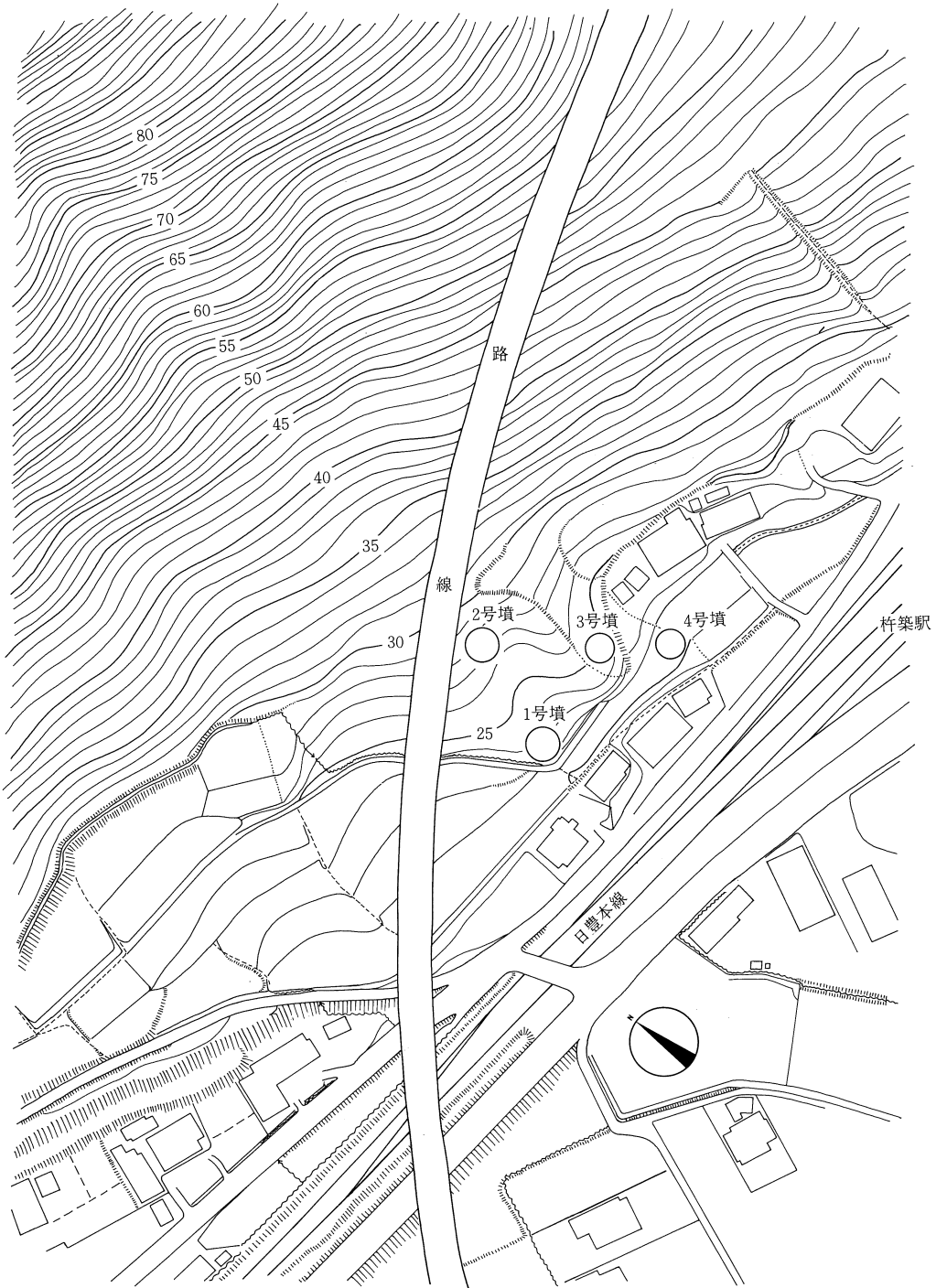
杵築市は、瀬戸内海に向かって突出した国東半島の南側基部を占め、北は安岐町・大田村、西は山香町、日出町と接し、南は別府湾に面する。市内中央部を高山川、南部を八坂川が東流しともに守江湾に注ぐ。河川を隔てる丘陵部の多くは戦後みかん園として耕作され、特産品の一つとなっている。守江湾は河川からもたらされた土砂により干潟が発達し、住吉浜と呼ばれる砂嘴も形成されている。市内には縄文時代以降各時代の遺跡が多く存在するが、干潟の発達からか縄文時代～古墳時代の貝塚が6遺跡ほど知られることも特徴の一つである。縄文時代の遺跡としては早期の稲荷山遺跡、後期の東貝塚は当地域の代表的遺跡である。弥生時代の遺跡は調査例もなく数も少ないが、注目されるものとして新宮遺跡出土の細形銅剣がある。

古墳時代に至ると遺跡の数が飛躍的に増加する。平野部や沿岸部の丘陵上に多数の古墳が営まれ、とりわけ群集墳の多さは県下でも数少ない集中地区の一つである。七双子古墳群(8基)、千光寺古墳群(6基)、大平古墳群(4基)、的場古墳群(同)を始め、現存するもの約90基が知られるが、みかん園造成のため消失したものも多く、これを勘案しても群集墳の盛行地域として重要な位置を占める。これらの古墳の分布は、高山川流域群、八坂川流域群、奈多・狩宿(沿岸部)群の3者に大別され、前2者と沿岸部の古墳群はその性格を異にするものと考えられる。高山川流域群では、シラハゲ古墳(円墳、横穴式石室)から獅噛環頭大刀の出土が注目される。八坂川流域群では七双子古墳群(6世紀後半)が調査され、須恵・土師器、刀子、鉄鏃、馬具、玉類、銅環、銅釧、銀環等この時期の群集墳に共通する遺物が出土しているが、石室構造には3形態が認められ、群集墳の構造や造営集団を知る上で貴重な資料となる。また、重光古墳は箱式石棺を主体部とし、振文鏡・方格規矩鏡各1面と勾玉を出土しており5世紀代に比定される。奈多・狩宿群では大塚古墳(円墳、横穴式石室)から金・銀環、玉類、刀子などの出土が知られるのみであったが、最近大字狩宿の沿岸部において、直径約80mの御塔山古墳(円墳、造出しあり)と全長約120mの小熊山古墳(前方後円墳)の存在が確認され、俄かにこのグループの重要性が高まった。両古墳とも県下最大級の規模をもち、採集された埴輪から、御塔山古墳は5世紀前半に、小熊山古墳はその前段に置かれ、県下における海部勢力の首長権の動向を知る上でも欠くことの出来ない古墳となった。その後、平安期には宇佐宮弥勒寺領の八坂荘となり、奈多には宇佐宮の末社奈多八幡宮が創建され、同宮の木造僧形八幡坐像と女神坐像は国重要文化財として指定されている。鎌倉期には大友惣家の1つ木付氏が入部し、木付城を築き八坂荘全体に勢力を拡大していった。その後、近世に至り細川領となるが、正保2年(1645)、譜代の松平英親が入封、以後明治に至るまで松平氏の支配下にあった。

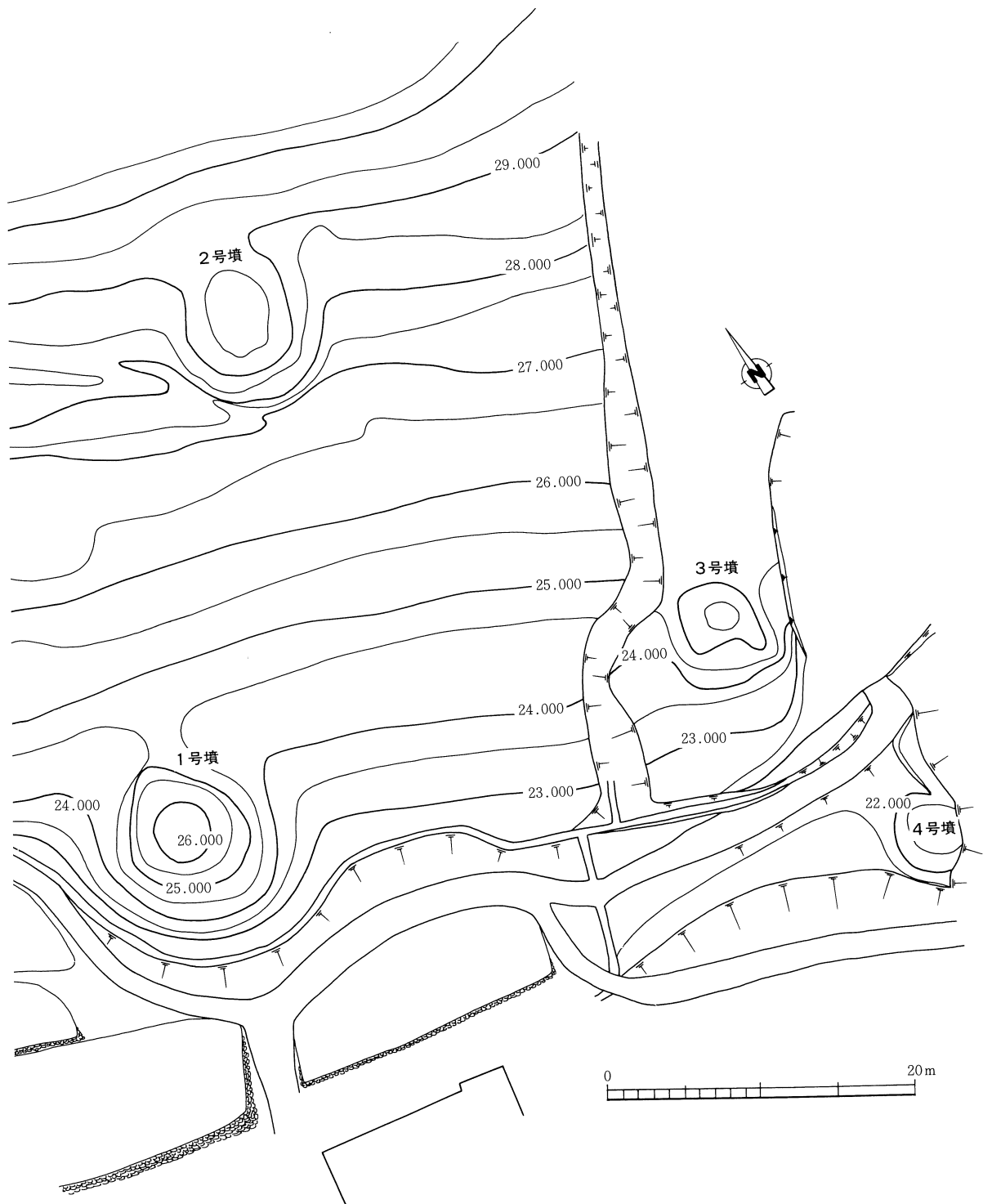


- | | | | |
|------------|-------------|-----------|-------------|
| 1 的場1~4号墳 | 11 正寛寺1号墳 | 21 原地蔵1号墳 | 31 諸富古墳 |
| 2 阿弥陀寺1号墳 | 12 正寛寺2号墳 | 22 原地蔵2号墳 | 32 三光坊古墳 |
| 3 阿弥陀寺2号墳 | 13 白水古墳 | 23 野田古墳 | 33 善神王社古墳 |
| 4 大台1号墳 | 14 千光寺1~6号墳 | 24 工藤古墳 | 34 乙王横穴 |
| 5 大台2号墳 | 15 穴居地藏横穴 | 25 大日様古墳 | 35 シラハゲ古墳 |
| 6 本庄孤塚古墳 | 16 中野古墳 | 26 光月古墳 | 36 金比羅山古墳 |
| 7 大平1~6号墳 | 17 菊本古墳 | 27 トウノオ古墳 | 37 丸尾山古墳 |
| 8 七双子1号墳 | 18 須崎千人塚古墳 | 28 塩屋崎横穴群 | 38 船部1~3号墳 |
| 9 七双子2~8号墳 | 19 上ノ山横穴 | 29 古久古墳 | 39 金剛塚1~3号墳 |
| 10 本庄塚山古墳 | 20 中園横穴 | 30 高山古墳 | 40 乙王稻荷古墳 |
| | | | 41 庚申塚古墳 |

第1図 八坂川・高山川流域の古墳分布図



第2図 的場古墳群位置図



第3図 的場1～4号墳墳丘実測図(1/400)

第Ⅱ章 調 査

1. 古墳周辺の調査

古墳を除く路線内の調査は、A～Dのトレンチを設定して実施した。Aトレンチは的場1号墳の西側に臨接するため5×4mとやや広く設定した。地表下約50～70cmの深さで淡茶褐色の地山を検出したが、1号墳に伴う周溝等の遺構は認められず、遺物も表土層やその近辺から少量出土したにすぎない。

BトレンチはAトレンチの北側約5.5mから2×10m、南北方向に長く設定した。この付近は平坦な地形を呈し、遺構の存在が予想されたが現地形の段落に伴う石垣を検出したのみである。石垣の周辺から近世期の遺物が若干出土し、この時期に耕作地として拓かれたものである。

CトレンチはBトレンチの西側約10mの所にこれとほぼ並行し2×10mの範囲に設定した。ここは標高28～26.5mの緩斜面にあたり、地表下60～70cm余で地山を検出し遺構・遺物は皆無であった。Dトレンチは的場2号墳の西側約10mの所に設定し、当初2×6mであったが石室材と同様の礫を検出したため東側に拡張した。その結果、礫は地山に含まれるもので、古墳構築用に搬入されたものではないことが判明した。従って、古墳に用いる石材は主に地山に含まれるものを任意に採取し、河川等他地域から搬入されたものは、玉砂利等の少量にかぎられる。

2. 古墳の調査

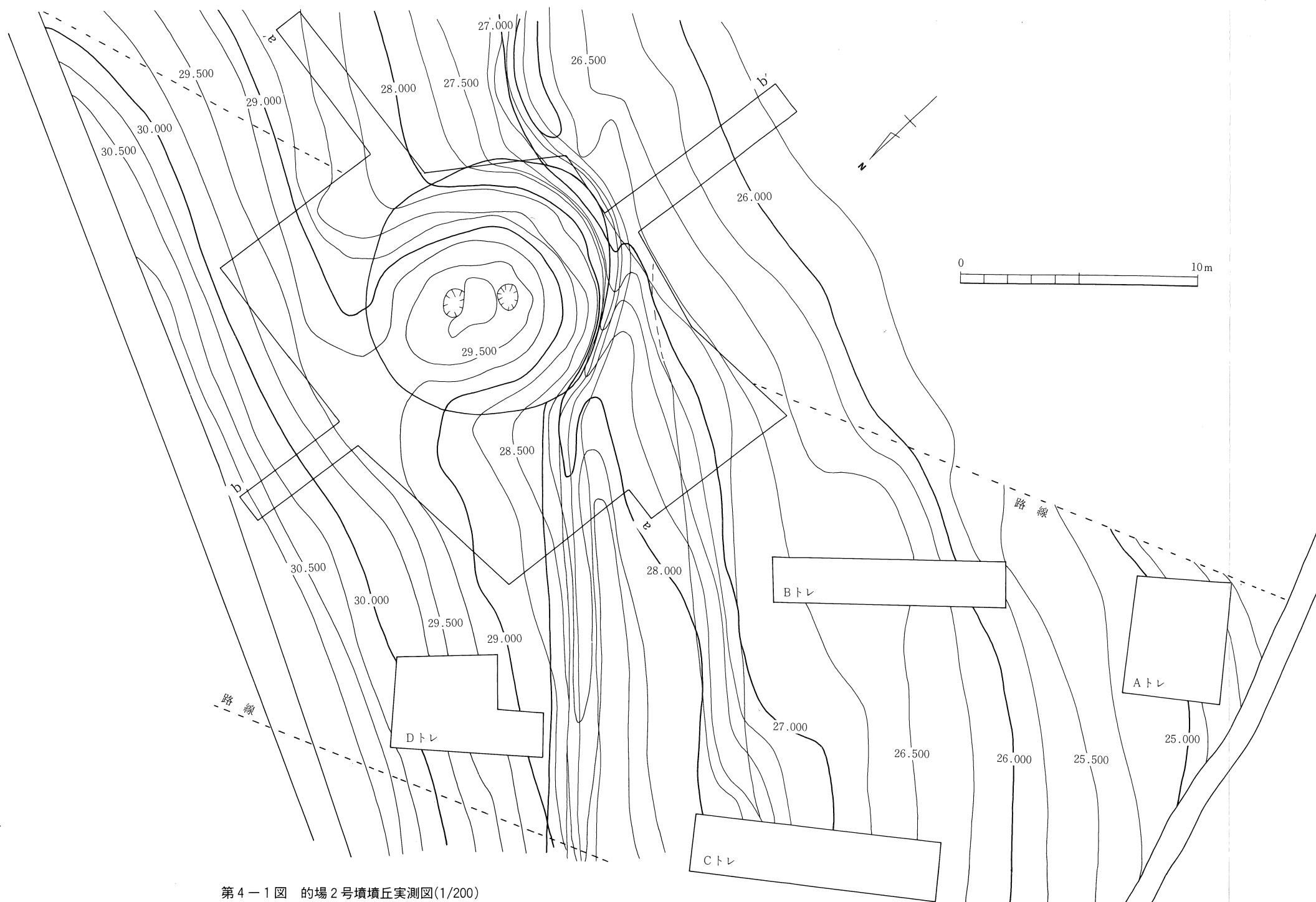
1) 調査区の設定と調査の方法

石室、墓道ともに未露出であったため、ボーリングステッキにより古墳の主軸方位を探索した結果ほぼ南北方向と判明した。従って、墳丘の中心から東西南北方向に10mのトラバースを組み、古墳を(1)～(4)の調査区に分け、主軸とこれに直交する土層確認用のトレンチ(1.5×10～14m)を4本設定し立割り調査を行った。

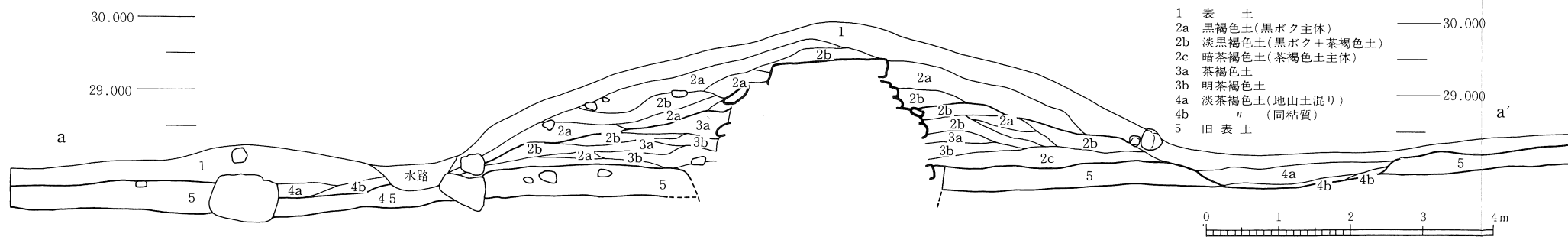
また、古墳の遺存状況が良好であることから墳丘部や古墳周辺から出土・検出される遺物・遺構・層位等を最大限記録し、祭祀行為の各過程やその処理等の復元に資すること。墳丘盛土と石室構築の各工程を明らかにすること。墓道内埋土や閉塞部の断面観察と、遺物出土状況を記録し、埋葬回数を確認とこれに伴う遺物の帰属を明らかにすること。以上のような調査方法により発掘調査に臨んだが、前述したように本古墳は当面の間保存されることとなり、全面的な調査は行なわなかった。

2) 墳 丘

古墳は標高27～29mの斜面に造営され、前面裾部と墳頂部の比高は約3m、後面裾部とは約0.5mであり前の傾斜が強く、後面はかなりゆるくなる。墳頂部の標高は29.974mを測り、2ヶ所に直径1m余の浅い落込みが認められた。この落込みは天井石の隙間と石室奥壁の石材の一部が崩落したことに起因する。また、古墳の南側裾部を幅1～2mの旧水路が走り、この部分

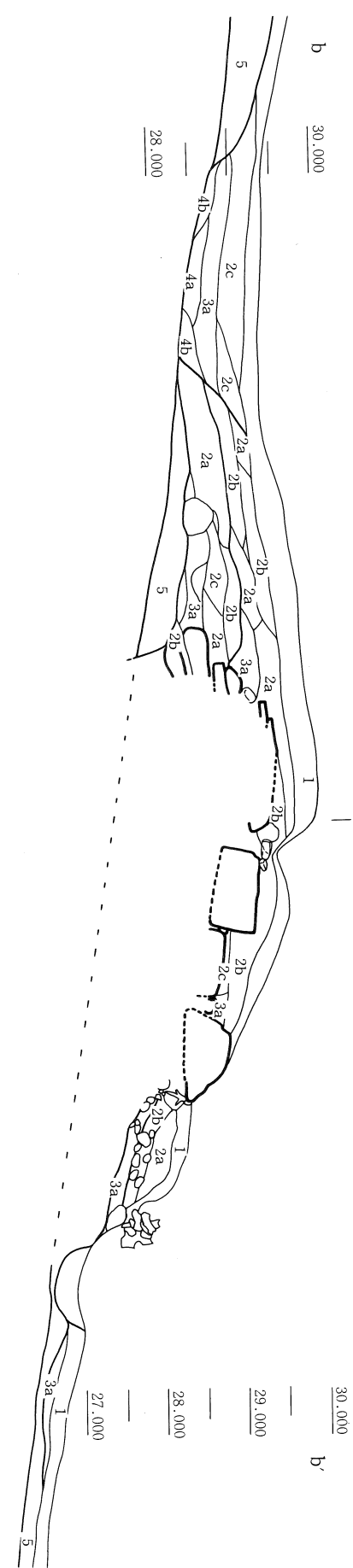


第4-1図 的場2号墳丘実測図(1/200)



第4-2図 東西(横断)セクション図(1/80)

- 1 表土
- 2a 黒褐色土(黒ボク主体)
- 2b 淡黒褐色土(黒ボク+茶褐色土)
- 2c 暗茶褐色土(茶褐色土主体)
- 3a 茶褐色土
- 3b 明茶褐色土
- 4a 淡茶褐色土(地山土混り)
- 4b " (同粘質)
- 5 旧表土



第4-3図 南北(縦断)セクション図(1/80)

は築造時の形状が一部失なわれている。

墳丘の現状は、直径約10.5m、高さ約3mの規模を有するが、本古墳の南側に位置する1号墳は直径約15m、高さ約4mと一回り大きい規模をもつ。また、3・4号墳はかなり改変を受けているためその正確な規模は不明であるが、周辺の地形からすれば2号墳と同程度かこれよりやや小さいものと思われる。各古墳の位置は1・4号墳が丘陵端部の平地から見易い場所を占め、2・3号墳は丘陵内部に位置するが、全体に背後の丘陵が平野部に向かい舌状に張り出した所に造営されている。1～4号の位置関係からすれば、1→2号、4→3号の順に造営された可能性がより強いと言えよう。

3) 周溝

墳丘測量時にその存在は不明であったが、トレンチによる立割調査により判明した。上面幅約2.5～2.8m、深さ0.3～0.6mを測り、北半部は比較的しっかりしているが南側は水路による攪乱もあり全体に浅く周溝肩部は不明瞭となるものの、古墳全体を囲むことは確実である。周溝外側肩部の東西長16.4m、南北長16.8mで南北にわずかに長い楕円形にめぐる。また、墳丘の規模は東西長10.5m、南北長11.5mであり墳丘と同じく南北方向にわずかに長く造られている。

周溝内には墳丘裾部に置かれていた大小の礫が流れ込んでいるが、これらは葺石ではないことは、その数量の少なさと規格が一定せず礫が一定の面を形成しないことから明らかである。礫は地山に含まれている安山岩からなり、その出土状況からすれば、墳丘裾部に置かれた土留と考えられる。一方、(2)・(3)区の周溝内部から奈良末～平安期の椀・坏の細片が出土しており、そのレベルからこの時期までは周溝の北半部は埋没していないことが分かる。また、当該期の遺物は古墳造営時期と時期的隔りが大きく、この間を埋める資料の出土も認められないことから祭祀行為の連続性を示すものではないと言えよう。

4) 墳丘盛土

本古墳は旧表土である黒ボク土の上に積層し墳丘を形成したもので、盛土には黒ボク土と地山の淡茶褐色粘質土の2種類の土と両者を混合したものをを用いる。旧表土は北から南へ約10°傾斜し、厚さ0.3～0.4mを測り周溝部は掘削される。積層は0.5～0.1m余のよく締められた版築状の土層は非常に少なく、層厚0.1～0.4m余のやや厚く締固めの不十分な土層が多い。しかし、石室腰石レベル(標高28m余)付近までは黒ボク土より地山土を多く使い、裾部に向かって傾斜をつけるなどやや丁寧に積層されている。このレベルより上は黒ボク土が主体となり締固めも弱い、石室の周辺は比較的良く締まる。また、(1)区ではこのレベルを中心に4個の比較的大形の石材が墳丘のカーブに応じて配置されている。従って、墳丘盛土作業の工程は天井部の盛土を加え3回に大別される。

第1回目の積層作業が終了した段階で、何らかの祭祀行為が行なわれたことは(3)区における土師器甕の出土が示す。これは小片に砕かれて数点のグループに分かれ(3)区墳丘内の広い範囲

から出土した。同一固体片と考えられるものは他の調査区でも採集されており、墳丘のほぼ全域に散布されたものと思われる。小片で接合可能なものがなく、全体の器形は不明である。

この他、墳丘部では(1)区羨道西側で須恵器坏蓋1(P-6)が破碎された状況で出土している。これに伴う身や他の遺物はなく単独で墳丘上面より出土した。

5) 石室

主体部は両袖単室の横穴式石室で、玄室の方位は $N-14^{\circ}-E$ 、羨道の主軸は $N-5^{\circ}-E$ であり玄室がやや東に寄る。閉塞施設は羨道部の天井石のかかる境に設けられ、羨道部天井石との隙間は約0.1~0.3mで最終埋葬時の状況を良く残す。これより内部は墳丘土の流入により腰石付近まで埋没していたが、玄室床面に乱れはなく盗掘は受けていない。

玄室 玄室は奥幅1.68m、中央部幅1.65m、前幅1.65m、東側壁長2.52m、西側壁長2.80mを測る長方形プランをなす。奥壁は幅約1.8m、高さ約1.3m余の頂部がカーブを描く腰石1枚の上に $0.25 \times 0.5m$ 、 $0.4 \times 0.5m$ 余のやや大形の石材を3段に分けて小口積みし、隙間に小形の石を間詰する。東側壁は幅約1.5m、高さ約1.1m余の横位の腰石と、幅約0.9m、高さ約1.3m余の腰石を2枚縦位に配し、その上に奥壁と同様の石材を3~4段小口積みするが、一部平積みも認められる。西側壁は幅約0.6~0.8m、高さ約1.1~1.3m余の石材を縦位に4枚腰石として配置し、その間にやや小形の石を間詰する。腰石レベルより上は3~4段に他の壁面と同様の石材を積む。西側壁の一部は天井石の隙間から進入した竹根により厚く覆われている。

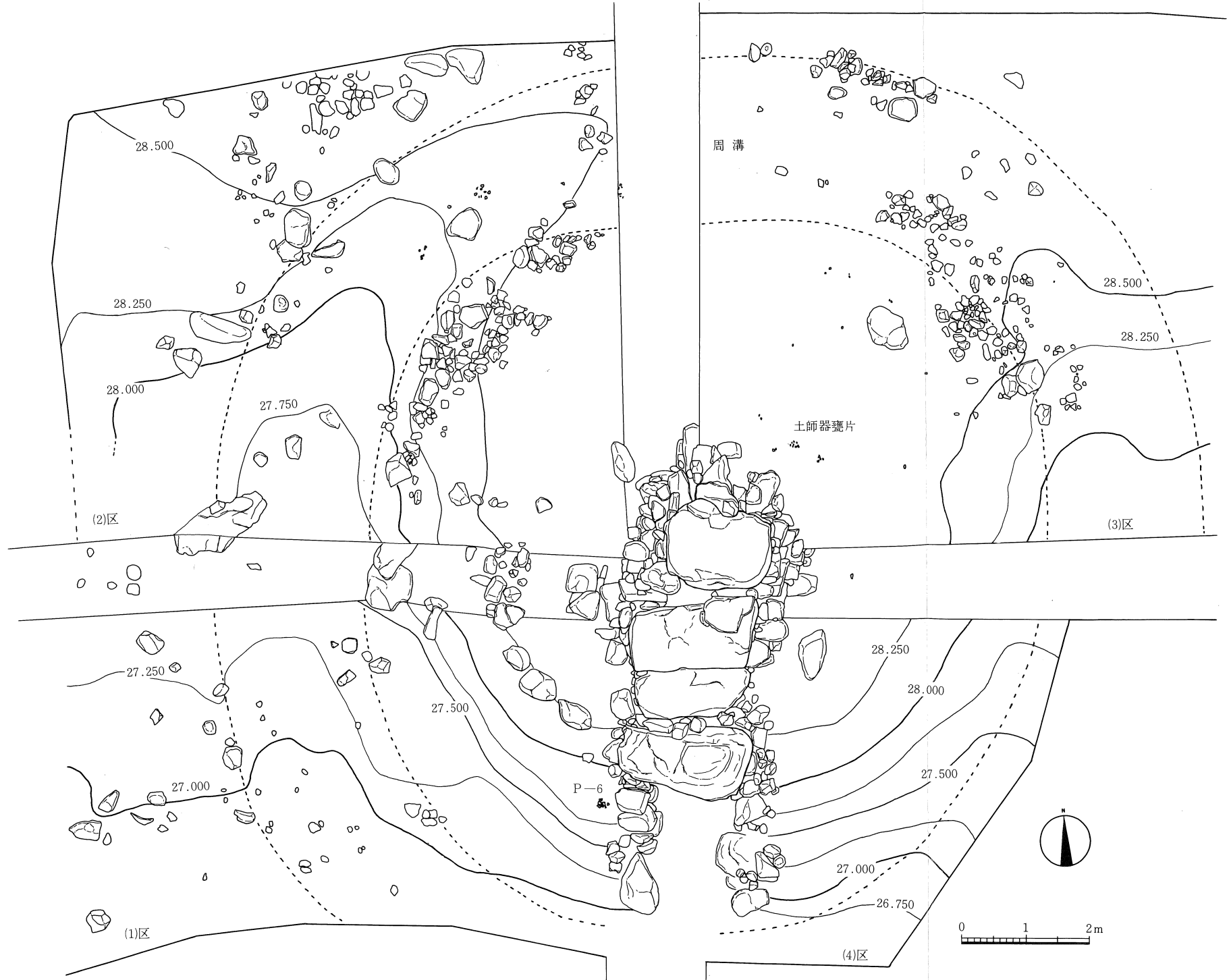
各壁面とも腰石から上の持送りは不揃いであり一定のカーブを描かない。特に西側壁は使用石材の数が多くあっても壁面の凹凸が多い。また、腰石上面レベルのメジ合わせはある程度行っているが、その上位の3段の石積みはメジが通らない。従って、石室壁面構築の工程は2回に大別され、これは墳丘の積層工程とも対応する。

天井石は2枚架構されているが、玄門側と奥壁側ではレベル差があり、両石は密着せず隙間の間詰石が崩落したことと、奥壁側天井石の一部が破損したことにより大量の封土が流入したものと考えられる。玄室中央部の第二次床面からの高さ1.73m、初葬時床面よりの高さ1.85mを測る。

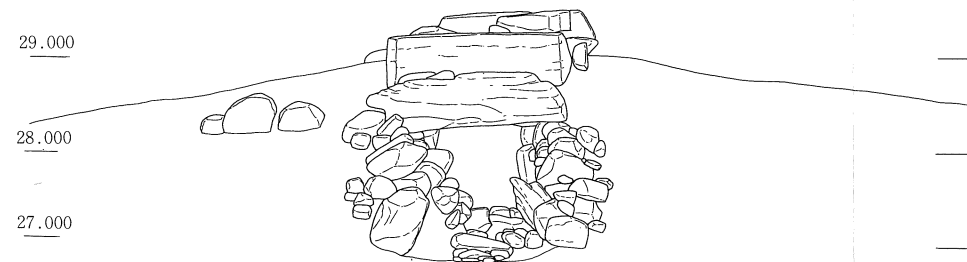
床面は2枚確認され、一部壁面材や間積材が転落していたが最終埋葬時の状況に乱れはないものと考えられる。第二次床面は主に3~10cm大の玉砂利と人頭大の扁平な川原石を用いるが、中央部に玉砂利が多く敷かれる。床面に乱れはなく、奥壁側中央付近に5cmほどレベルの高い扁平河原石がありこれが枕石の可能性もあるが、金環等の遺物は玄門側で出土しており断定は出来ない。遺物は、須恵器坏蓋片2、甕胴部片2、鉄鏃1、金環1と非常に少ない。金環を除き完形品がなく、床面よりわずかに浮いた状況で出土している。従って、これらの遺物全てが最終埋葬に伴うものか、第二次床面の完成時に混入したものが問題となるが、須恵器については最終埋葬に伴うものと考えたい。



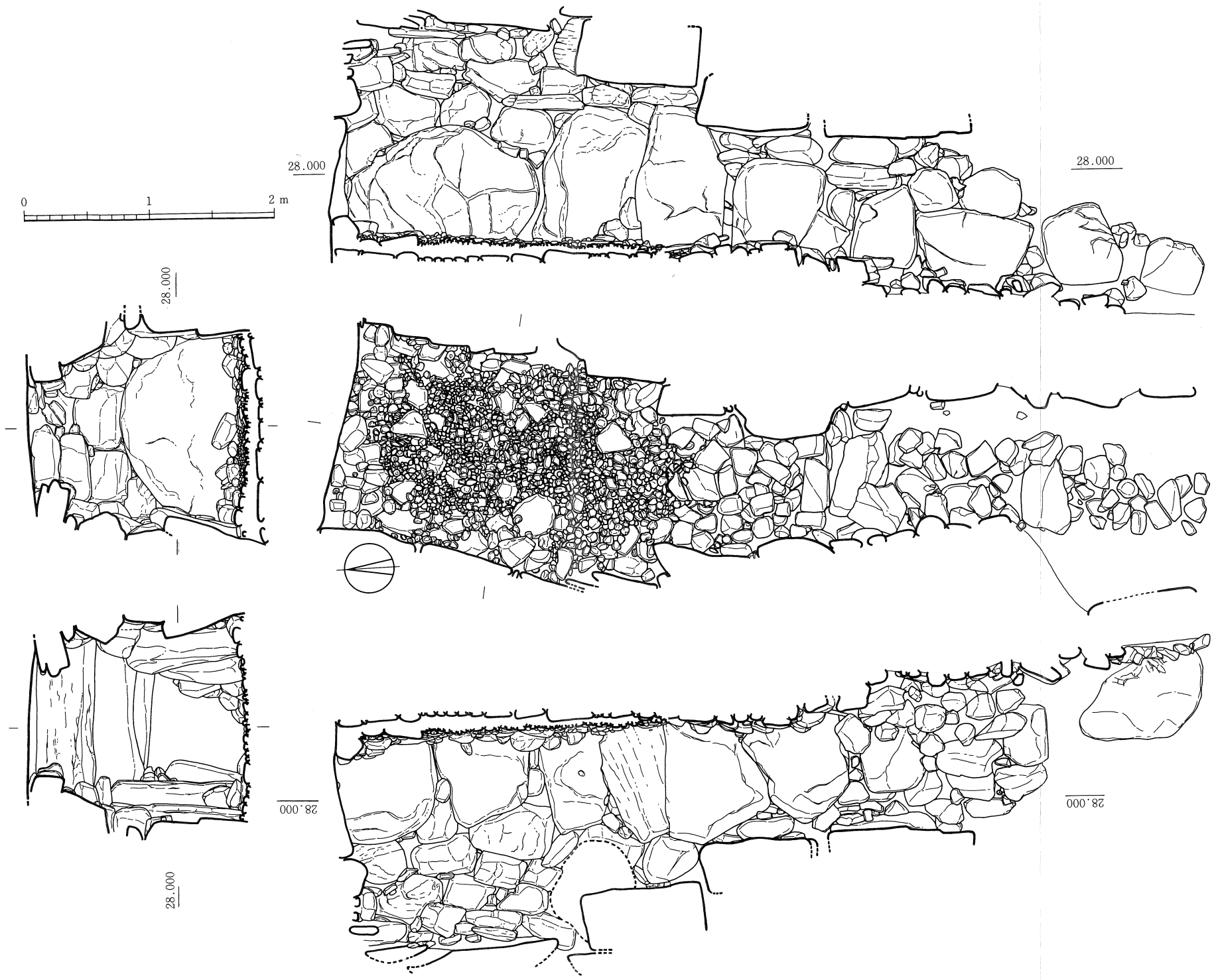
第5-3図 的場2号墳見透し図(1/80)



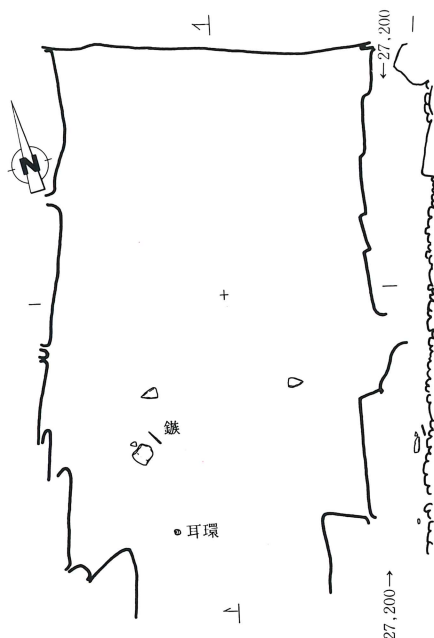
第5-1図 的場2号墳平面図(1/80)



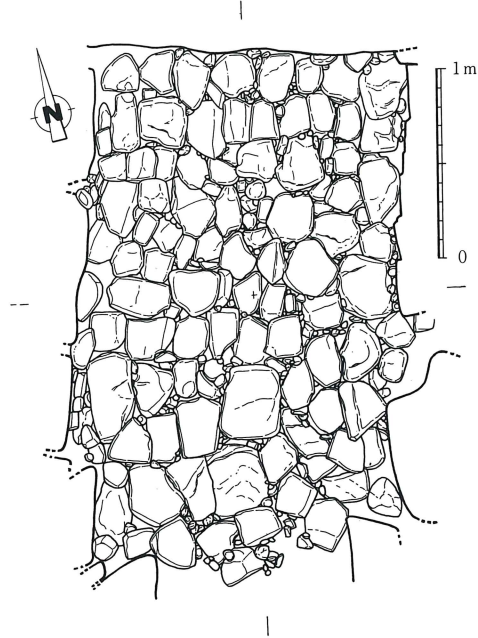
第5-2図 的場2号墳見透し図(1/80)



第6図 的場2号墳石室実測図(1/40)



第7図 的場2号墳玄室内遺物出土状況(1/40)

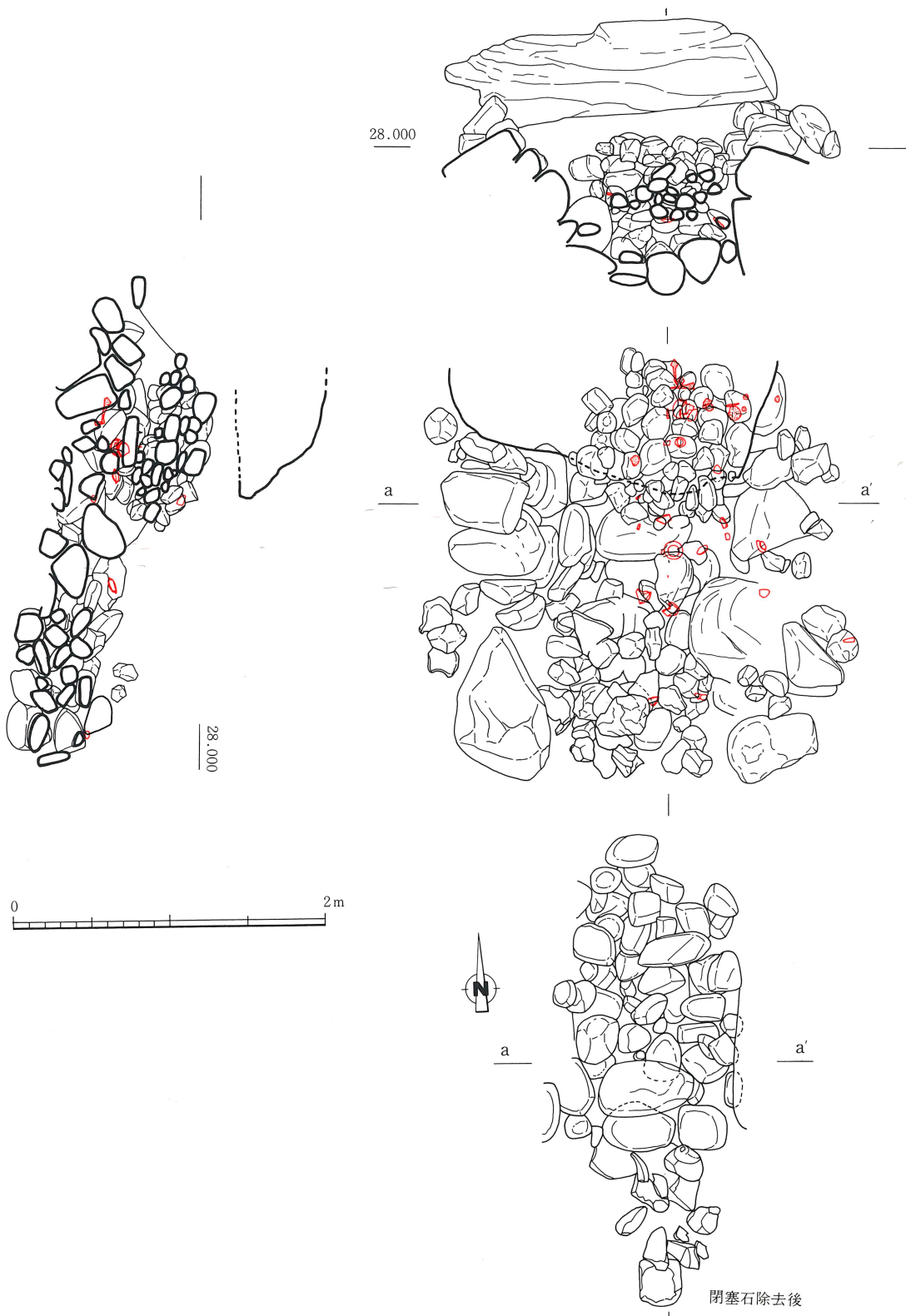


第8図 的場2号墳初葬時床面実測図(同)

初葬時床面は、 $15 \times 20\text{cm} \sim 30 \times 40\text{cm}$ 余の扁平川原石を全面に敷き、隙間に小石を詰める。奥壁側3列はやや小形の石材を縦位に並べ、ややレベルを上げ丁寧に造られることから死床の可能性はある。その他はメジが通らず規格性は認められない。本床面からの遺物の出土は皆無であった。第二次床面とのレベル差は約 $5 \sim 10\text{cm}$ であり、玄門側ではレベル差が少なくなる。

羨道 羨道部は長さ約 4.3m を測り、天井石のかかる後半部とつかからない前半部に分けられ、その境に閉塞部が形成される。前半部入口の両袖石の幅は約 $1.5 \sim 1.65\text{m}$ を測り、西側に広がるが、閉塞部より玄室側は幅約 1m と狭くなる。前半部の長さ約 1.8m で、中央付近に排水溝に伴う小形礫が延びる。羨道後半部は3枚の天井石が覆い、玄室側の1枚は前方2枚より約 35cm 上に両方の天井石として架けられている。東西両壁は構造にやや差が認められる。東側壁は玄室側より次第に低くなる腰石6枚を縦位に配置し、天井石との間は玄室と同様の石材を平積みする。西側壁は玄室側に2枚の大形石材を縦位に置くほかに腰石としての大形の石材は使用せず、人頭大と 0.5m 余の中形の石材を縦・横の両位に不規則に積む。特に基礎部の石材が小さいこともあり、閉塞部付近より羨道前半部の西側壁は内側に崩れ張り出した状態となり、部分的に完全に崩落した所もある。羨道入口より $1.1 \sim 1.5\text{m}$ 、 $2.7 \sim 3.0\text{m}$ の所に $0.4 \sim 0.6\text{m}$ 余のやや大形の石材を横に置き、閉塞部の受石とする。

玄室より2枚目の腰石は東西とも内側にやや突出し、床面に梱石と考えられる石組が設けられ、これより内側は床面が一段高くなり羨門を意識した構造と言えようか。床面には $0.2 \sim 0.4\text{m}$ 余の扁平川原石を全面に敷き、玄門部は素型の両袖である。袖幅は左右とも 0.35m であり、



第9図 的場2号墳閉塞部実測図と遺物出土状況(1/40)

玄門部に特別な施設はない。玄門より梱石の間は前室的性格を有すると言えようか。

遺物は閉塞部と羨道前半部に集中し、閉塞部より玄室側では全く認められない。

6) 閉塞

閉塞部は、羨道入口より約1.1~3.0mの間に設けられ、羨道部の第1天井石前端がその中心よりやや外になる位置に設けられる。入口側と玄室側に0.4×0.6m余のやや大形の石材を根石として横に置き、両根石は受部として充分支持するよう閉塞の中心に各々斜の面を向ける。

閉塞に使用された石材は0.05~0.2m余の小礫を主とし、土砂とともに基底面より約0.9mの高さに山積みする。閉塞頂部と羨道部第1天井石との隙間は約0.1~0.3mと狭いが、完全に密閉したものではない。閉塞部より入口側は墳丘土と羨道前半部東壁の一部が流入する。この間の土層観察では最終閉塞の状況はそのまま遺存することを示す。また、最終閉塞以前の埋葬行為の回数を示すような風化土層等も確認されず、本古墳の埋葬行為は玄室の床面から少なくとも2回は確実である。

遺物は、閉塞部基底部中央から多く出土している。中でも、須恵器坏（第10図5、11、12）、鉄鏃（第12図9~12）、金具（第12図4~6）、杏葉（第12図1）はほぼ同時に置かれた状況を示す。また、入口側根石の周辺からも完形の坏身1（第10図9）と杏葉1（第12図2）が出土し、玄室内の鉄鏃1を除き鉄器の全ては閉塞部床面から出土した。この他、須恵器の小片が閉塞石の間から若干検出されたが、閉塞作業に中断はないものと考えられる。従って、遺物のほとんどは閉塞前の祭祀行為によるものと言えよう。一方、閉塞部外側における完形坏身2や各種須恵器片の出土には閉塞後の祭祀行為に伴うものも認められる。

さて、閉塞部における各種の鉄器は破損品の存在や、器種毎に集中しない出土状況から、本来初葬時副葬品であり、追葬の際再利用したものと考えられる。

7) 遺物

的場2号墳の周溝、墳丘、羨道、閉塞部、玄室の各所から遺物が出土した。閉塞部以外の遺物は少なく断片的であるが、墳丘築成途中の祭祀の可能性を示すものや、羨道部西側墳丘上面の須恵器坏、及び閉塞部・羨道部の遺物は古墳をめぐる各種祭祀行為の存在を示すものとして重要である。また、県下では数少ない杏葉の出土も注目される。しかしながら、同時期の他地域の古墳と比較しても、未掘墳としてはその絶対量が少ないことが特徴の一つと考えられるが、当地域の古墳の調査例が少ないことから地域性と言えるか否かは今後の調査による。

出土遺物の種類は以下のとおりである。

装身具 金環 1

武器 鉄鏃 7 + α

馬具 杏葉 2、辻金具、鋌金具

農工具 刀子

容器 須恵器、土師器

須恵器（第10図） 坏（蓋・身）、高坏（蓋？）、提瓶、平瓶、甕が出土しているが固体数は少ない。

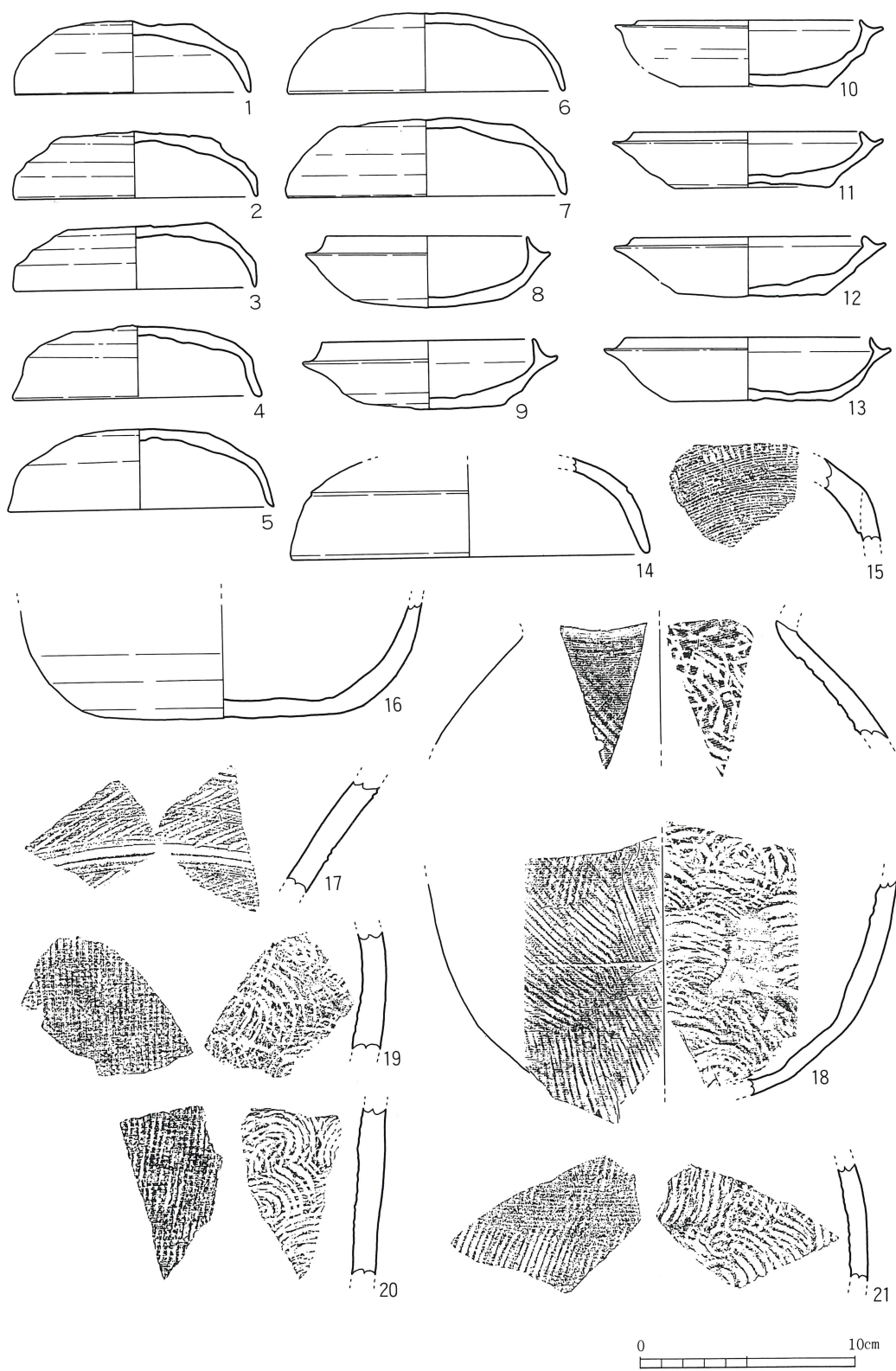
坏蓋（第10図1～7） 7は玄室から、6は(2)区羨道部西側から出土し、他は全て閉塞部とその周辺からの出土である。また、1、2、4は閉塞の外側から、3、5は閉塞部床面からの出土である。器形的には2種に大別される。

1は天井部と口縁部の境ににぶい稜をもち、天井部はやや平坦となりヘラ削りのままである。口径11.0cm、器高3.4cmを測り最も口径の小さいものである。2も平坦な天井部を持ち口縁部とその境がにぶく稜をもつが、口縁部はほぼ直立する。器面調整は1と変わらず、口径11.4cm、器高3.1cmを測る。3は器形・法量・調整等の手法が2と良く類似し同工同胎と考えられる。口径11.3cm、器高3.0cmを測り、玄室内出土の小片と接合したものである。4は天井部がやや丸く口縁部との境で丸く屈曲し、口縁部はやや外に開くが端部は丸く仕上げられる。天井部はヘラ削りののち荒いナデを加える。口径11.6cm、器高3.4cm。5は赤焼須恵器に入るもので、天井部、口縁部ともに全体にやや丸い。天井部はヘラ削りののちナデを加え、口径12.5cm、器高3.7cm。6は5と同様の器形・法量・調整であるが赤焼ではない。口径12.8cm、器高3.7cm。7は、平坦な天井部からゆるい段をもちながら口縁部に続くもので、2、3と同様の器形・調整によるが復原口径が13cm、器高3.6cmと一まわり大きい。

坏身（同 8～13） 8、10、13は閉塞外側から、他は閉塞部床面からの出土である。蓋と同じく2形態認められる。8は口縁部がわずかに内傾ぎみに立ち上がり、受部は短く横に突出する。底部は丸く仕上げられ、ヘラ削りののちナデを加える。口径9.5cm、器高3.3cm。9の口縁部から受部は8と類似するが、底部は屈曲してやや平坦となる。体部下位から底部にかけてはヘラ削りのままである。口径10.1cm、器高3.2cm。

10～13は口縁部の立ち上りが短いものである。10は口縁部が短く内傾ぎみに立ち上り、受部はこれとほぼ同じかやや長く横に突出する。底部は平坦でありヘラ削りののち一部ナデ、口径10.5cm、器高3.1cmを測る。11もほぼ同様の器形を呈するが体部が直線的となる。口径10.6cm、器高2.6cm。12は口縁部がやや丸く仕上げられる他は11と同様の器形をもつ。底部はヘラ削りののちナデを加え、一部橙褐色の色調を呈する。口径11.1cm、器高2.7cm。13は体部がやや丸いが他は上記の坏身と変わらず、口径11.6cm、器高3.0cm。

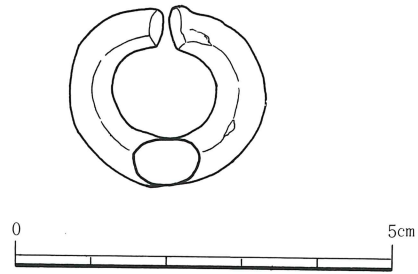
これらの坏蓋と身は組み合さって出土したものはなくセット関係が明確ではないが、5と12は赤焼及び赤焼に近い色調をなし口径もほぼ合うこと、3点一括出土の内の2点であることからセットとみてほぼ間違いない。また、法量や焼成から2と8、3と9、6と13もセットの可能性があり、前2組は出土位置も近接する。従って、閉塞内に3組又は4組の坏が供えられ、閉塞の外に1～3組の坏が供献されたと考えられるが、出土状況からすれば5、11、12を除き個別に利用されたものと言えよう。



第10図 出土遺物実測図1 (1/3)

高坏（第10図14） 採集資料であり本古墳に伴うか否かは断定は出来ない。天井部を欠くが、口縁部との境に段をもち口径も15.6cmと大きいことから高坏の蓋と考えられる。全体の特徴は他の須恵器より古い様相をもち、他古墳から持込まれた可能性が強い。

提瓶（同 15） 閉塞部よりの出土であるが他に同一固体片は出土していない。体部と肩部との境に接合痕が良く残り、外面肩部は並行タタキのちカキ目調整。



第11図 出土遺物実測図2(1/1)

平瓶（同 16） 底部から体部下半の破片で他の部位は認められない。閉塞部外側の羨道入口に近い所から出土した。底部はほぼ平坦となり体部は丸く立ち上がる。体部下位から底部にかけへら削りのまま放置する。

甕（同 17～21） 18は胴部径約22cmのやや小形の甕でいずれも閉塞部外側からの出土である。外面は並行タタキ、内面は同心円タタキによるが、外面肩部付近はタタキをナデ消す。17は口縁部片で凹線間に並行斜線を入れるものである。閉塞内部と(2)区墳丘外部の2点が接合した。19、20は玄室内からの出土で同一固体と考えられるが接合はしない。いずれも内側に上に出土しており容器として再利用された可能性もある。21は閉塞部外側からの出土で、前2者と同様の調整である。

装身具

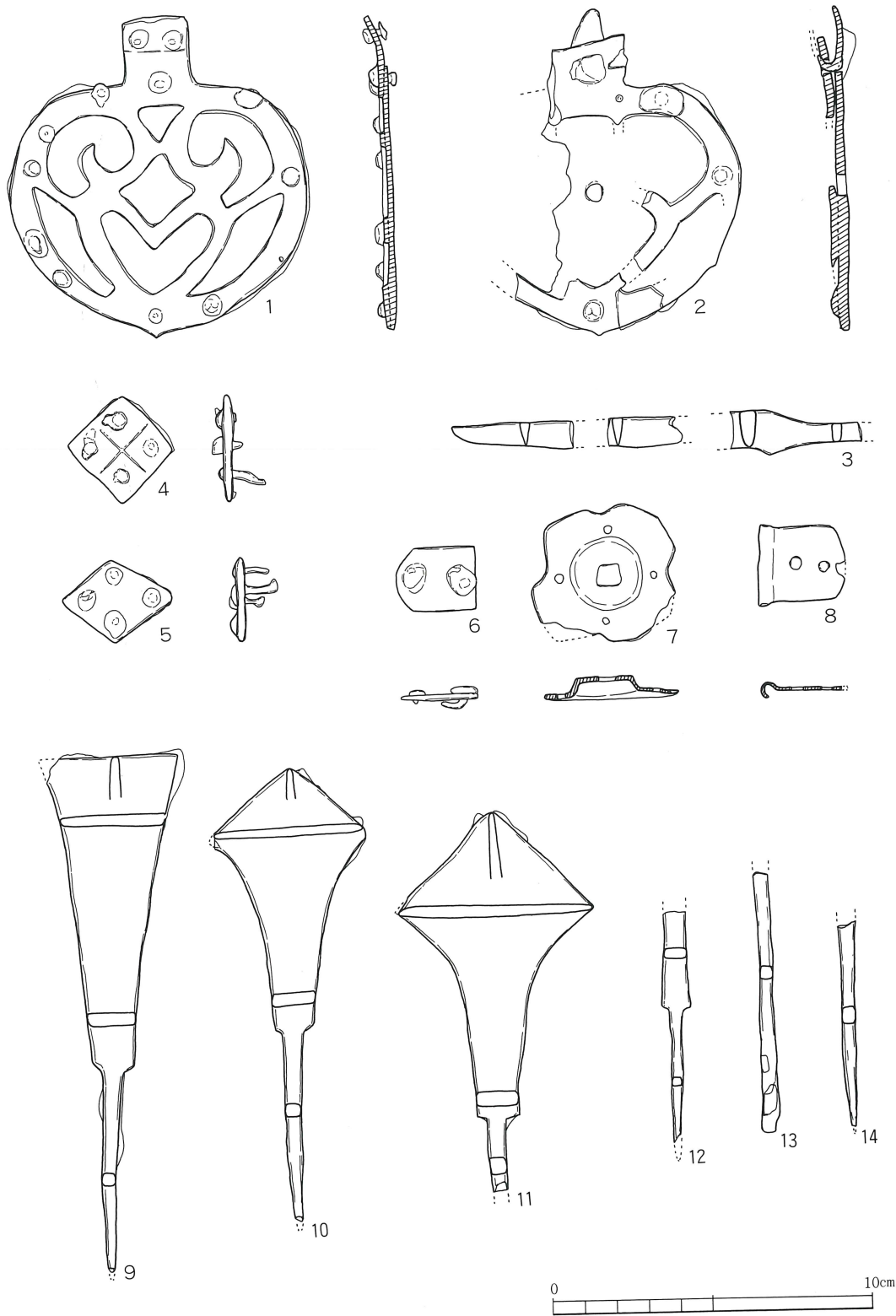
金環（第11図） 玄室内床面の玄門付近から1点のみ出土した。銅地金張であり、断面は6.5×9mmの楕円形を呈する。外径24×26mmとわずかに横長となる。玄室内床面付近の土は全てフルイにかけたが玉類等の装身具は他に全く出土しなかった。

鉄器（第12図）

杏葉（同 1、2） いずれも心葉形杏葉であるが立聞等に差異がある。1は鉄地に鳳凰文の退化形態と思われる文様を切抜いた鉄板を張り、11個?の鉾で周縁を留める。立聞部は幅2.1cm、長さ2.2cmの方形で透かし孔はない。鉤金具との連結は2個の鉾で留める。幅9.5cm、長さ10.1cm、周縁厚さ0.2cmを測る。閉塞部床面から3～11の鉄器とともに出土した。

2は、閉塞入口側根石の西側から単独に出土したものである。全体に錆化が進み全形を留めないが、文様や大きさは1と同様と思われる。立聞は幅2.2cm、長さ1.6cmの方形を呈し中央に円形又は心葉形の透かし孔をあけ鉤金具と連結する。また、中央部にも直径0.5cmの円孔が穿たれ、周縁の鉾は7個現存する。長さ9.5cm、復原幅10.2cm、周縁の厚さ0.3cm。

鉤金具（同 4～6） 4、5は菱形を呈し、その四角付近に鉾を打つもので、4には鉾を区



第12图 出土遺物実測图 3 (1/2)

画する斜十字形の浅い抉込みを入れる。4は幅3.4cm、長さ3.2cm、厚さ0.3cm。5は幅3.4cm、長さ2.6cm、厚さ0.2cm。6は長方形の一辺を丸くしたもので長辺に並行する鋸2をもつ。長軸2.5cm、短辺2.0cm、厚さ0.2cm。

辻金具（第12図7、8）7は中央に直径約2cmの円形の段を設け、その中央部に一辺0.6～0.8cmの不整形の透かし孔を穿つ。周縁部は4弁の花弁状に仕上げるが抉込みや花弁の整形はやや雑である。抉込み部の内側に0.2cm余の小円孔を4つ入れる。8は5と同様の平面形を呈し、中央部に径0.3cm余の小孔を並列に穿ち、短辺の一方を丸く折曲げるもの。2.8×2.5cm、厚さ0.15cm。

刀子（同3）同一固体と考えられるものが3点に分れて出土したが接合せず茎部も欠損するため全長は不明である。刃部中央付近の幅1.0cmで断面三角形である。

鉄鏃（同9～14）計7点出土しているが全形の分かるものは3本しかない。13は玄室内から、他は全て閉塞内部床面付近からの出土である。また、矢柄の木質部を留めるものは1点もない。

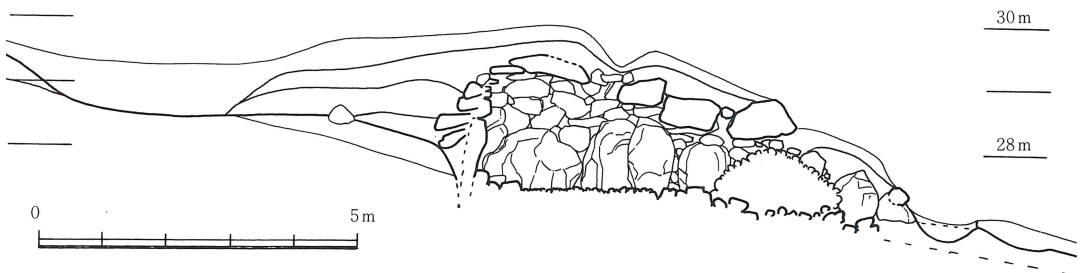
9は方頭尖根斧箭式鏃で、先端部と茎部の一部を欠くが全長16.5cm余のほぼ完形品である。10、11は圭頭斧箭式鏃で、いずれも尖根になるものと考えられる。頭部幅4.9cm、6.2cm、復原長約14.5cm、18cmと11がやや大きい。13は広根式の可能性の強いもので、頭部を欠き他の鉄鏃の一部が錆着する。従って、玄室内出土のこの一例も本来初葬時副葬品の可能性が強い。

第Ⅲ章 総 括

的場古墳群は、杵築市大字八坂字的場に所在する4基の円墳からなり、今回調査を実施した的場2号墳は、約 10° 余の傾斜をもつ丘陵裾部に造られた古墳である。直径約11m、比高約3.5m、周囲を幅約2.5mの周溝が囲み、主体部は南向に開口する横穴式石室である。石室は両袖単室の横穴式石室であり、玄室は長さ約2.6m、幅約1.6mの長方形プランを呈し、主軸方位は $N-14^{\circ}-E$ とやや東に寄る。羨道部は玄室と主軸を変え、 $N-5^{\circ}-E$ とほぼ南に開口する。長さ約4.3mと長く伸び、天井石の架かる後半部(約2.5m)と前半部(約1.8m)からなり、その境に閉塞部が設けられる。

主体部は旧表土である黒ボク土を除去し地山を掘込み構築するが、墳丘の積層は黒ボク土を基盤とし、地山整形はあまり行っていない。石室と墳丘積層の工程は大きく3回に分けられ、腰石上面付近までの第1回が終了したのち、土師器甕を破碎し散布する祭祀行為が認められる。玄室からは2枚の床面が検出され、少なくとも2回の埋葬行為を示す。初葬時床面は、人頭大の扁平な石を敷き奥壁に沿い死床と考えられる部分が形成される。第2次床面はその上に5~10cmの厚さに玉砂利を敷く。2回以上の埋葬の可能性については完全に否定は出来ないが、人骨も遺存せず出土須恵器に明確な時期差はない。従って、比較的短期間の使用であり、追葬も1回に留まると考えられるが、第2次床面形成以前に土器等遺物の供献を伴わない追葬が行なわれた場合、埋葬行為の回数は明らかにし難い。

玄室内出土の遺物は非常に少ない。第2次床面出土の鉄鏃、金環はその出土状況から再利用された可能性が強く、これに伴うと考えられるものは坏蓋1(口縁部2/3を欠く)と甕胴部小片2にすぎない。遺物の大半は閉塞部床面からの出土であり、須恵器坏(蓋2、身3)に加え鉄鏃、馬具等の鉄器の全てはこの部分から検出された。これらの鉄器は本来初葬時における玄室内副葬品^{註1}と考えられ、追葬にあたりかき出され再利用されたと判断される。この他、閉塞部外側からも完形坏(身1、蓋1)を含む若干の須恵器片が出土している。これらの容器類は、玄室内と閉塞部の坏身接合例を含め、打ち欠き供献するものと、完形のまま供献するものの2形態が認められる^{註2}。



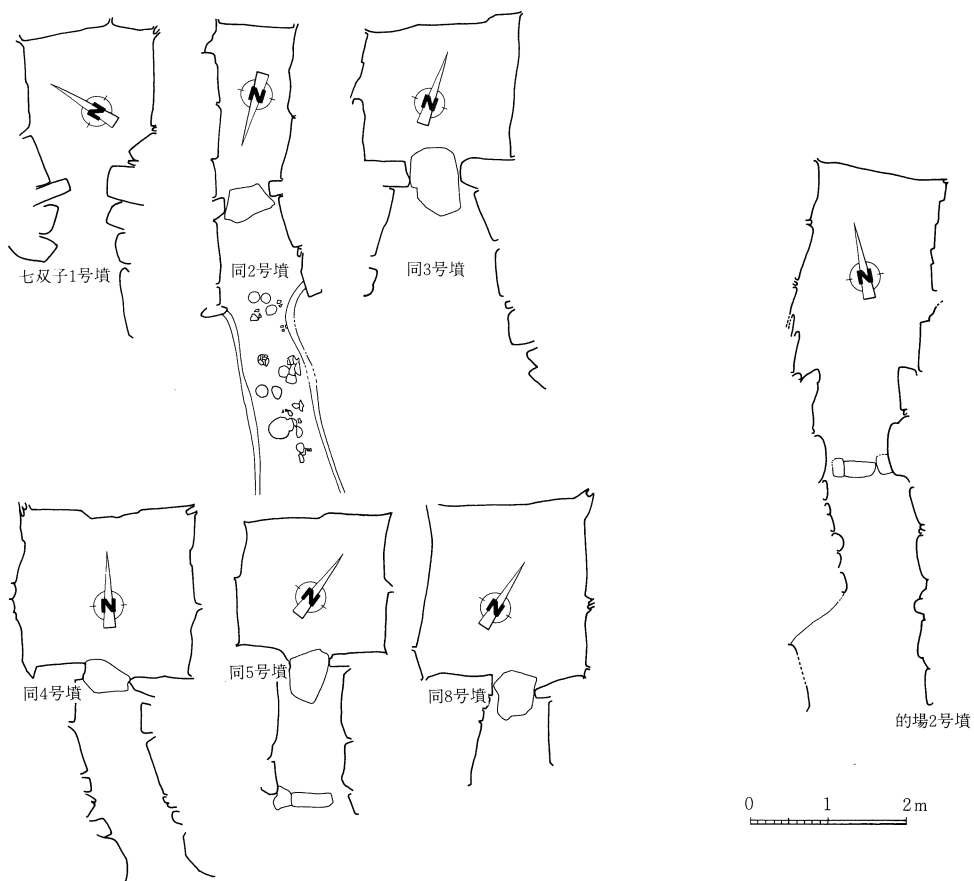
第13図 的場2号墳墳丘縦断模式図

須恵器坏身には口径9.5～10.1cmとやや小さいが口縁部の立ち上りが比較的高いものと、口径10.5～11.6cmを測り口縁部が短く立ち上るものがある。前者には天井部の平坦な蓋が、後者には天井部が丸みをもつものが各々組み合わさる。両者の出土状況に差はなく同時使用されており、この形態差が明確な時期差を示すものではない。また、坏に認められる器形・調整・法量等の特徴は小田富士雄氏須恵器編年のⅣ期、小林昭彦・高橋徹氏編年のⅡ期、村上久和・吉田寛氏編年の草場窯段階に比定されるものに共通する。その実年代は7世紀第1四半期に比定されており、本古墳の最終埋葬（追葬）もこの時期に考えられよう。また、初葬時副葬品と考えられる杏葉については、岡安光彦氏の心葉形鏡板・杏葉編年のⅥ期に位置付けられるものであり、7世紀初頭から前葉に比定されている。従って、的場2号墳は7世紀初頃の造営で、追葬も比較的短期間に行われ、7世紀第1四半期内に埋葬行為は終了したと考えられる。

ところで、的場古墳群と同じ八坂川流域古墳群の中で、七双子古墳群（1～8号）の調査は当地域群集墳の唯一の調査例である。みかん園の造成による破壊を受け墳丘や石室の一部は失われているが、石室プランについては比較検討の資料となる（第14図）。石室プランには3種が認められるが、いずれも6世紀中頃～後半の築造であり、2～3回の追葬が認められる。石室プランは長方形石室に羨道と墓道がつく2号墳（Ⅰ類）、方形石室に「八」字形の羨門をもつ1、3、8号墳（Ⅱ類）、方形石室にやや長い羨道部をもつ4、5号墳（Ⅲ類）がある。玄室床面はいずれも扁平礫を敷き、2、3号墳の玄室からは装身具（玉類、銅環、銅釧）と鉄器類（鏃、剣、鎌、刀子）のみ出土し、羨道や墓道に須恵器を中心とする容器類が集中する。また、8号墳からは馬具が出土している。

この中で、2号墳は豎穴系横口式石室の系統を引くもので石室構造はやや異なるが石室プランは的場2号墳と類似する。玄室は幅約1m、長さ2mを測り、奥壁に1枚、右側壁に2枚、左側壁に4枚の腰石を置く。腰石から上は扁平な石材を平積する。羨道部は玄室主軸と方位を変え北西に開口し、墓道が続く。玄室の規模は本古墳が大きく羨道も発達するが、腰石の配置や個数、床面の構造、玄室と羨道の主軸の屈曲状況は良く類似する。また、七双子2号墳からは的場2号墳と同型式の須恵器も出土しており、この段階の追葬の可能性もある。従って、的場2号墳の石室は七双子2号墳の石室の系譜を引くものと考えて大過ないであろう。

一方、的場古墳群や七双子古墳群を含む八坂川流域古墳群は、八坂川の上流から八坂地区グループ、本庄地区グループ、南杵築地区グループの3群に地理的状况から分けられる。この中では本庄地区グループの古墳が総計28基と最大である。この一群は、箱式石棺を主体とし5世紀代に推定されるものから6世紀後半代の七双子古墳群まで造墓活動の連続性を認めて良い。また、振文鏡・方格規矩文鏡各1面を保有する重光古墳など古墳群中の盟主的存在も知られ、本庄地区が八坂川流域の奥津城と言えよう。



第14図 的場2号墳、七双子1～5・8号墳石室平面図

八坂地区グループの古墳群は的場古墳群に加え阿弥陀寺1、2号の計6基と少数である。これらはいずれも横穴式石室を主体部とする直径10～15m余の小円墳と思われ、6世紀後半～7世紀前半代の比較的短い造営・埋葬活動と推定されよう。また、八坂川流域ではその沖積地の最も奥部に形成され、的場2号墳出土の杏葉は当該期の一般の古墳にほとんど認められないことなどからすれば、当地区の古墳群は八坂川の水利権に関係するクラスとも考えられるが、決して突出した存在ではなく一般の群集墳と同じく家長層とその近親者の範囲に留まるものと言えようか。^{註11}

また、杵築市内には本古墳群を含め多くの群集墳や古墳が今なお現存するが、石室実測図など基本的資料の整備は立ち遅れており、その保存とともに基本資料の作成・収集・整備が当面の課題である。

- 註1 杏葉や鉄鏃、刀子は一部欠損しており、鋌金具や辻金具も一連の出土状況を示さない。また、玄室出土の鉄鏃は頭部を欠き、基部には他の鉄鏃の一部が錆着していることから原位置を保つものではないと考える。
- 註2 これらの須恵器は初葬時の供献・副葬であり追葬時に再利用された可能性も少なくないが、埋葬行為に大きな時期差はなく同一型式内と考えられよう。
- 註3 小田富士雄「九州の須恵器序説」『九州考古学』22号,1964。
- 註4 小林昭彦・高橋 徹「豊前地方における須恵器」『考古学ジャーナル』NO.274,1987
- 註5 村上久和・吉田 寛・宮本 工「豊前における初期瓦の一様相—大分県中津市伊藤田窯跡群で生産された初期瓦—」『古文化談叢』第18集,1987
- 註6 岡安光彦「心葉形鏡板付鬘・杏葉の編年」『考古学研究』139,1988
- 註7 賀川光夫・入江英親・小田富士雄他『七双子古墳群』大分県文化財調査報告書第八集,1962
- 註8 真野和夫氏が既に指摘している。真野和夫「古墳時代」『大分の歴史』(1),1976
- 註9 千光寺古墳群(1～6号)はいずれも箱式石棺を主体部とする。
- 註10 このような状況は、高山川流域古墳群においても認められる。この中でシラハゲ古墳からは須恵器、玉類とともに獅嘯環頭太刀が出土しており、盟主的存在と思われる。
- 註11 杵築市内では横穴墓は存在するもののその数は少なく、群集墳が盛行する。調査例が少ないことから断定は出来ないものの、出土遺物は横穴墓と大差はなく、ほぼ同じ階層の造営と考えられる。

図 版
PLATES

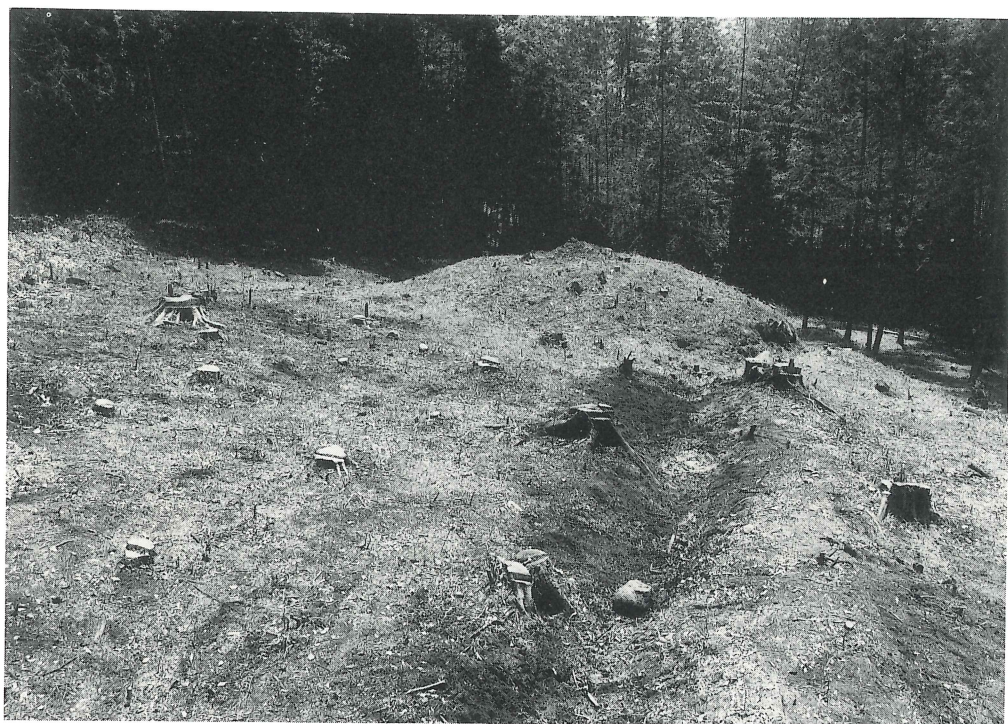




図版1 的場2号墳遠景(西から)



図版2 同



図版3 的場2号墳調査前(西から)



図版4 同(南から)



図版5 的場2号墳墳丘断面(4トレ)



図版6 同墳丘断面(3トレ)



図版7 的場2号墳墳丘断面(3トレ周溝部)



図版8 同 閉塞部断面(1トレ)



図版9 石室、周溝全景(西から)



図版10 同(南から)



図版11 閉塞状況



図版12 同除去後



図版13 閉塞受部根石



図版14 遺物出土状況(閉塞部)



図版15 鉄器出土状況



図版16 同 杏葉



图版17 土器、鉄器出土状況



图版18 同



図版19 羨道部と排水施設



図版20 玄室(羨道部より)



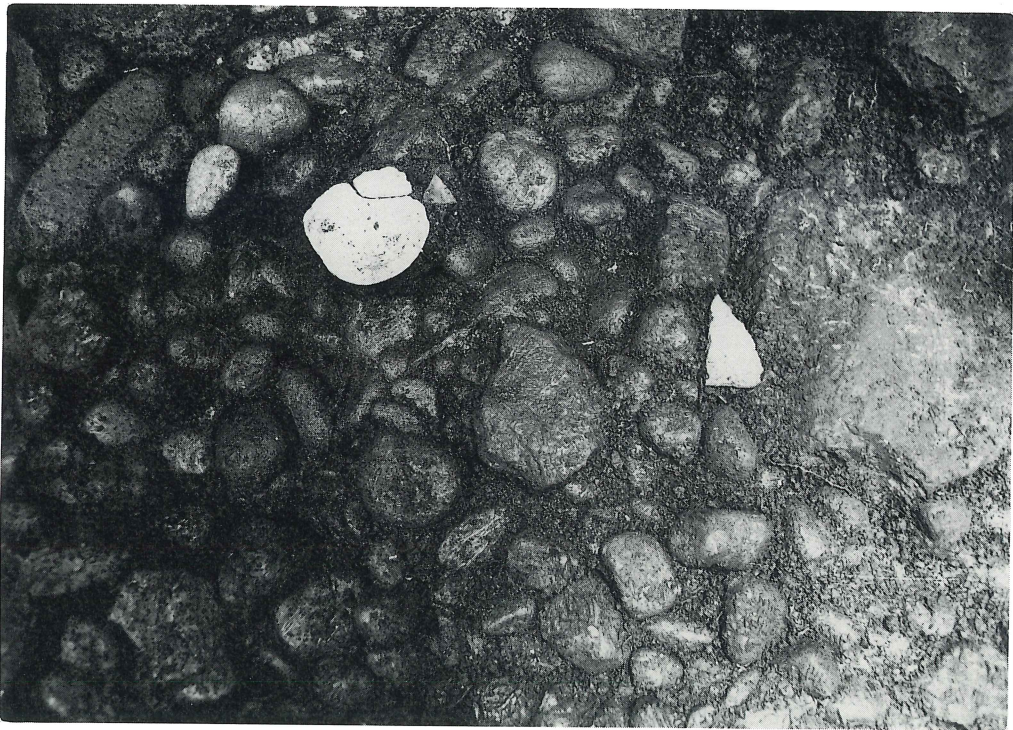
图版21 玄室



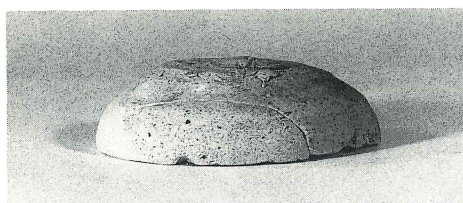
图版22 第二次床面



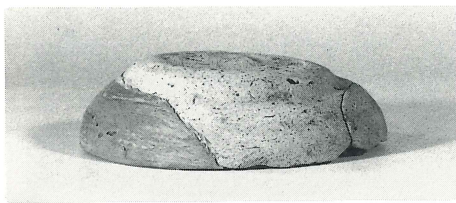
图版23 初葬時床面



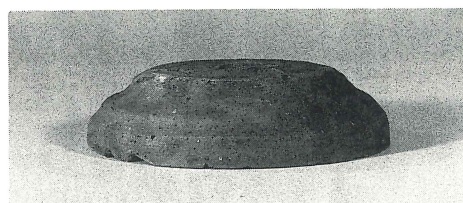
图版24 玄室内遺物出土狀況



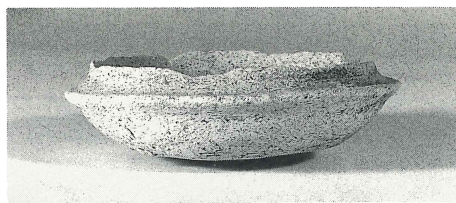
图版25 坏盖(1)



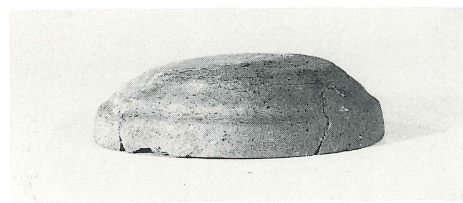
图版31 同(7)



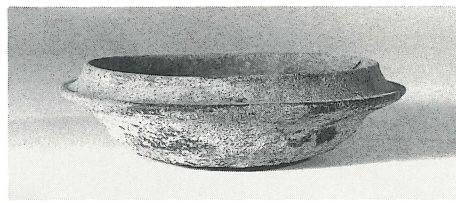
图版26 同(2)



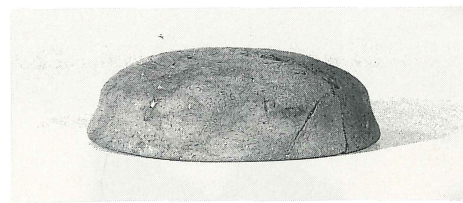
图版32 坏身(8)



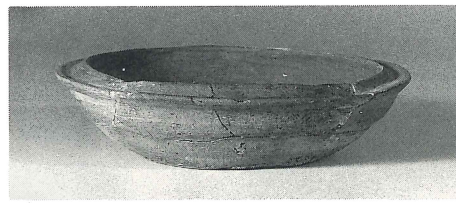
图版27 同(3)



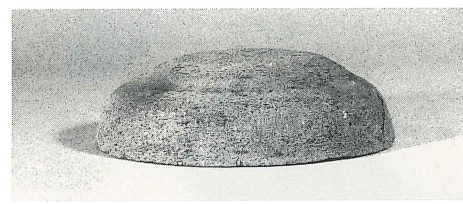
图版33 同(9)



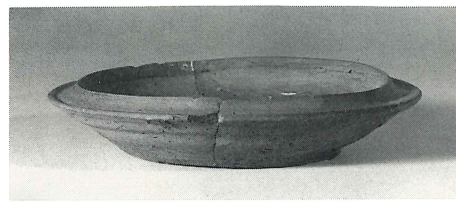
图版28 同(4)



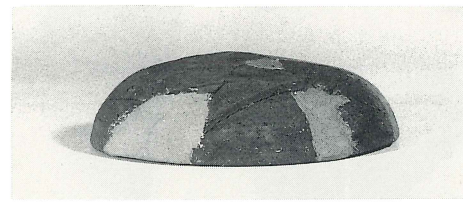
图版34 同(10)



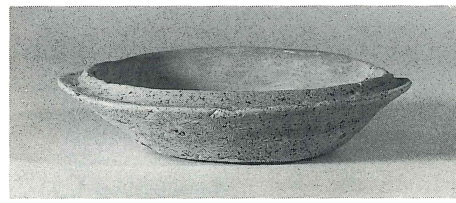
图版29 同(5)



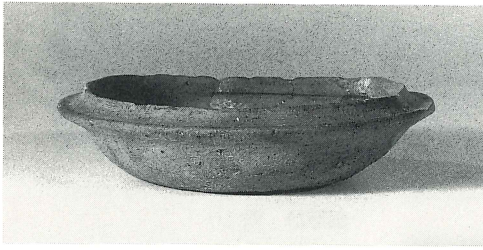
图版35 同(11)



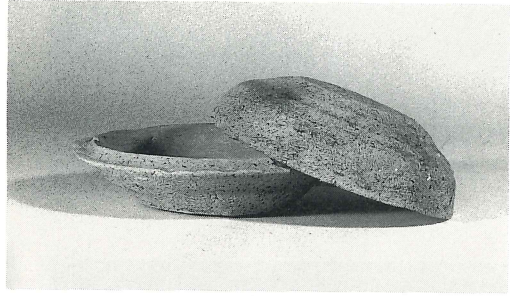
图版30 同(6)



图版36 同(12)



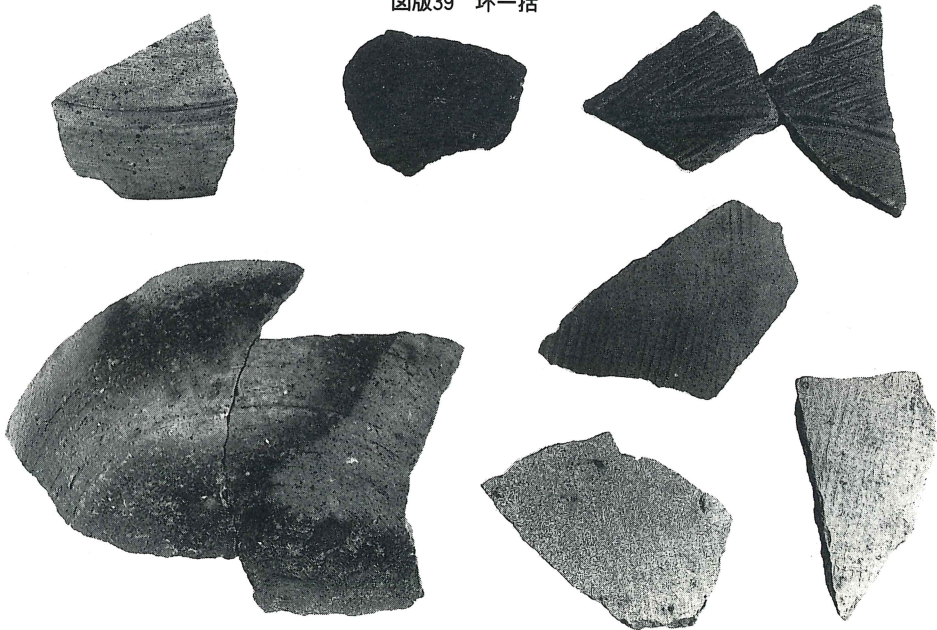
図版37 同 (13)



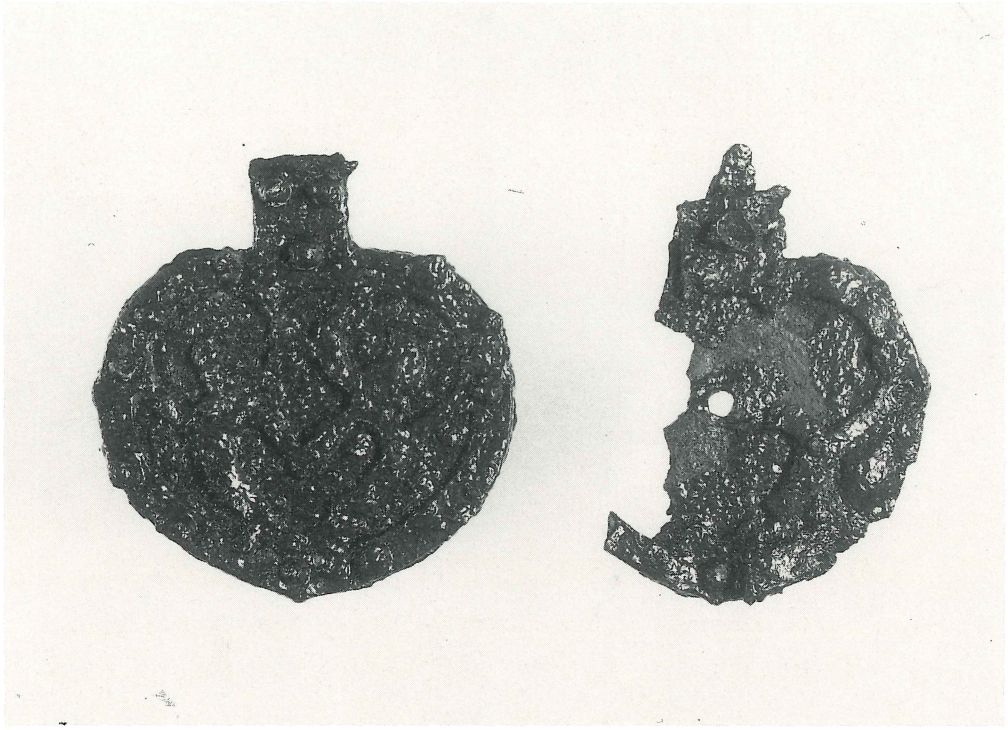
図版38 坏セット(5、9)



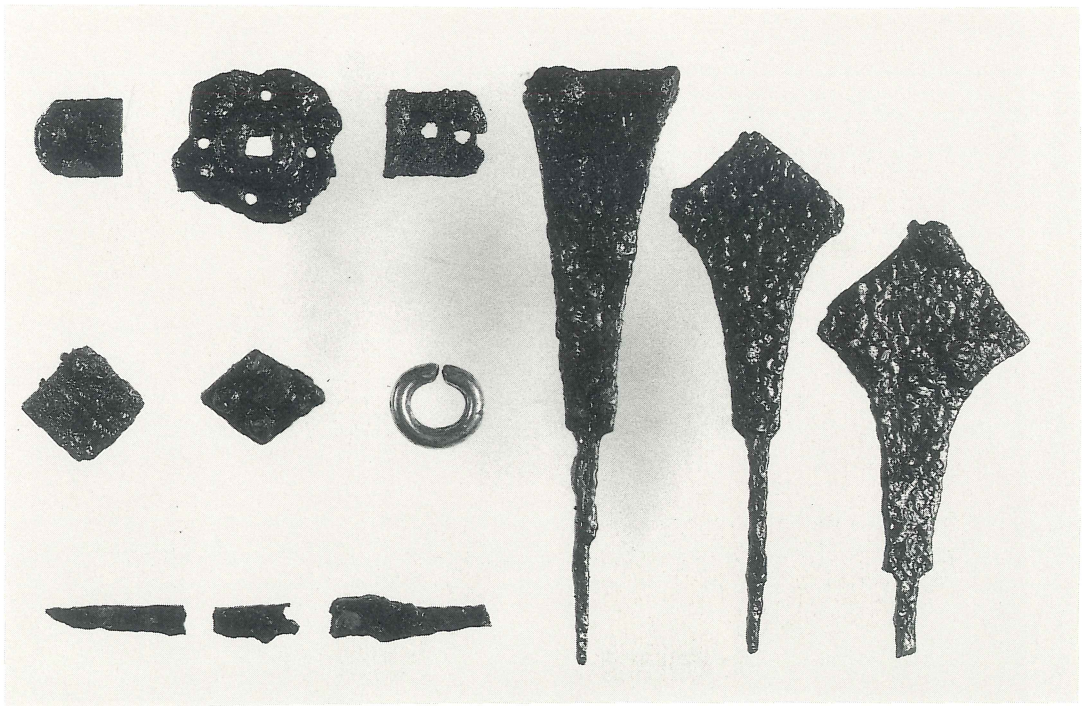
図版39 坏一括



図版40 高坏、平瓶、提瓶、甕



図版41 杏葉



図版42 鉄鏃、辻金具、鋏金具、金環、刀子

IV 塩屋伊豫野原遺跡

目 次

第Ⅰ章 はじめに	165
1. 調査の経過	165
2. 調査団の構成	165
3. 遺跡の立地と歴史的環境	166
第Ⅱ章 調査の概要	168
1. 遺跡の概要	168
2. C地区、C拡張区の遺構	171
1) 集積遺構	171
2) 登窯遺構	177
3. 出土遺物	179
1) 土器	179
5) 石器	196
第Ⅲ章 まとめ	208

挿図目次

第1図	塩屋伊豫野原遺跡位置図	165
第2図	安岐町およびその周辺に所在の主要遺跡地図	167
第3図	発掘調査区および試掘時出土遺物実測図	169
第4図	C調査区地形図	170
第5図	1号集石実測図	171
第6図	2号集石実測図	172
第7図	3号集石実測図	173
第8図	4号集石実測図	174
第9図	5号集石実測図	175
第10図	6号集石実測図	176
第11図	1号窯実測図	177
第12図	2号窯実測図	178
第13図	出土遺物分布図	181
第14図	土器実測図 (1)	184
第15図	土器実測図 (2)	185
第16図	土器実測図 (3)	186
第17図	土器実測図 (4)	187
第18図	土器実測図 (5)	188
第19図	土器実測図 (6)	189
第20図	土器実測図 (7)	190
第21図	土器実測図 (8)	191
第22図	土器実測図 (9)	192
第23図	土器実測図 (10)	193
第24図	土器実測図 (11)	194
第25図	土器実測図 (12)	195
第26図	石器実測図 (1)	201
第27図	石器実測図 (2)	202
第28図	石器実測図 (3)	203
第29図	石器実測図 (4)	204
第30図	石器実測図 (5)	205
第31図	石器実測図 (6)	206
第32図	石器実測図 (7)	207
第33図	塩屋伊豫野原遺跡のNRM方向、地磁気永年変化曲線とNRM測定値(・印)	211

図版目次

図版 1	C地区発掘状況（上） 1号集石	217
図版 2	旧石器	218
図版 3	押型文土器	219
図版 4	無文土器および須恵器	220
図版 5	石鏃	221
図版 6	石斧その他	222

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

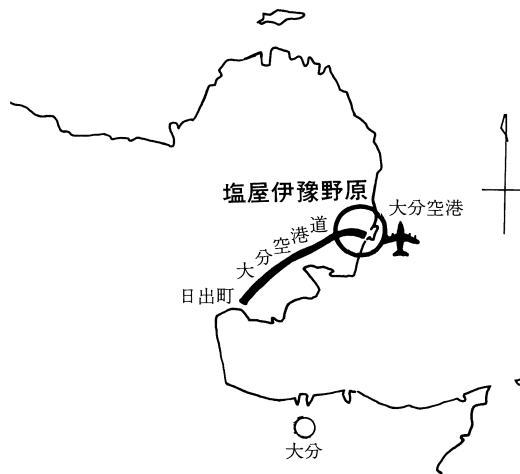
大分県空港道路建設に伴う埋蔵文化財調査は、昭和59年度から実施した路線内の分布調査をふまえ昭和62年度5月以降、試掘調査や本調査を実施してきた。塩屋伊豫野原遺跡は、昭和62年の夏に第13調査地点として試掘調査したものである。旧石器時代、縄文時代、弥生時代に所属する遺物が確認されたため、同年10月15日から昭和63年2月末にかけて本格的調査を行ったものである。

2. 調査団の構成

(所属、役職は調査当時のもの)

調査指導委員	賀川 光夫	別府大学教授、県文化財保護審議会委員
	小田富士雄	北九州市立考古博物館館長
	伊藤 晴明	島根大学教授
	時枝 克安	島根大学助教授
調査委員	後藤 昭六	大分県教育庁管理部文化課課長
	後藤 宗俊	大分県教育庁管理部文化課主幹
	清水 宗昭	県文化課埋蔵文化財第1係長
調査担当	高橋 徹	県文化課埋蔵文化財第1主任

また、発掘調査中、坂本嘉弘、宮内克己、高橋信武、宮下貴浩の諸氏には実測等の協力を得た。



第1図 大分空港道路路線図

3. 遺跡の立地と環境

塩屋伊豫野原遺跡は、国東郡安岐町大字塩屋字伊豫野原にある。瀬戸内海に突出する国東半島の東岸中央部に位置する。国東半島は中央部の文殊山や両子火山から延びた放射状谷とその流域に特色がある。半島の海岸線は、谷部を流れる河川によって形成された小規模な沖積地や、凝灰岩を基盤とし、その上に堆積したローム層からなる丘陵、古砂丘等で構成された地形となっている。当該遺跡もこうした丘陵上に展開するものである。

安岐町の中央をほぼ東西に流れる安岐川周辺に遺跡が集中するが、とりわけ左岸域に目立つ。各遺跡とも正式に調査されたものが殆ど無く、実体はよくわかっていない。

旧石器時代、縄文時代の遺跡としては、本町においては当遺跡以外は知られていないが、隣接する国東町や杵築市をはじめとする半島東岸には同時代の著名な遺跡が少なく無く、今後の発見が予想される。日出町早水台遺跡や、杵築市稲荷山遺跡は、東九州における縄文時代早期の押型土器型式の標識遺跡として著名な遺跡である。

弥生時代の遺跡としては安岐町内山遺跡、北浜遺跡、尾払池遺跡があり、弥生時代前期末～中期、後期、終末の各時期に属する土器片が出土している。隣の武蔵町内田遺跡や熊尾遺跡でも、弥生時代前期の板付式系統の壺形土器や下城式土器を出土しており、別府湾沿岸に到来し、かつ展開した弥生文化の一端を垣間見ることができる。

古墳時代の遺跡としては安岐町下原の下原前方後円墳が注目される。これは安岐川左岸河口付近に築かれたもので、中世田原氏が築城した安岐城(跡)によって破壊されていた。

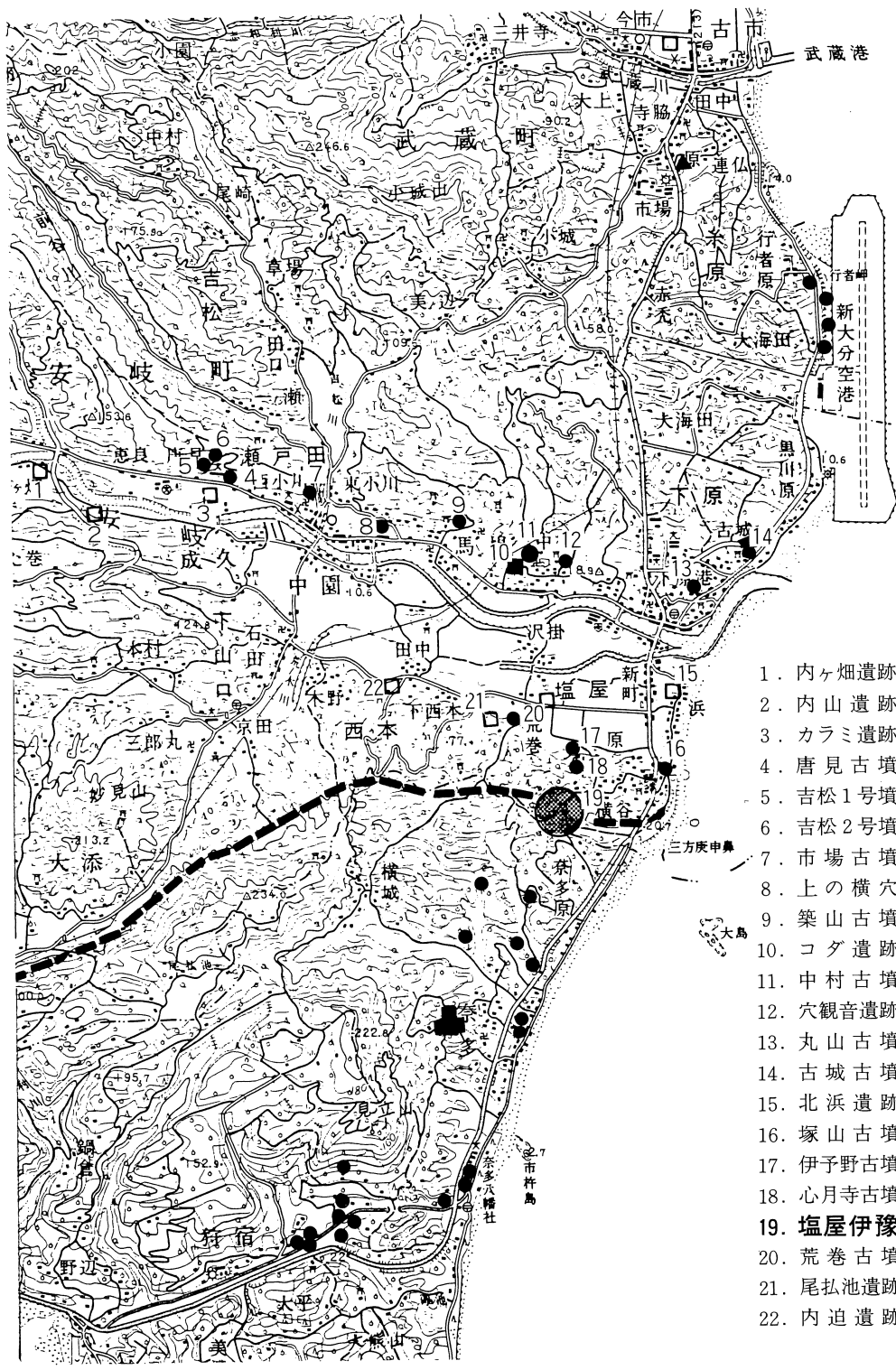
全長25m、後円部径15mで後円部中央に円や角礫を積上げた竪穴式石室が設けられ、周濠からは手焙り形土器や壺形土器が出土している。それらは県内最古の前方後円墳として有名な宇佐市赤塚古墳とほぼ同一時期に比定できる。

安岐川左岸の丘陵部に存在する築山古墳は前方後円墳といわれており、周辺から人物埴輪や鳥形埴輪、円筒埴輪片が表面採集されている。6世紀代のものと思われる。

円墳も10数基存在するが、内部構造が判明しているのは県指定の塚山古墳のみである。これは安岐町原に所在する径25m、高さ8.0mの円墳で、内部主体は単室の横穴式石室である。明治末年に盗掘をうけ、室内からは鉄刀や短甲(?)が出土したと伝えられている。石室は左右に細長い玄室プランで、天井も持ち送り気味で非常に高く築かれており独特である。出土須恵器は6世紀前半のものである。

歴史時代の遺物としては大字中村のコダ遺跡で、土師器や緑釉陶器、布目瓦が採集されており、平安時代の遺構が存在している可能性がある。大字朝来の久末京徳遺跡は8世紀後半～9世紀中頃に用いられた25棟の掘立柱建物が調査されている。

参考文献 『安岐城跡・下原古墳』大分県文化財調査報告第76輯、1988年 『安岐町史』安岐町、1967年



- 伊予灘
1. 内ヶ畑遺跡
 2. 内山遺跡
 3. カラム遺跡
 4. 唐見古墳
 5. 吉松1号墳
 6. 吉松2号墳
 7. 市場古墳
 8. 上の横穴
 9. 築山古墳
 10. コダ遺跡
 11. 中村古墳
 12. 穴観音遺跡
 13. 丸山古墳
 14. 古城古墳
 15. 北浜遺跡
 16. 塚山古墳
 17. 伊予野古墳
 18. 心月寺古墳
 19. 塩屋伊豫野原遺跡
 20. 荒巻古墳
 21. 尾弘池遺跡
 22. 内迫遺跡

■■■■■ 空港道路
 ▲ 縄文時代 □ 弥生時代 ● 古墳時代 ■ 歴史時代

第2図 安岐町およびその周辺に所在の主要遺跡地図

第Ⅱ章 調査の概要

1. 遺跡の概要

塩屋伊豫野原遺跡は安岐町大字塩屋字伊豫野原に所在する。建設予定の空港道路が国道213号線と再び合流する場所で、同国道と、町道唐野線および安岐・奈多線に囲まれた範囲である。仮にA～C区の3地区を設定し、それぞれの地区について試掘と本調査を実施した。

(A、B地区)

AおよびB地区は東西方向に細長く延びる低丘陵で、海拔20～28mの等高線が緩やかに東に張り出している。黒色の火山灰が60～80cmの厚さに覆っており(I、II層)、10cm内外の漸移層(III層)をへて明横褐色のローム層(IV層地山)にいたる。これまでミカン畑として使われており、この明横褐色ローム層の地山にまでミカンの木根がおよんでいた。その為かA地区B地区とも明確な遺構は検出されず、時期を特定できない土器片や石材がII～III層から攪乱状態で出土するのみであった。ただB地区の西部において、弥生時代後期の壺が上半部のみではあるが1個体分出土しており、かつては同時代の遺構が存在していた可能性がある。

(C地区)

C地区は調査対象区の西端に位置する。比較的傾斜の強い斜面で、調査時点では段々畑や雑木林として使われた。標高45m～35mの等高線で囲まれる範囲の斜面の基本的な土層は以下のとおりである。

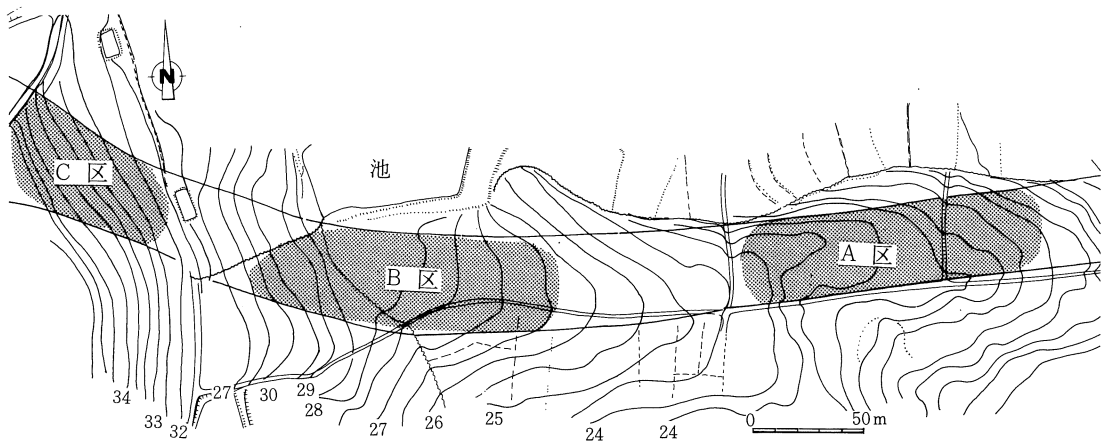
I層：表土層で、調査時は竹の根等が無数に入り交じった赤褐色土。厚さ10～20cm。

II層：20～30cmの厚さで、I層とIII層の灰褐色土が混在した土層。遺物を多量に含む。

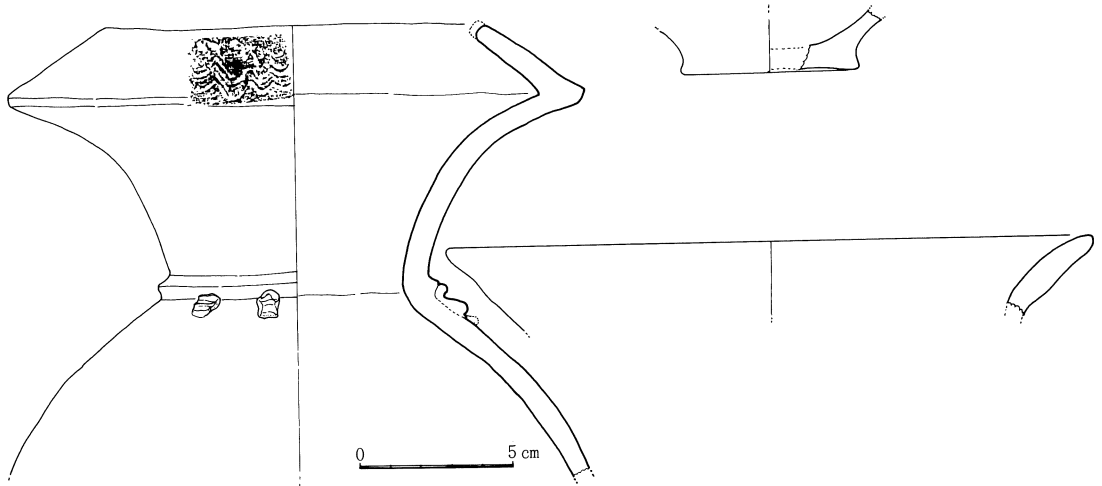
III層：凝灰岩の風化土層で、灰褐色をしている。これの下層は固くしまっており、当地区の地山となっている。本土層は基本的には遺物を含んでおらず、無遺物層である。

以上のように、C地区の土層はA、B両地区でみられた黒褐色や明黄褐色の火山灰を欠いている。傾斜の強い斜面なのでそれらの火山灰は流失し、厚く堆積しなかったのかもしれない。

C地区では試掘の段階で多数の押型文土器片が出土したため、東西70m、南北50mの範囲を本調査対象区域として表土を除去し、遺構の検出に努めた。その結果6基の集石遺構と、22基の登窯を検出した。C地区の北側でも1基の登窯が発見されたためここをC地区拡張区とする。C地区の調査対象区域に一辺10m四方の格子を設け、東西方向に1～7の、南北方向にA～Eのアドレスをつけている。



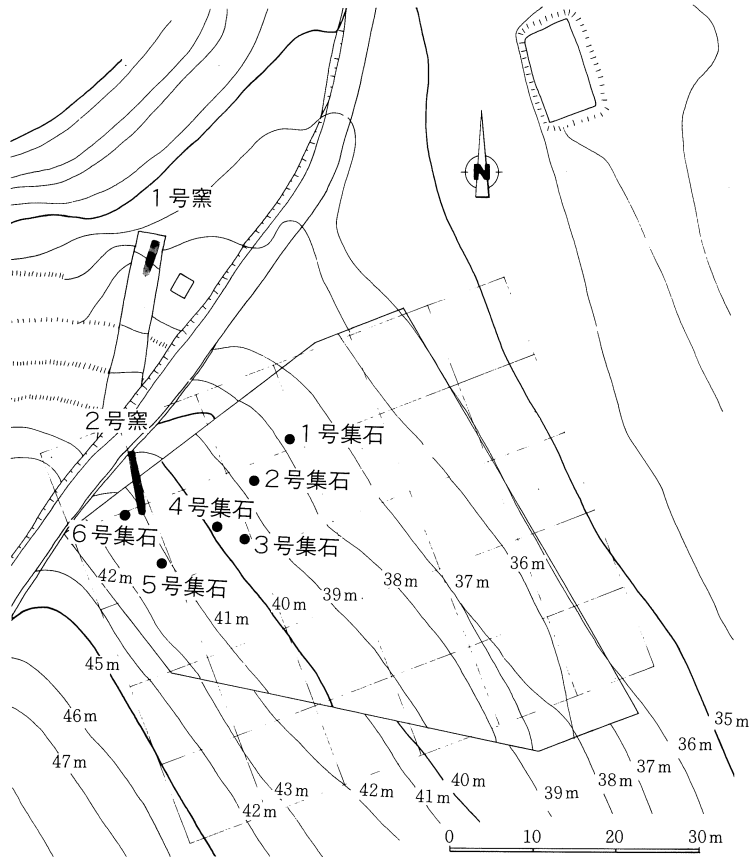
発掘調査区



弥生式土器実測図（試掘時出土）

逆くの字状の口縁部全面に、櫛描波状文を施す。頸部に1条の突帯をめぐらし、ちょうネクタイ様の粘土紐を配す。外面はタテあるいは斜め方向の刷毛目で調整される。

第3図 B区出土遺物実測図



第4図 C調査区地形図

2. C地区、C拡張区の遺構

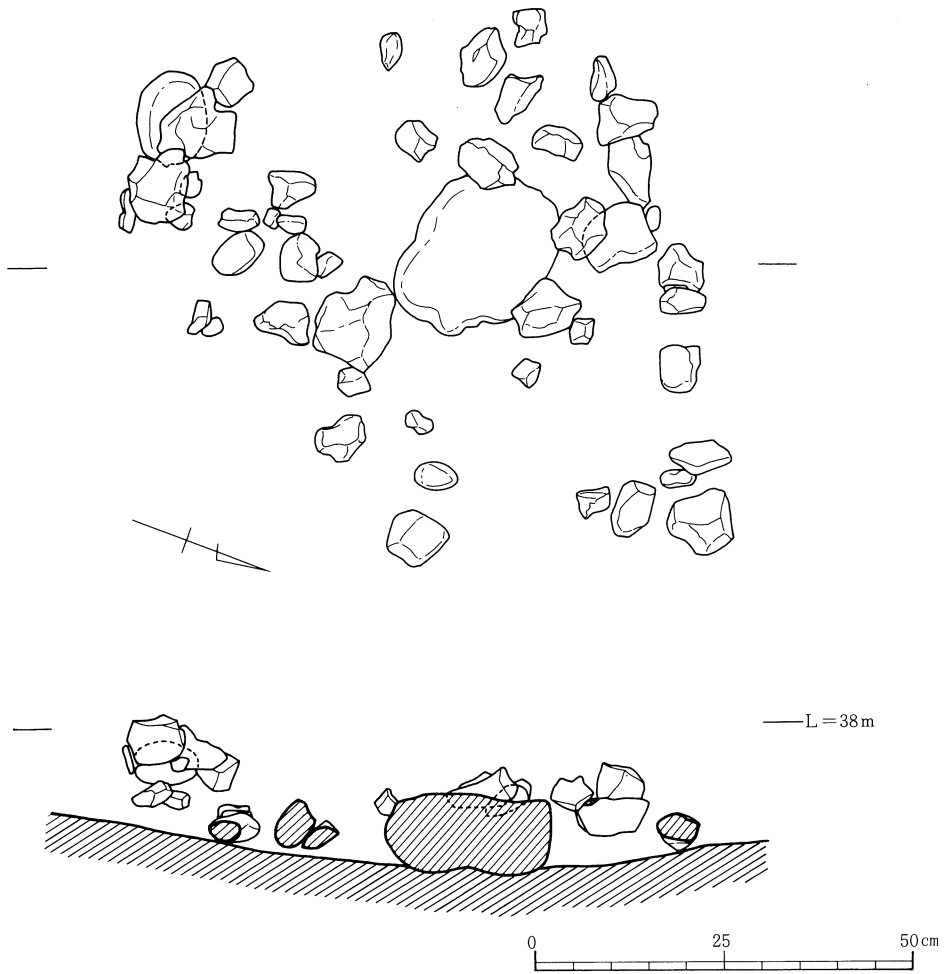
当該地区において検出された遺構は6基の集石遺構と2基の登窯である。柱穴やその他の遺構は確認されていない。

1) 集石遺構

6基の集石遺構は南北10m、東西25mの範囲に集中する。等高線の流れに沿って南南西から北北東方向に分布する。各集石は7～8mの距離をおいて配置されている。

1号集石遺構（第5図）

A-3調査区の東南隅にある。Ⅱ層中部において検出され、その下部はⅢ層上面にやや届かない。扁平な人頭大の石を中心にして、拳大の礫が周囲に雑然と散在している。焼土や炭化物等は見当たらず、礫群も加熱を受けているとは断定しがたいものであった。礫群に関係すると思われるような掘り込み等は認められなかった。

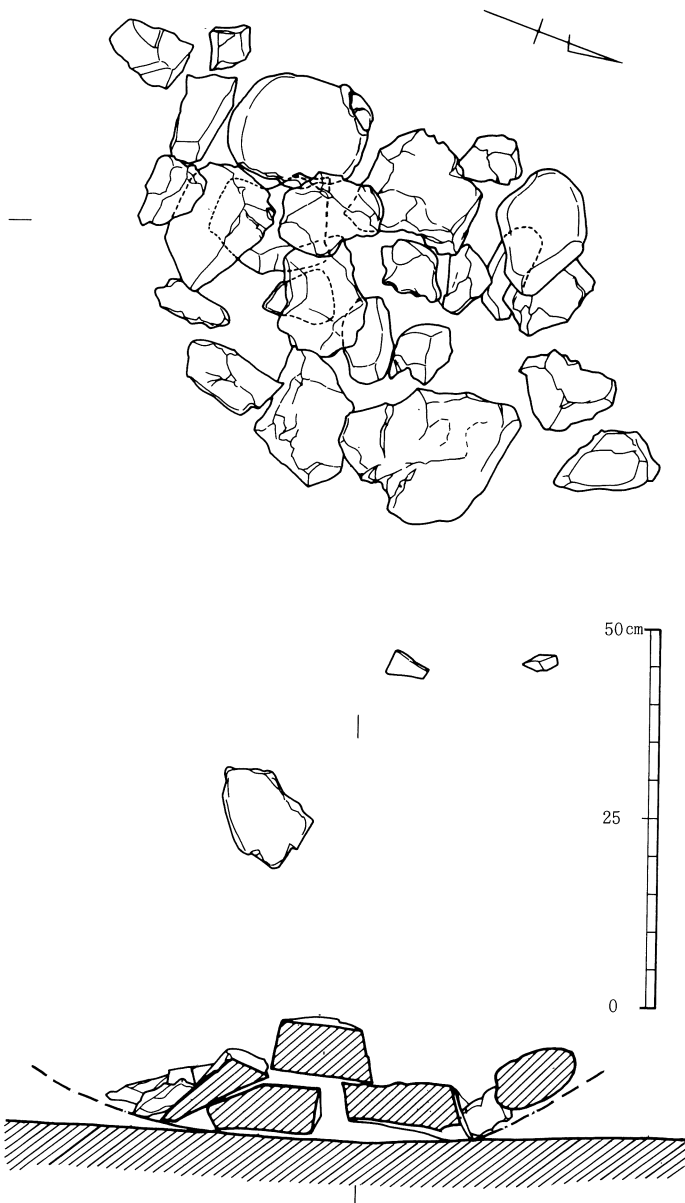


第5图 1号集石

2号集石遺構（第6図）

B-3 調査区の北西隅に位置し、集石の範囲は1 m×1 mと比較的集積度が濃いものである。明瞭に検出されなかったが、集石の状況からみて平面円形で浅い皿状に掘り込まれた土壌が設けられていたと思われる。

安山岩の礫は比較的扁平なもので、15cm～20cm程度の大きさ。火熱を受けたものも認められたが集石の隙間周辺に炭化物や灰の類は確認できなかった。



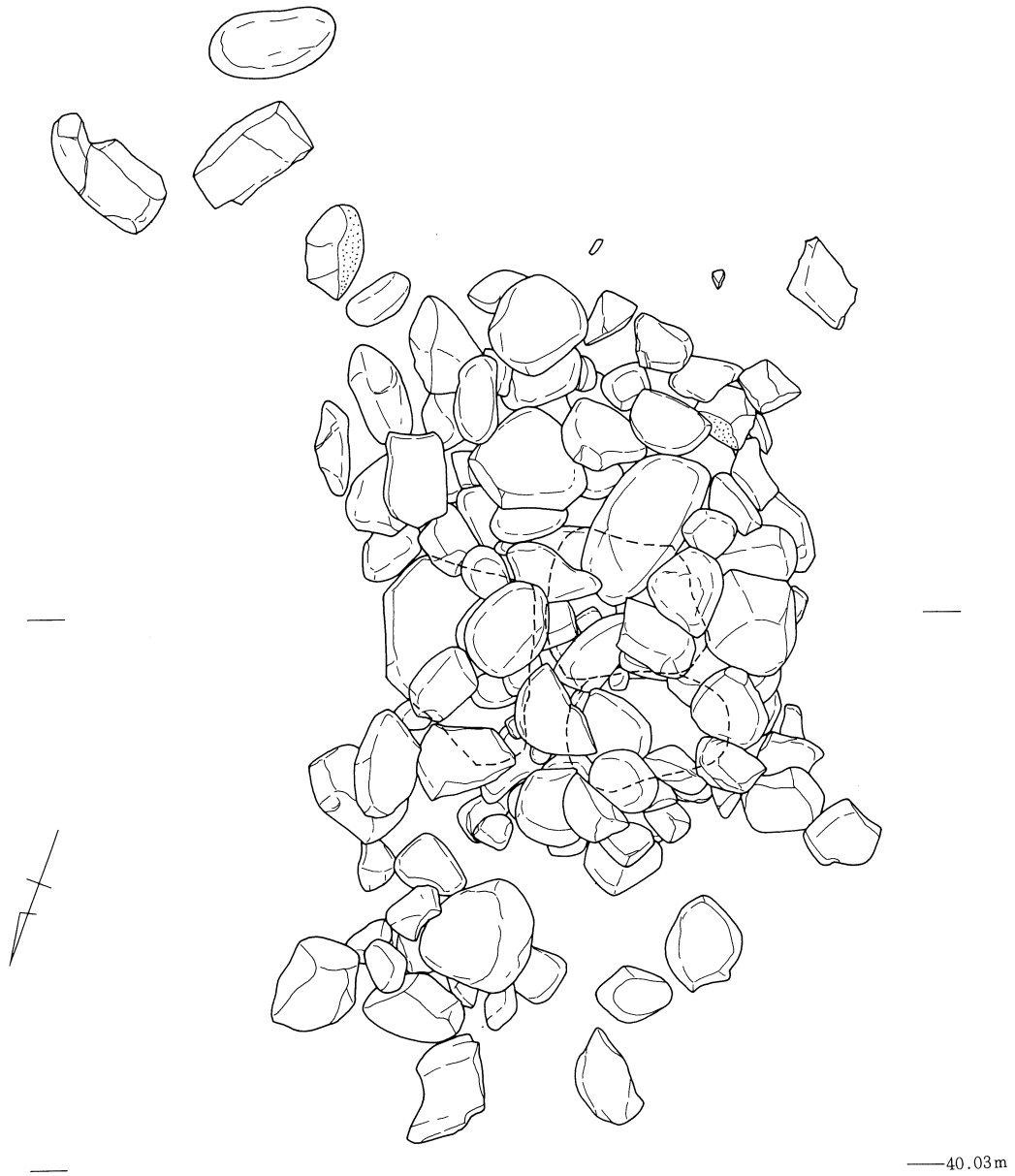
第6図 2号集石

3号集石遺構（第7図）

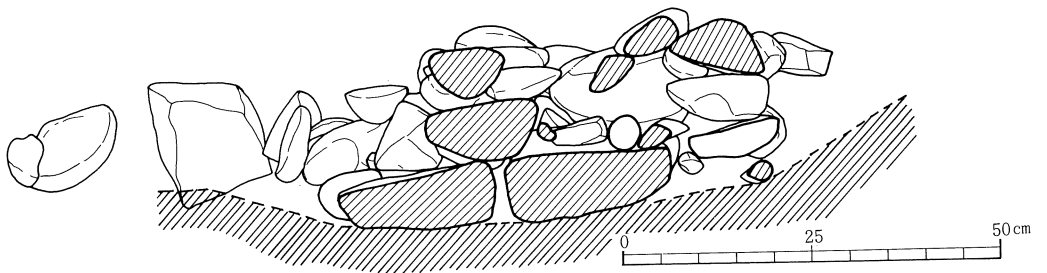
B-2 調査区南東隅に位置する。他の集石遺構に比べると残り具合が良いもので、およそ100個以上の集石からなる。

Ⅲ層上部に、比較的大きめの3個の扁平な石を据え、これらを中心にするようにして拳大の円礫が積み重ねられている。

礫はほぼ80cm×120cmの範囲に集積しており、本来直径80cm程度の円形皿状土壌が設けられていたであろう。礫の近くで姫島産黒曜石のチップが一点出土している。



—40.03m



第7图 3号集石

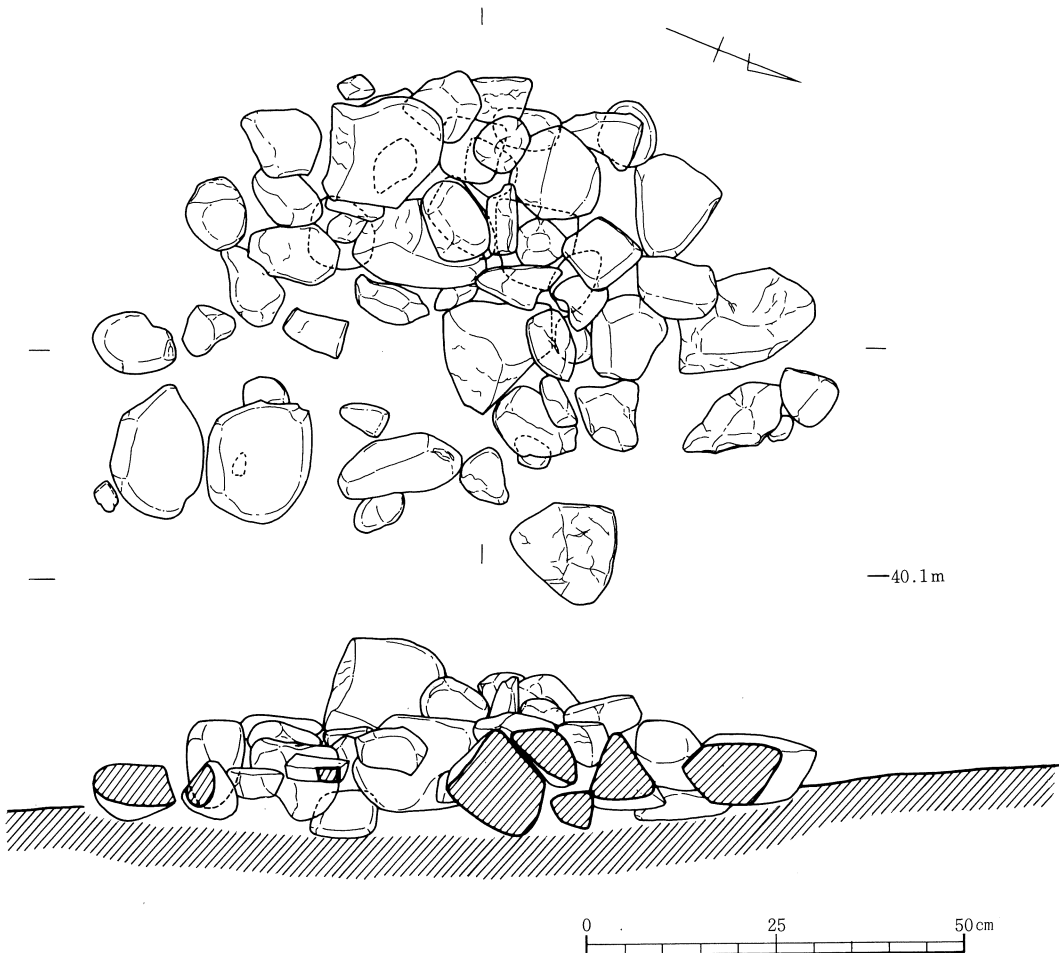
4号集石遺構 (第8図)

B-2 調査区にあり、3号集石の約4m北西に位置する。集石は本来、直径80cm~90cmの円形を呈していたと思われる。すなわち現状は集石の西半分が失われた状態である。大きさ15cm~20cmの塊石が主で、その隙間を埋めるように5cm~6cmの小礫が混じる。

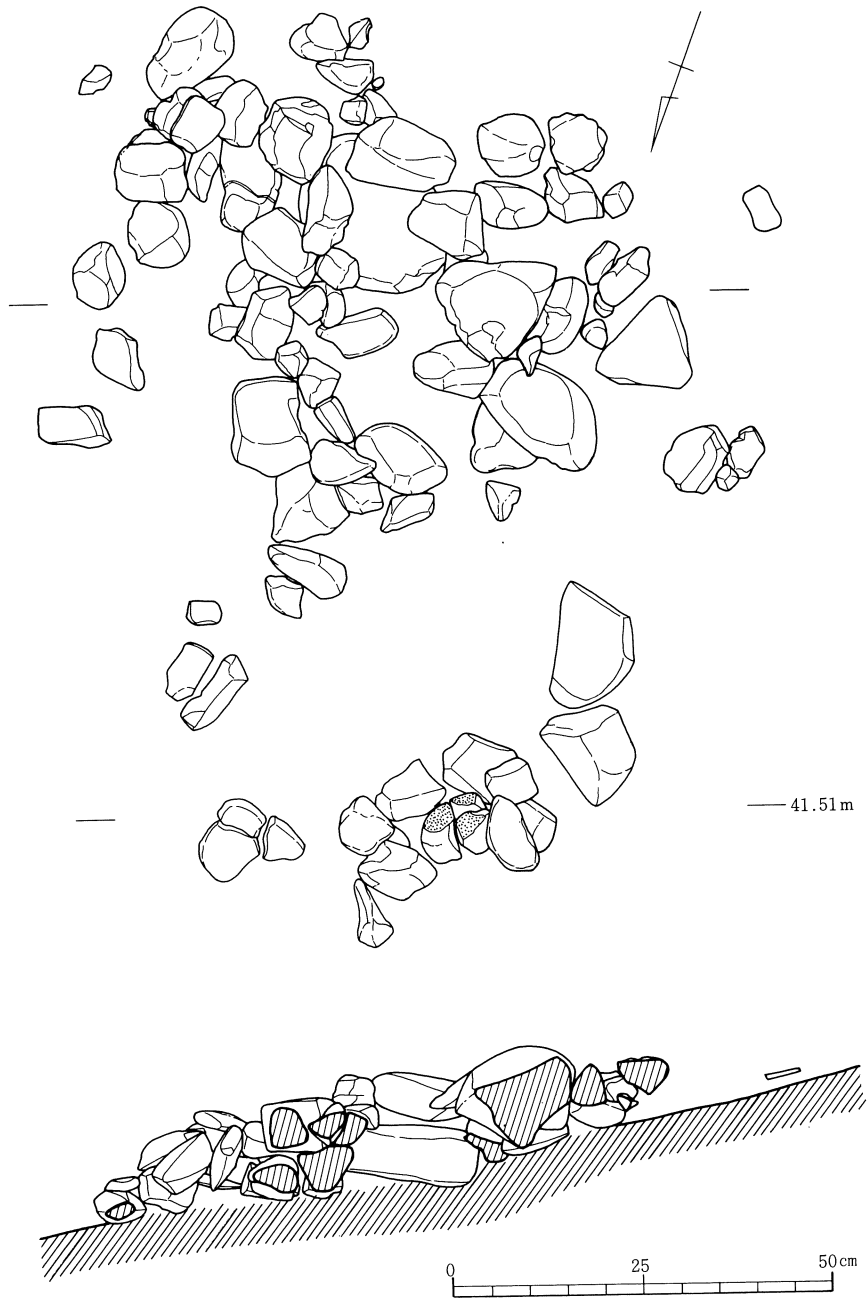
礫には被熱したものもあるが、炭化物や灰は見当たらない。ただ集石の間から2点ほど押型文土器の小片が出土している。

5号集石遺構 (第9図)

B-1 調査区の東南隅に位置する。集石の範囲は60cm×100cmで、密度は薄い。皿状土壙は検出できなかった。6号集石遺構と同一の等高線上にあるが、相互に7~8mの間隔をとっている。



第8図 4号集石

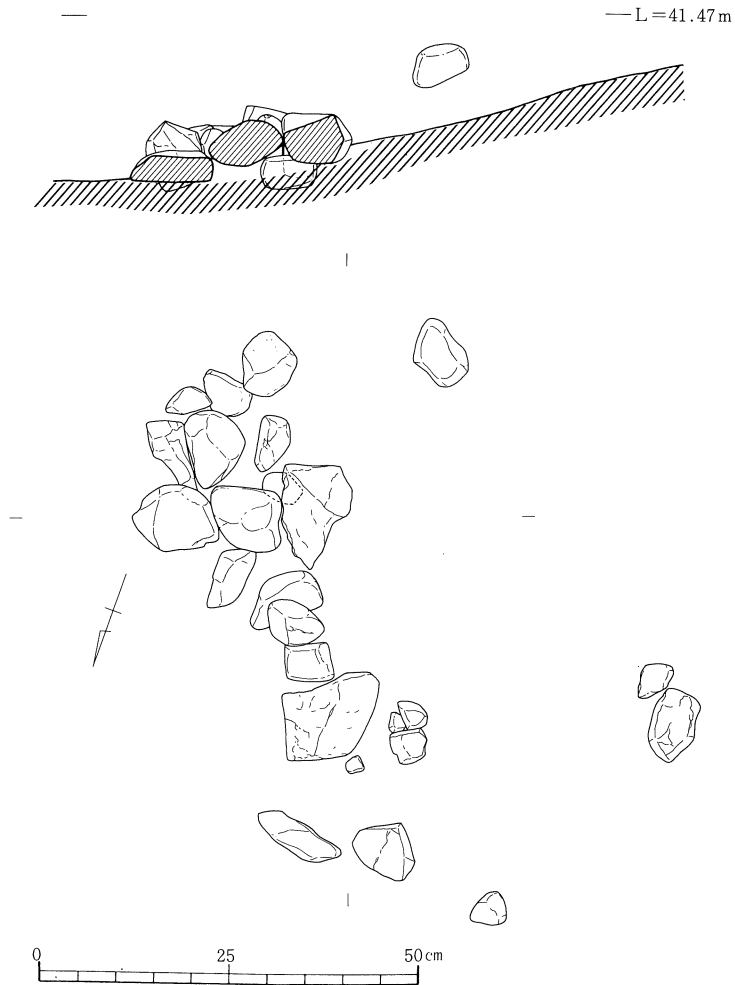


第9图 5号集石

6号集石遺構（第10図）

A-1 調査区にある。2号窯の構築時に破壊されたと思われる、拳大や人頭大の礫が少数残っていた。

図示しなかったが、原位置を離れた小礫が若干数周辺に散在していた。



第10図 6号集石

2) 登窯遺構 (第11、12図)

2基の登窯が検出された。

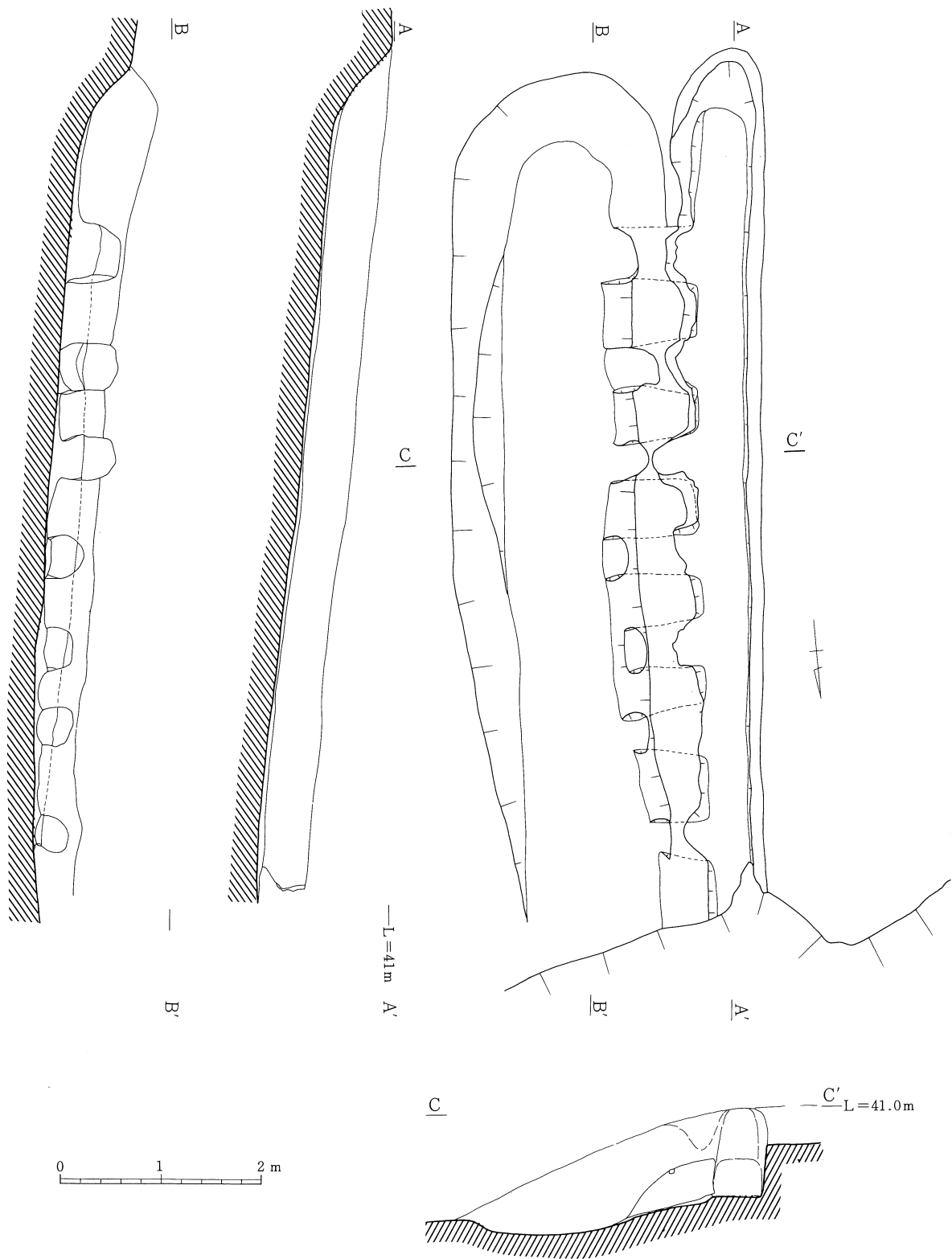
1号窯はC地区拡張区にあり、天井部、焼成部を欠く。残存長6.0m、上面幅50cm、深さ60cm。床面の傾斜は $10^{\circ}\sim 11^{\circ}$ を計る。焼成部の西側で、露頭断面部に補助燃焼孔の一部を確認したが船底状窪部の有無については把握できなかった。焼成部の床、両壁とも堅く焼け締まっていた。若干ながら床面に炭化物の汚れが認められたが、他にはなにも出土していない。

2号窯はC調査地区のA-1調査区にある。長軸を北北西にとる。焚き口は谷部を向いており町道安岐-奈多線によって消失している。天井部と焼成部の一部を欠くが1号窯よりは残りがよい。窯は半地下式の燃焼部とこれに添うように造られた舟底状窪部およびこの両者を連結する補助燃焼孔からなる。残存する燃焼部長は8.5mで、

上面の幅50cm、深さ50cmである。燃焼部は断面U字状をする。壁の側面は垂直である。窯の床面は焼けて灰色に硬化しており、側壁は赤褐色に堅く焼け締まっている。床面傾斜角度6度。伴う舟底状窪部は燃焼部の東側で、焼成部床面より低位置に設けられており、長さ8.5m、幅1.5~2.0m、深さ20~60cm。この内部には灰や炭混じり黒褐色土が厚く堆積していた。補助燃焼孔は7個残って



第11図 1号窯



第12图 2号窠实测图

おり、その間隔はほぼ60cmである。窯内から炭化材の小片がわずかながら出土しただけである。

2号窯舟底状窪部の下方約1.5mの地点で、須恵器坏身や小型壺の破片が出土している。状況から判断して2号窯に関連したものと考えたい。これら須恵器は1層上部から検出されたもので、明確な遺構に伴うものではない。上方から流れた包含層中から出土したものであろう。

3 出土遺物

A、B調査地区では殆ど遺物が出土していないが、B調査地区では先に述べたように弥生時代後期の壺形土器片および旧石器時代に属する石材片が若干ながら攪乱状態で検出されている。

C調査地区では縄文時代早期の押型文土器、石器が最も多く出土しており、他に旧石器、須恵器、近世陶磁器類が押型文土器に混じって少量発見されている。以下C調査区の出土遺物を説明する。

1) 縄文時代の土器

出土状況

C地区の縄文土器はⅡ層～Ⅲ層上部にかけて出土する。遺物包含層であるⅡ層は厚さは20～30cmで複数型式の土器を含んでいるが、層位的な分離はできなかった。土器は調査地区の中でもB-1区～B-4区に集中しており、C区、D区、E区と南にいくほど散発的になる。C地区では南にいくほど後世の攪乱によって土層の乱れが著しく、B区における遺物の集中はいわば見せ掛けの集中分布である可能性が強い。B区に集中遺構が多いのもそうした理由からであろう。

縄文時代早期の土器は押型文土器群を主体にし、これに若干の無文土器、条痕文土器他の土器群が伴う。

土器の分類

土器は主として口縁部の形態や文様施文手法などによって、便宜上以下のように分類する。

押型文土器	I-a類	内面、外面とも楕円文。
	b類	内面、外面とも山形文。
	Ⅱ-a類	内面は、短い原体条痕+楕円文、外面は楕円文。
	a'類	内面は、長めの原体条痕+楕円文、外面は楕円文。
	b類	内面は、短い原体条痕+山形文、外面は山形文。
	Ⅲ類	内面は、長め原体条痕文。外面は山形文。
	Ⅳ類	内面は原体条痕文、外面は楕円文。
	Ⅴ類	内面は無文、外面は楕円文あるいは山形文。

無文土器— VI類

その他の土器— VII類

I類— a (第14図) 口縁部の内面、外面に楕円文を施すものである。口縁部の土器片が小さく正確な傾きがわからないが、おおむね直口のものであろう。

楕円文は比較的小さく水平方向に施文されている(横走施文)。色調は横褐色で胎土には斜長石や角閃石を含む。

I— b類(第15図1～11、13、14) 口縁部の内面、外面に山形文に施すもの。文様は横走するものがほとんどで、13のみ外面山型文が縦に施文されている。

II— a類(第15図18、19) 内面に短い原体条痕と楕円文を、外面には楕円文が施されたもので、非常に少なくわずかに2点の口縁部を確認するだけである。楕円文は小さく、横走する。

II— a'類(第16図1) 文様構成はII— a類と同じだが、口縁部内面原体条痕がやや長めものである。

II— b類(第15図12、15) 口縁部内面が刺突したような短い原体条痕と山形文で、外面は山形文の類。直口の口縁部で、胎土、色調とも通有のものである。2点しか確認されなかった。

III類(第15図16、17) 外面の山形文は従走する。わずか2点しかない。

IV類(第16、17図) 内面に原体条痕文、外面に楕円文を施したものである。口縁部は直口で、やや外に傾向くいや、外湾するものがある。原体条痕の施文幅が長さ3cm以内で、外面の楕円文が比較的小さいもの(IV— a Fig. 16)と原体条痕の施文幅が広く、外面の楕円文も大きく、粗雑なもの(IV— a'類 Fig. 17)に細分される。後者のものには、口縁部が外湾気味のものがあり、器壁も厚めのものが多い。口縁部位の破片が小さいので、あるいはIV— a類としたもののなかにはII— a'類に属すものもあると思われる。

V類(第18図1～11) 口縁部内面が無文で外面のみ楕円文や山形文を用いたもの。

1は直径40cmに復元したもので、口縁部は短く外反する。頸部がいったん弱くくびれ、胴部中央に向かって膨らむようである。器壁は1cm以上で厚い。斜走する楕円文は大きく粗雑である。



第13图 遺物分布图

5～11は直口の口縁部で、外面の楕円文は小さく横走する。器壁も比較的薄く、大きさも中型のものであろう。

Ⅵ類(第21図、22図) 無文土器である。黄褐色で胎土、焼成とも基本的に押型文土器と同一である。

Ⅵ-a類(第21図1～6)は器壁が厚手で、口縁端部が肥厚する。口縁部内面に指圧痕が認められる。内外面は横方向の撫で状調整である。

Ⅵ-b類として第21図7～18の土器を示す。口縁部がほぼ直立し、端部は丸くおさまられている。

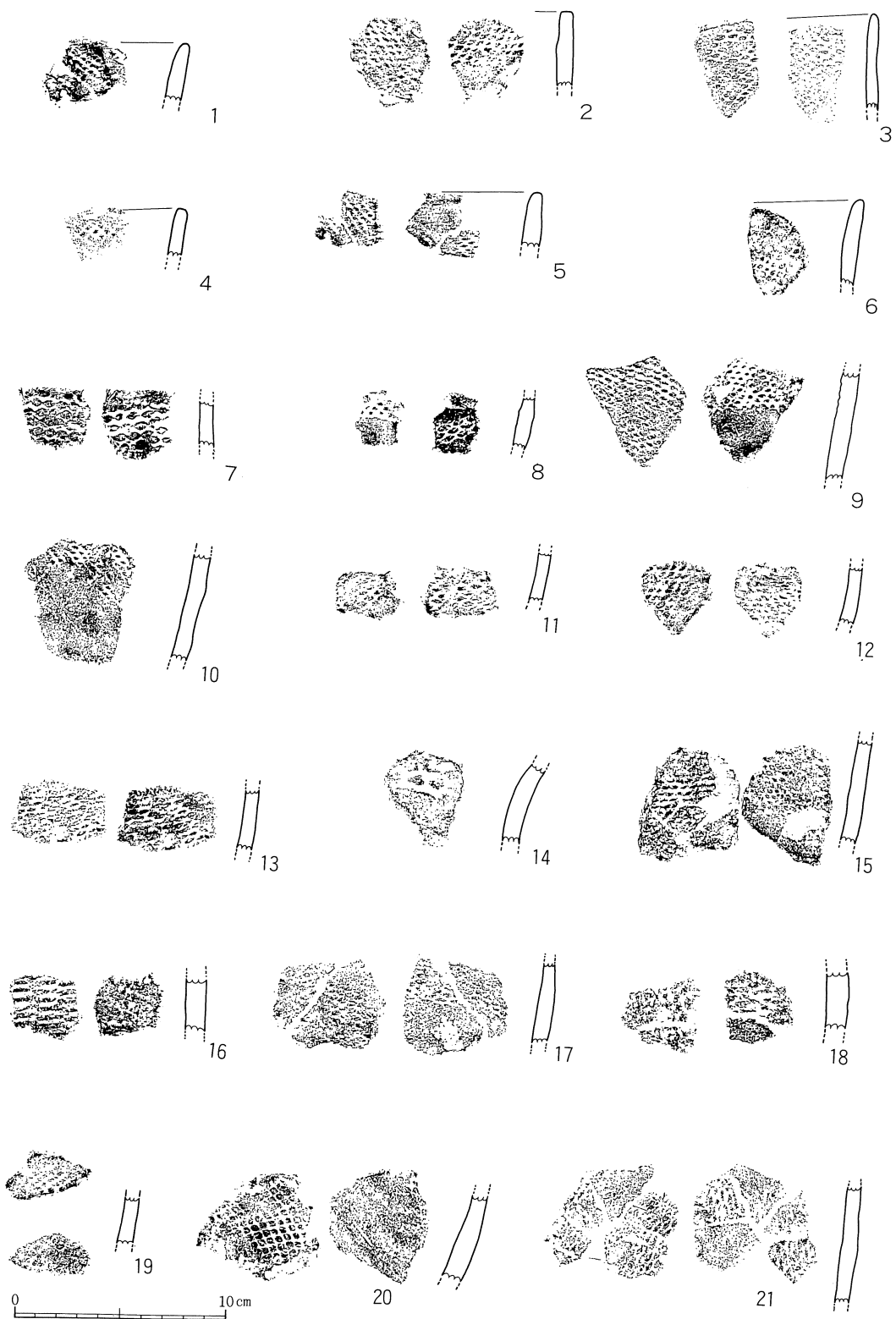
Ⅵ-c類は第22図の1～3で、口縁部の外面に粘土瘤をつけたものである。口縁部直下につけたもの(1、2)とやや下位につけたもの(3)がある。確認された点数は3点のみである。

Ⅵ-d類(第22図4～19) 口縁部が外湾ないしは外湾気味のものを一括してd類としたが、さらに細分は可能である。総じてa類などと比べると薄手とってよからう。

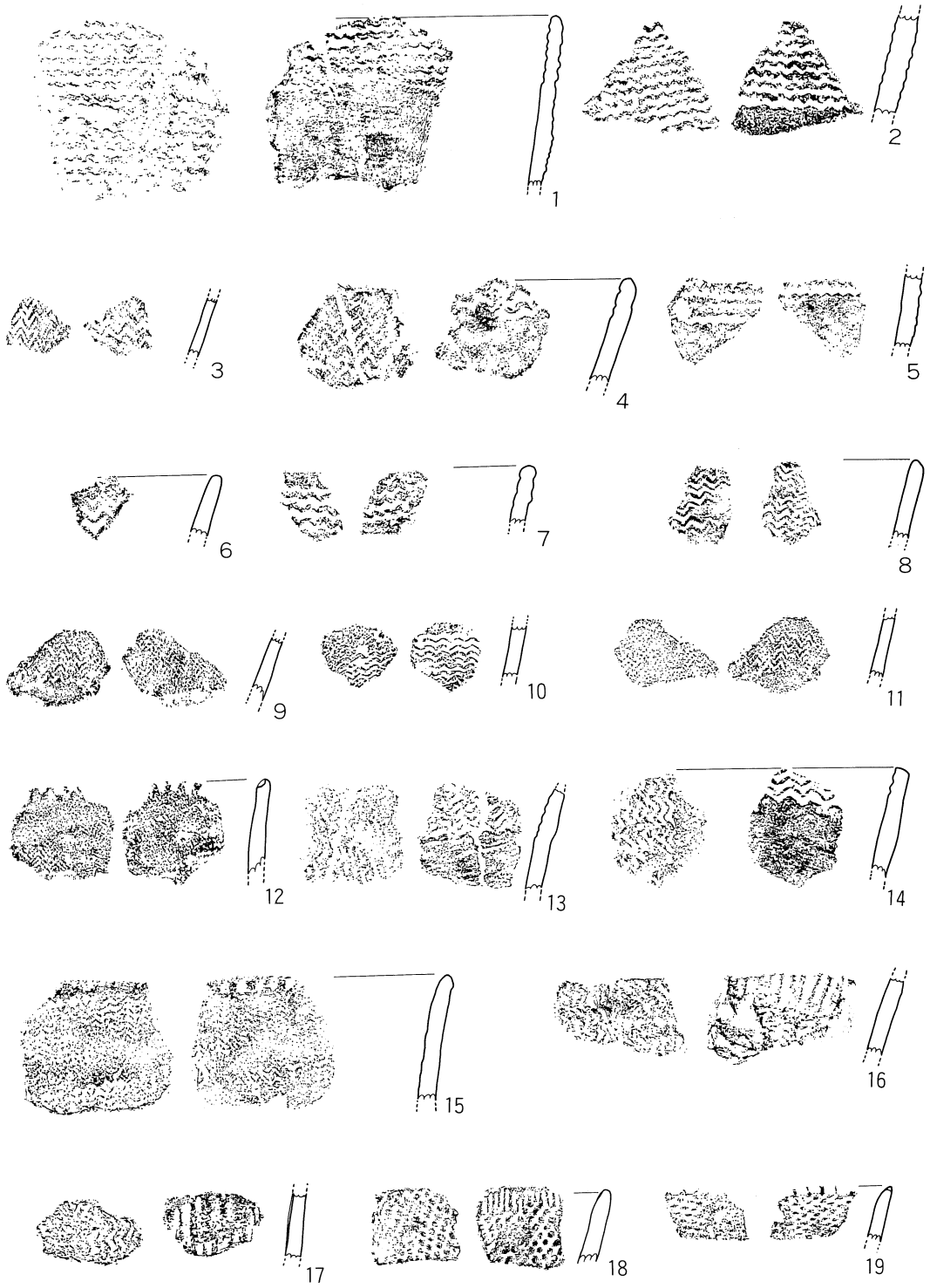
Ⅶ類(第23図) 1は直口口縁部の外面に連続する刺突文を施すもの。2～8は条痕文土器で、2、3は内外面に条痕が見られおそらく口縁部に近い部位のものであろう。9、10は胴部片で撚糸文を施している。11、12は器面に繊維状のスタンプがついている。15は格子状の文様を持つもので、小破片1点のみである。16～21は口縁部が大きく外反し、円筒形の胴部に続くものである。刻み目の突帯を口縁部外面に巡らし、胴部には横や縦に山形文を施すものであろう。22～24は須恵器の甕で外面に平行叩き、内面には同心文の叩が見られる。25は弥生時代後期の壺形土器口縁部である。

第19、20図は楕円文および山形文を施した胴部片である。横走する小さな楕円文のものと、大きく粗雑な楕円文のものはそれぞれⅠ類、Ⅱ類の同類の口縁部に対応する。

第24図は底部片である。色調、胎土とも押型文土器と異ならない。1～3、6、7は外面に大小の楕円文がみられる。4、5は山形文の底部である。9～16は無文土器の底部と思われる。9は尖底で他は丸底である。17～18は無文の平底で2個体分を確認。

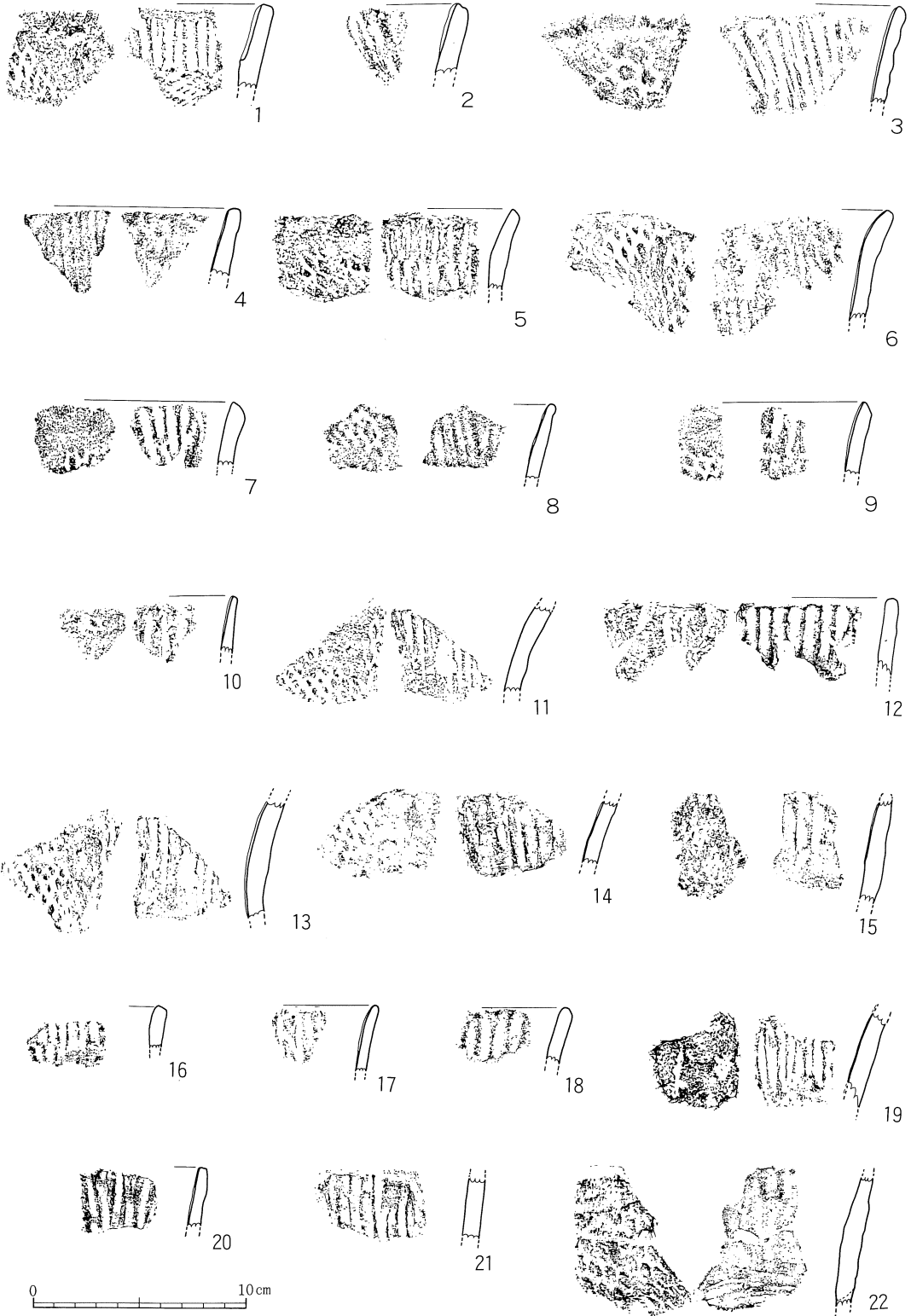


第14図 縄文時代遺物(土器)実測図

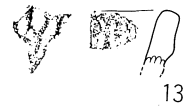
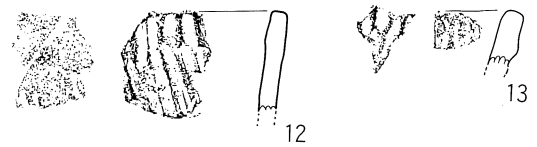
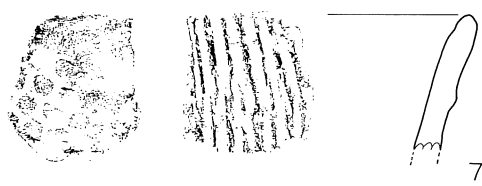
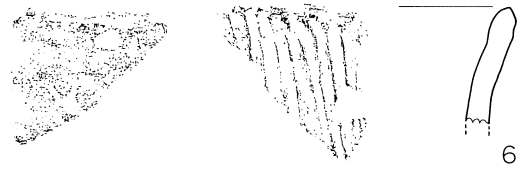
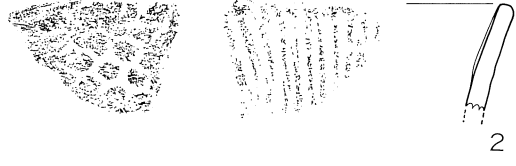
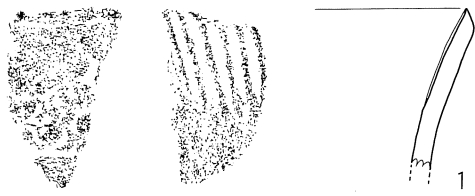


0 10 cm

第15图



第16图

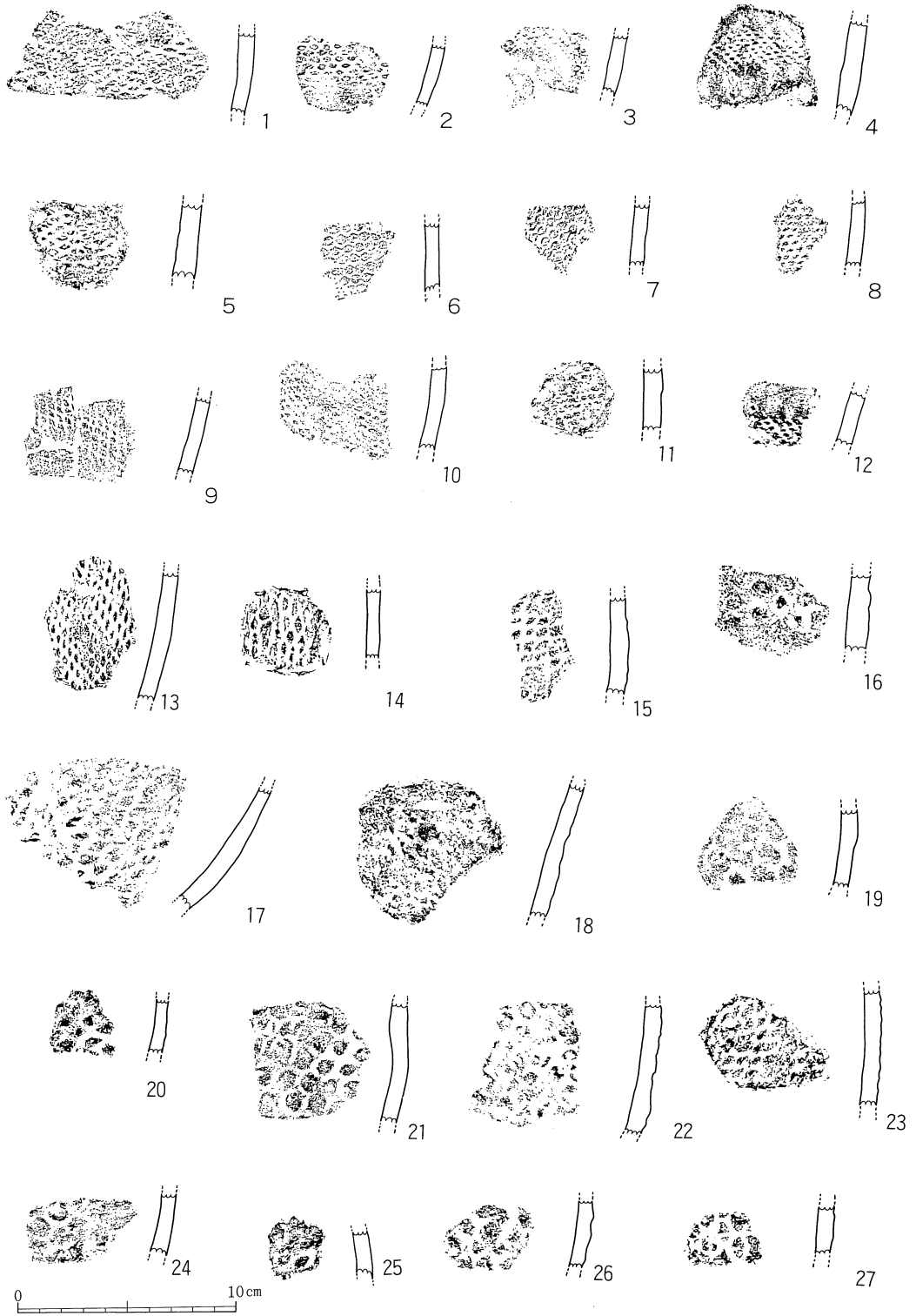


0 10 cm

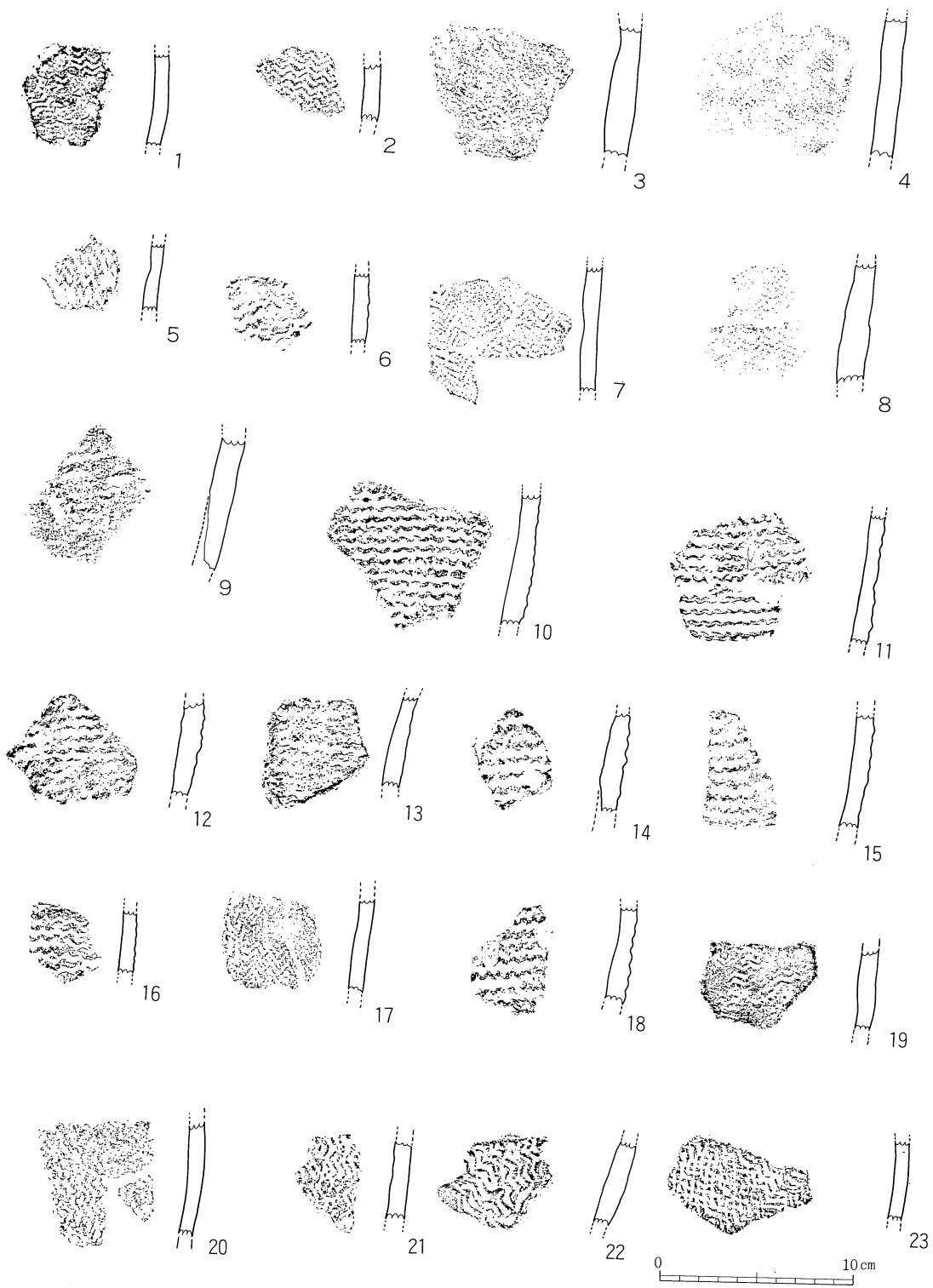
第17图



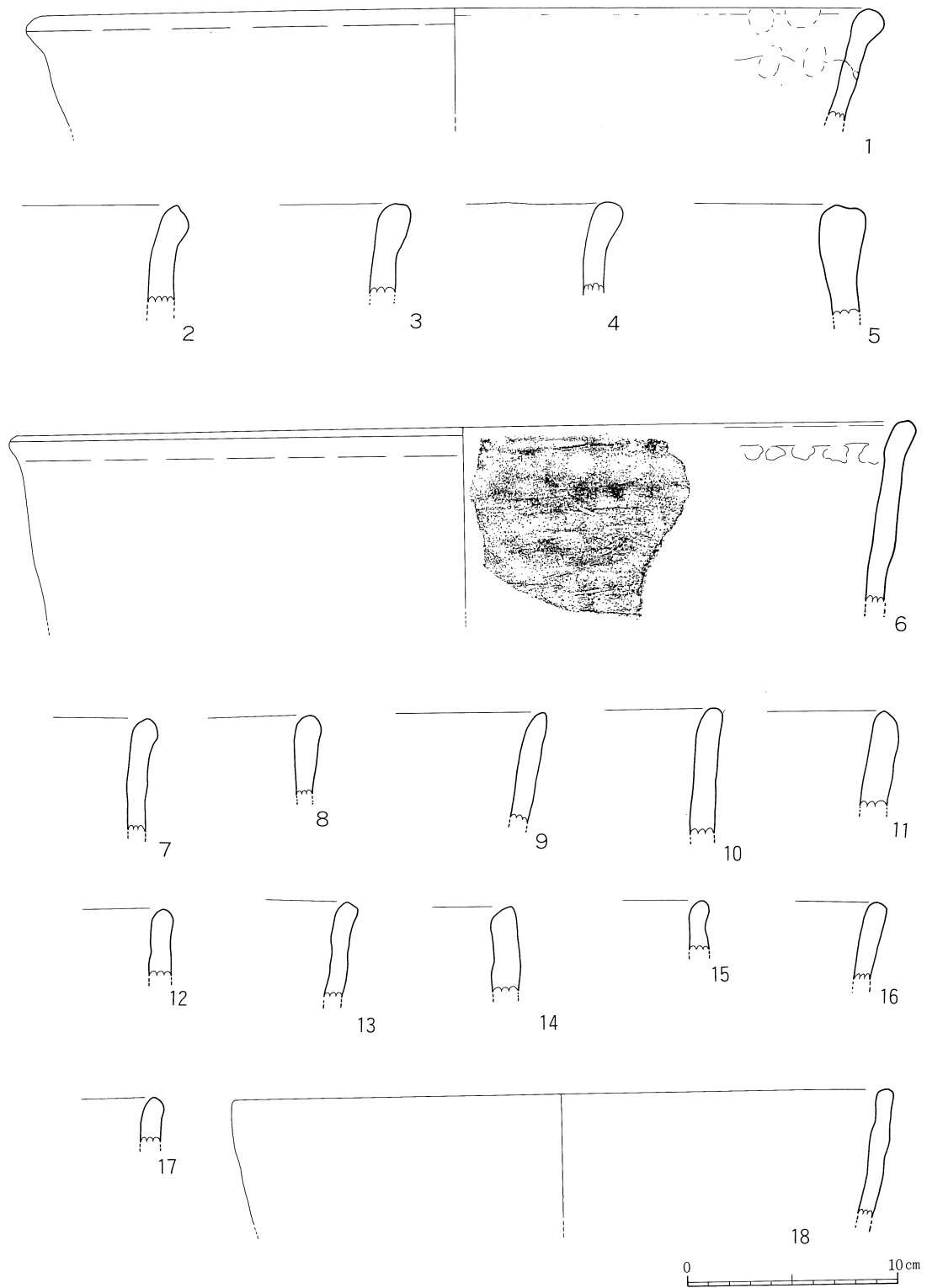
第18图



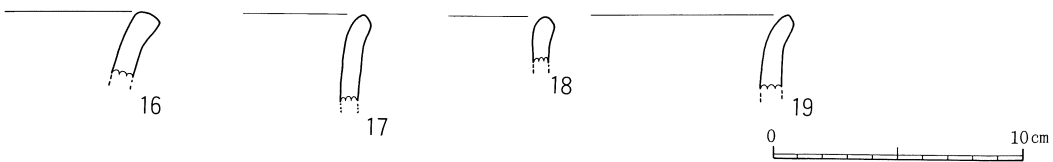
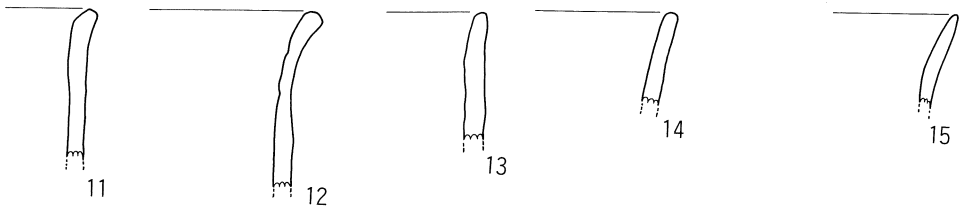
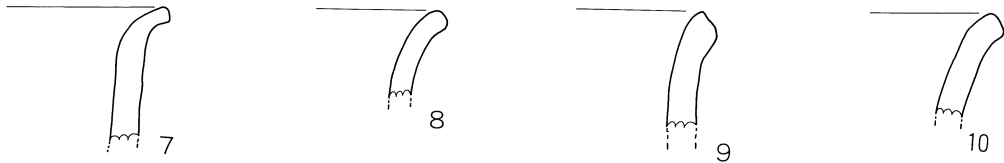
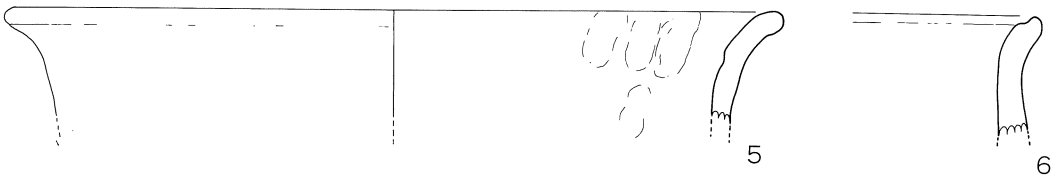
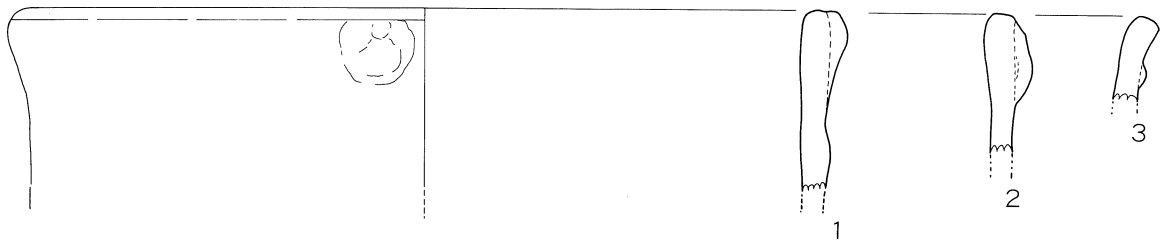
第19图



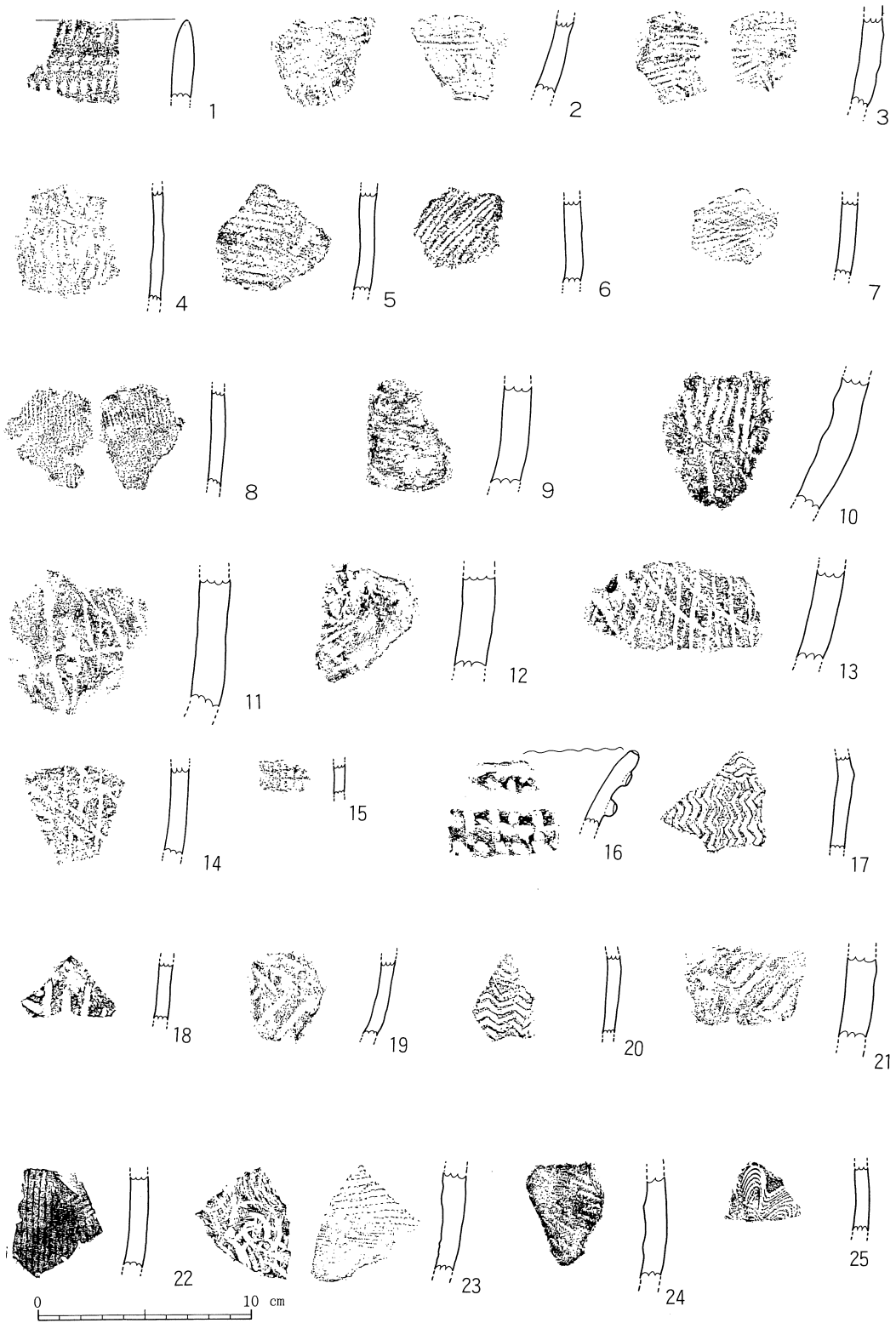
第20图



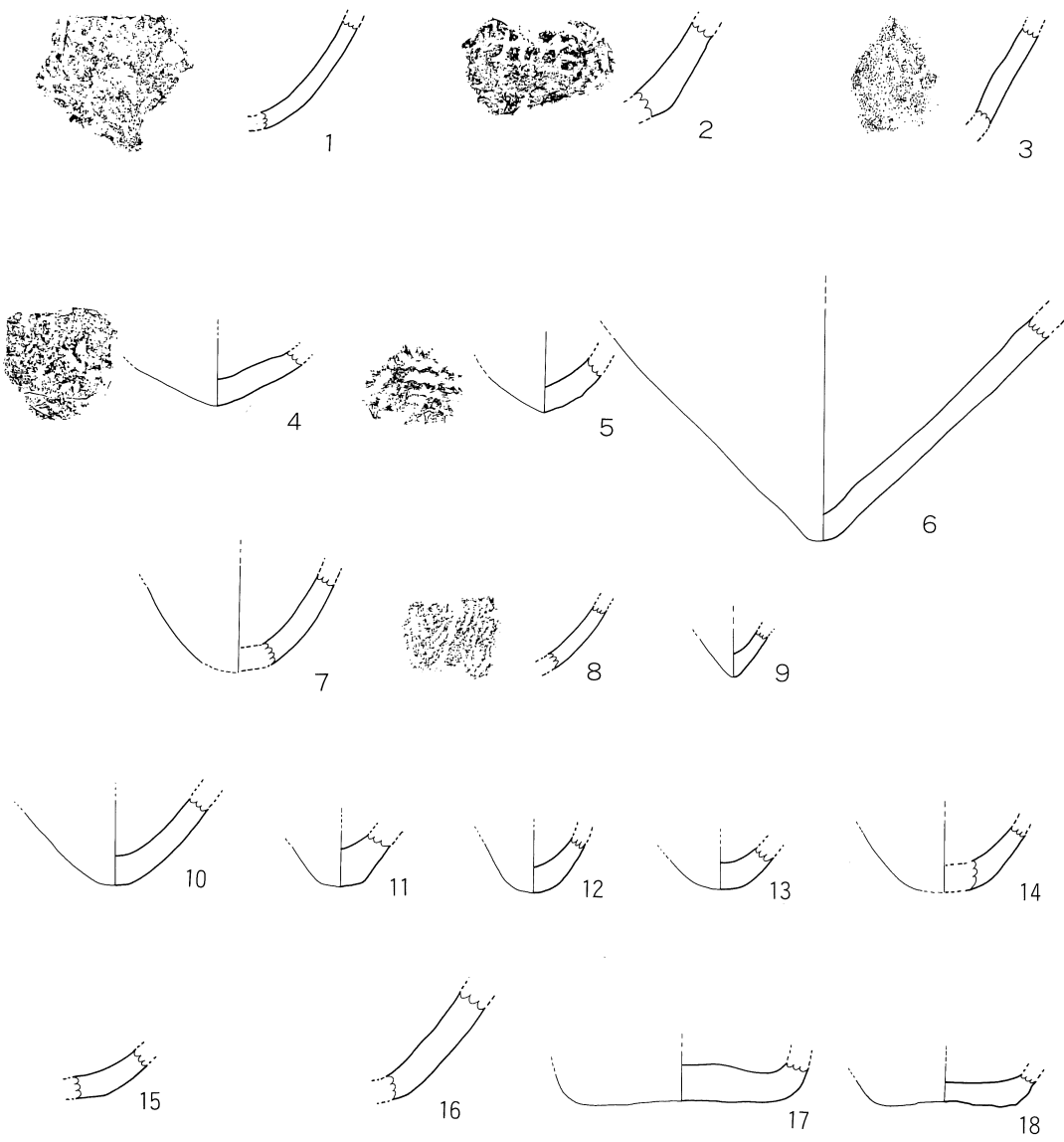
第21图



第22图



第23图

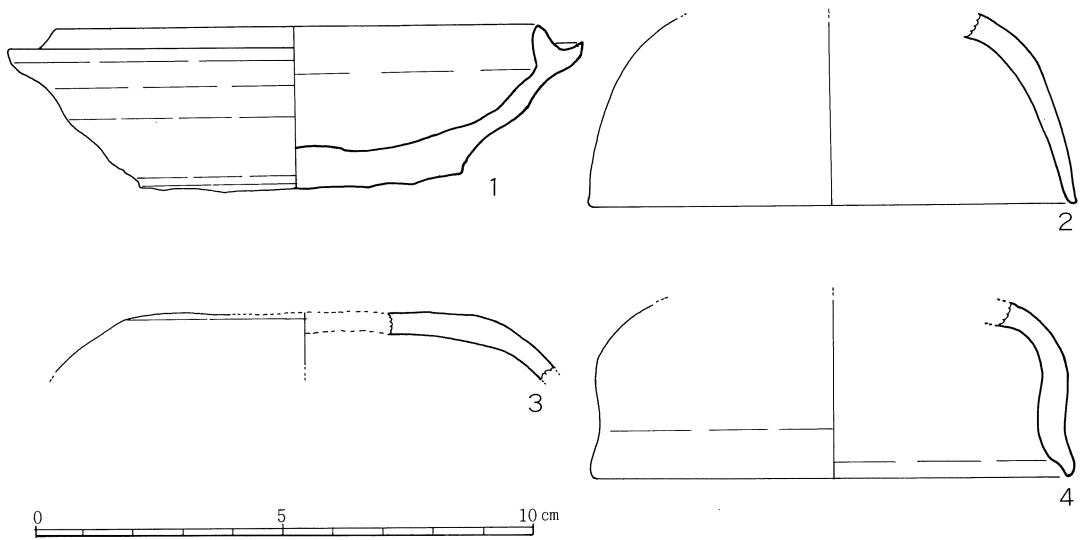


第24图

歴史時代の土器（第25図）

2号窯舟底状窪みの1.5m下方から出土した須恵器で、各破片とも一箇所で集中的に検出された。

1は須恵器坏身の完形品で口径9.5cm。口縁部は肉太で短く、内傾しながら立ち上がる。体部は回転ナデで底部は篋切り離されている。胎土には微細粒が非常に多く含まれている。内外面は回転ナデ調整されている。4は復元口径9.5cm。口縁部は外側に短く開く。3は細片で、天井部には回転篋削りが観られる。以上2～4はともに青灰色で焼成は堅く緻密である。



第25図

2) 石器

(1) 旧石器時代

旧石器時代の石器類は、少量ながら調査区全域で散発的に出土している。調査区の中では東北寄りの3列、4列からの出土が目立つ石器類が出土したC区は、北東に向けて傾斜する斜面となっており、A・B区に存在する黄色ローム層を欠く。押型文土器を含むⅢ層の下部は凝灰質の風化土が堅くしまったもので無遺物層である。本来旧石器時代の包含層があったものが消失したと思われる。

旧石器時代の遺物

石器は、ナイフ形石器2点、2次加工のある剥片3点、使用痕のある剥片2点、剥片類25点、石核1点である。石材は、表面が風化したホルンフェルスもしくは頁岩質のものが、主体を占め、石核の1点と剥片4点が硅化木である。

ナイフ形石器(第26図) 1は、国府型ナイフ形石器の完形品である。長さ9.1cm、最大幅2.3cm、最大厚1.5cmの比較的大型のものである。背面部には、横長のリングをもつポジティブ面が刃部に残されており、主要剥離面の打撃の方向とはほぼ一致する。背部のブランティングも入念であり、打面部を消去しており、平面的に左右対称となるように仕上げている。また先端部と基部も意識しており、先端部の加工がより細かい。2は、縦長剥片を素材とする。二側片加工のナイフ形石器である。背部のブランティングに比べて基部の調整が入念である。素材の剥片は横断面が三角形となり、先端部では中心稜からも一側辺に向けて加工がなされている。背面の剥離面の方向は主要剥離とは別方向のものがあり、複数の打面をもつ石核を母材とするものと思われる。

2次加工のある剥片 3は、幅広の剥片を素材とするほぼ円形をなす削器である。打面部は両面加工によって除去している。5は一部に自然面を残す不定形な剥片を素材とし、側片の片面の一部の二次加工によって突起部を作り出している。

使用痕のある剥片 4は、一側片に使用痕をもつ縦長剥片である。下端部にも調整のある打面が残されており、背部の剥離にも上下二方向が見られる。母材は両端に打面をもつ石核である。

石核 6は、硅化木製の小型の石核である。主要な打面から約3/4周に剥片剥離が行われ、半円錐状をなす。硅化木は半島内に産する石材である。

剥片 製品に対して30点に満たない剥片の数は決して多くはない。また定形化した剥片も認められず、国府型ナイフの素材となりうる横長剥片についても23点ほどみられるが、技法を想定できる資料ではない。

小結

旧石器時代の石器は、全体の出土数も少なく、多くを語ることはできないが、国府型ナイフ形石器については国東地方では初めての資料であり、注目してよい。本資料は、現在、大分県内で出土している国府型ナイフ形石器の中で最大かつ整美なものである。石材については、瀬戸内地方の一部でありながら、従来速見地方で多用されている石材であり、彼地との直接的な関係はうすかったともと思われる。また小型のナイフ形石器は、基部調整の入念なもので、岩戸遺跡6層上部のナイフ形石器と共通する。

以上のことから、塩屋伊豫野原遺跡における旧石器文化は、A T後の約20,000～15,000年頃ナイフ形石器文化の所産と考えてよい。

(2) 縄文時代 (第27図～32図)

縄文時代早期の包含層からは、押型文・無文土器と共伴して多数の石器類が出土している。その器種は、礫石器と剥片石器に大別できるが、礫石器の器種は限られており、敲石(磨石兼用)が目立つ程度である。剥片石器は多様な石材が使用されており、器種も石鏃以外は定形化したものは少ないが二次加工のある剥片は多数にのぼる。

石鏃 (第27図) 石鏃は総数39点出土している。1～11は比較的小型で基部の抉りの深いタイプである。とくに11～13、14、19はいわゆる鋏形鏃と呼ばれる早期特有の鏃であり、両脚端が直線状になる11のタイプと内向する13、14、19のタイプがある。1～5は小型の円脚鏃、7、10は先端が長く延びる円脚鏃である。20～23は比較的大型で整美な石鏃で、各々脚部に特徴がある。21は8と同型で両脚が尖るタイプ、22は、左右対称でない脚をもつ細身の鋏形鏃である。23は12、20と同様に外縁がふくらむタイプである。

24～33は抉りの浅い比較的小型の石鏃である。38は九州地方では出土例の少ない有茎の石鏃である。

石鏃の石材は、チャート13点、姫島黒曜石12点、サヌカイト8点、ガラス質安山岩4点、黒色黒曜石2点という内訳で、チャート及び姫島産黒曜石の比率が高い。同じ姫島産でもガラス質安山岩は黒曜石に比べて比率が低い。

スクレイパー類 (第28、29、30図) 剥片石器の中で削器等のスクレイパー類は多数出土している。39、40はいわゆる石ヒと呼ばれるものであるが、39はつまみ部分のみに加工が集中する。40は刃部の加工が中途とみられる縦型のものである。39はガラス質安山岩、40はサヌカイト。41～44は尖頭器状のスクレイパーであるが、器種は判然としない。41、44は姫島黒曜石、42、43はチャート。46、54はうす手の剥片を利用した片面加工の削器、45、48～53は両面加工の削器である。47は剥片の端部に片面加工を施した搔器(エンドスクレイパー)に近い形態である。55は石核を利用したスクレイパー、56は幅広の自然面をもつ削器である。49は台形状に折り取った2次加工剥片である。このほかに、2次加工の剥片類は総計24点にのぼる。

石材は、45、54はサヌカイト、51、52は姫島産黒曜石、45～50、53はガラス質安山岩、55はチャート、56はホルンフェルス製である。

石核 (第31図) 57、58、59はガラス質安山岩の石核である。57はほぼ直方体となすもので、2点の不定形幅広の剥片が接合する。58は残核状となったもので、打面は2面残されている。59は一見石核とみられるが、ほとんどの面に自然面を残す角礫であり、一端の交互の剝離をもつスクレイパーの一種である。あるいは彫器に近い機能も考えられる。

石斧 (第32図60、61) 60は扁平な片刃の磨製石斧。上半部を欠いているが、研磨は両面及び側面にも施している。刃部は使用によるとみられるダメージが残されている。石材は頁岩質

のものである。61は磨製石斧の破損したものを刃部に再加を加えたものである。表面の風化が激しいが片面には研磨の痕跡がみとめられる。石材は玄武岩質の火山岩。

敲石（第32図62、63） いずれも安山岩の円礫を利用した磨石兼用の敲石である。62は1kgを越える重量で、敲打痕は全周に及ぶ。両面ともに磨面が認められるが、顕著でない。63も敲打痕が全周に及び、両面磨面62よりも顕著である。また一面には敲打による凹みがあり、また表面に炭化物の附着がある。他に同様の敲石2点がある。

小結 一とくに石材について—

塩屋伊豫野原遺跡では石鏃も含めて多種の石材が使用されている。石鏃については、チャート、姫島黒曜石、サヌカイトの比率が高く、剥片総数で圧倒的に多数の姫島産ガラス質安山岩の使用は4点(10.2%)と少ない。チャートの石鏃への多用は、東九州地方縄文早期の特徴であり、距離的に近い姫島産黒曜石も好んで用いられている。その他の剥片石器については、ガラス質安山岩の使用が全剥片の重量比で57.4%と過半数を占める。このことから、姫島産ガラス質安山岩は、石鏃以外のスクレイパー類の用途に主として供給され、石鏃は、チャート、姫島黒曜石のように緻密な石鏃を選んだと指摘することができよう。

姫島以外の石材の原産地については、佐賀県腰岳とみられる漆黒色黒曜石(1.6%)、大山産

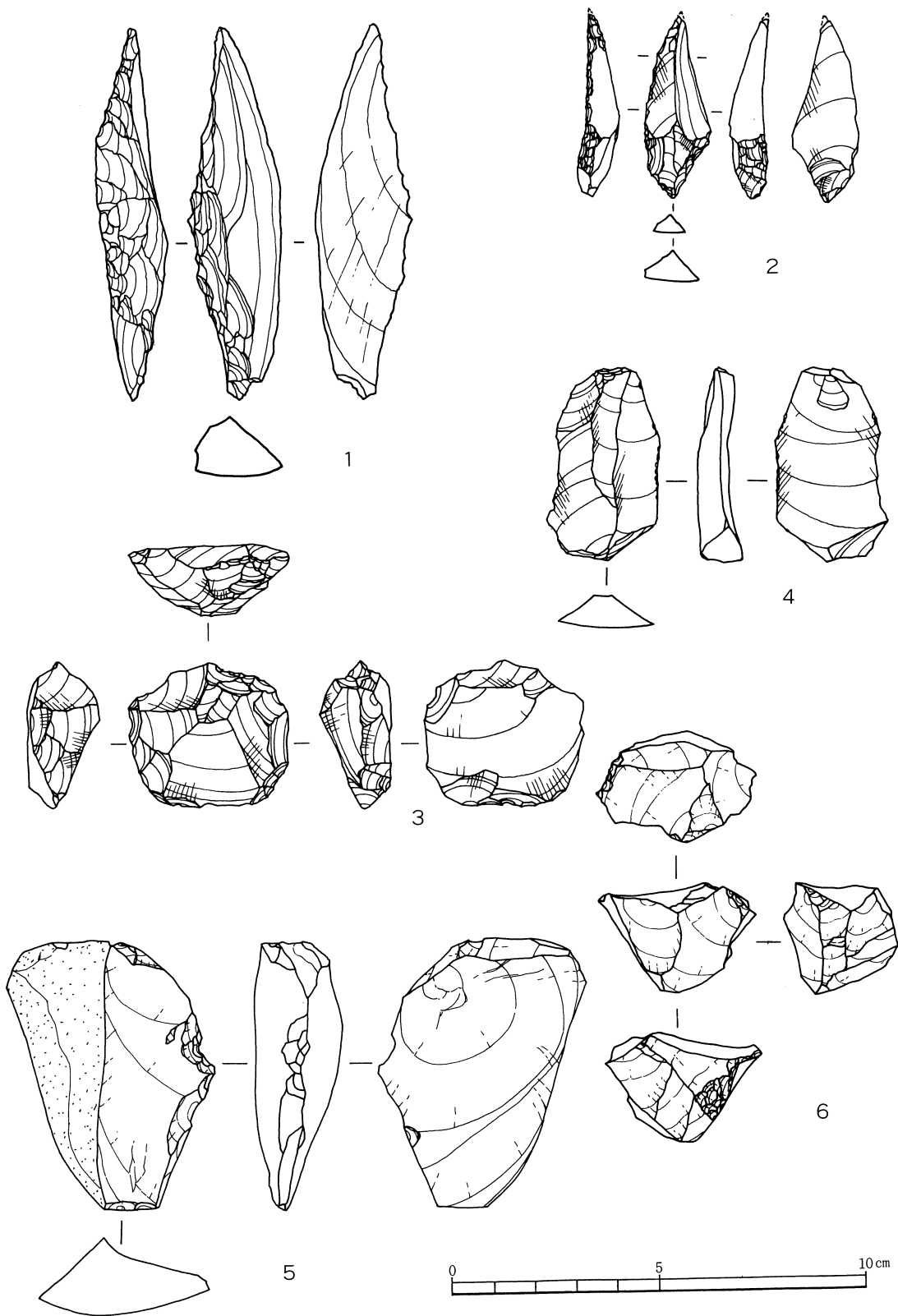
表1

№	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 材	備 考
1	(2.0)	1.9	0.4	(1.0)	チャート	尖頭部欠損
2	(1.9)	1.8	0.4	(0.8)	チャート	尖頭部欠損
3	2.4	(2.1)	0.6	(1.1)	漆黒色黒曜石	片脚部欠損
4	2.7	1.9	0.4	1.3	安山岩	完形品
5	1.9	1.7	0.3	0.6	姫島黒曜石	完形品
6	2.0	1.7	0.3	0.6	サヌカイト	完形品
7	(2.3)	1.8	0.4	(0.9)	サヌカイト	尖頭部欠損
8	3.0	(2.5)	0.3	(1.1)	姫島黒曜石	片脚部欠損
9	2.0	1.9	0.4	0.9	チャート	完形品
10	(2.3)	(1.8)	0.4	(0.9)	姫島黒曜石	片脚部欠損
11	2.8	(2.1)	0.5	(1.5)	姫島黒曜石	片脚部欠損
12	(3.1)	2.2	0.4	(1.8)	サヌカイト	尖頭部欠損
13	2.7	(1.9)	0.5	(1.1)	チャート	片脚部欠損
14	2.8	(2.1)	0.6	(1.7)	チャート	片脚部欠損
15	2.8	(2.1)	0.4	(1.1)	サヌカイト	片脚部欠損
16	(3.0)	(2.3)	0.4	(2.0)	姫島黒曜石	尖頭部片脚部欠損
17	(3.1)	(2.5)	0.4	(1.7)	安山岩	尖頭部片脚部欠損
18	3.2	1.8	0.4	1.2	チャート	完形品
19	3.5	2.0	0.5	1.9	チャート	完形品
20	3.8	(2.6)	0.5	(3.4)	チャート	片脚部欠損
21	3.9	3.0	0.5	2.6	姫島黒曜石	完形品
22	4.5	2.3	0.5	3.2	漆黒色黒曜石	完形品
23	(3.4)	3.0	0.7	(4.8)	姫島黒曜石	尖頭部片脚部欠損
24	1.8	1.6	0.5	1.0	チャート	完形品
25	(1.7)	(1.6)	0.4	(0.6)	姫島黒曜石	尖頭部片脚部欠損
26	(2.2)	(1.8)	0.4	(0.7)	姫島黒曜石	尖頭部片脚部欠損
27	2.3	1.5	0.3	0.8	姫島黒曜石	完形品
28	2.5	1.8	0.4	1.0	姫島黒曜石	完形品
29	(1.6)	(1.4)	0.4	(0.8)	チャート	両脚部欠損
30	2.3	(1.6)	0.3	(0.7)	サヌカイト	片脚部欠損
31	2.0	1.9	0.3	0.8	サヌカイト	完形品
32	2.6	1.8	0.4	1.2	サヌカイト	完形品
33	2.9	(2.4)	0.6	(1.9)	チャート	片脚部欠損
34	(1.9)	(1.5)	0.5	(0.8)	姫島黒曜石	両脚部欠損
35	(3.2)	(1.8)	0.5	(2.3)	ガラス質安山岩	両脚部欠損
36	(2.2)	(1.9)	0.4	(1.4)	チャート	尖頭部両脚部欠損
37	2.6	(2.4)	0.3	(1.0)	サヌカイト	片脚部欠損
38	3.5	1.5	0.5	2.3	安山岩	有茎鏃

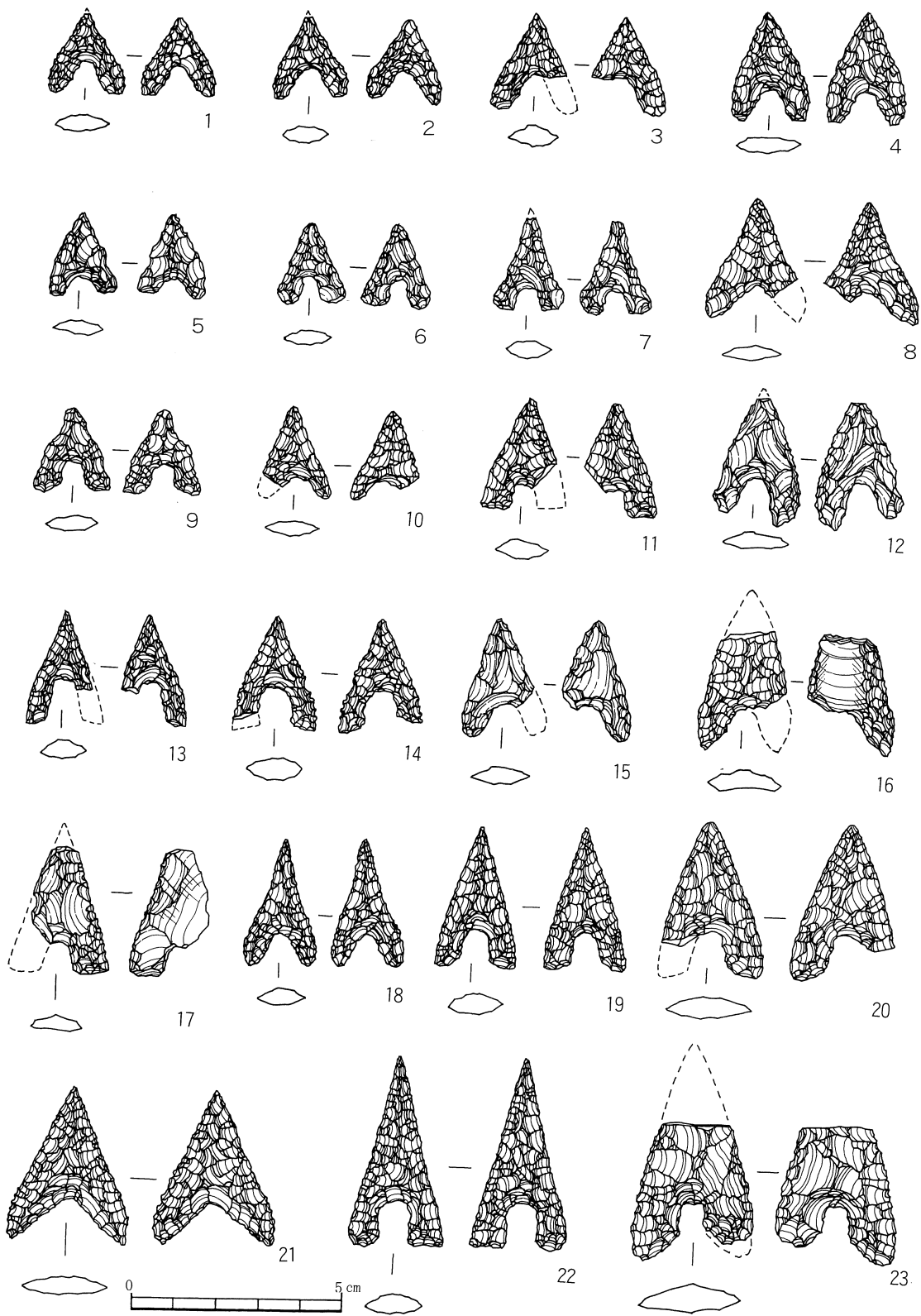
とみられる黒曜石もわずかにみられる。サヌカイト(19.2%)も西九州方面、チャート(6.4%)は県南部の河川からもたらされたものと思われる。姫島産黒曜石(15.5%)とガラス質安山岩を合わせた重量比は72.9%と高比率である。これは、縄文早期の杵築市稲荷山遺跡等に比べても高いものであり、原石地との距離が近い要因を指摘してくれる。

参考文献

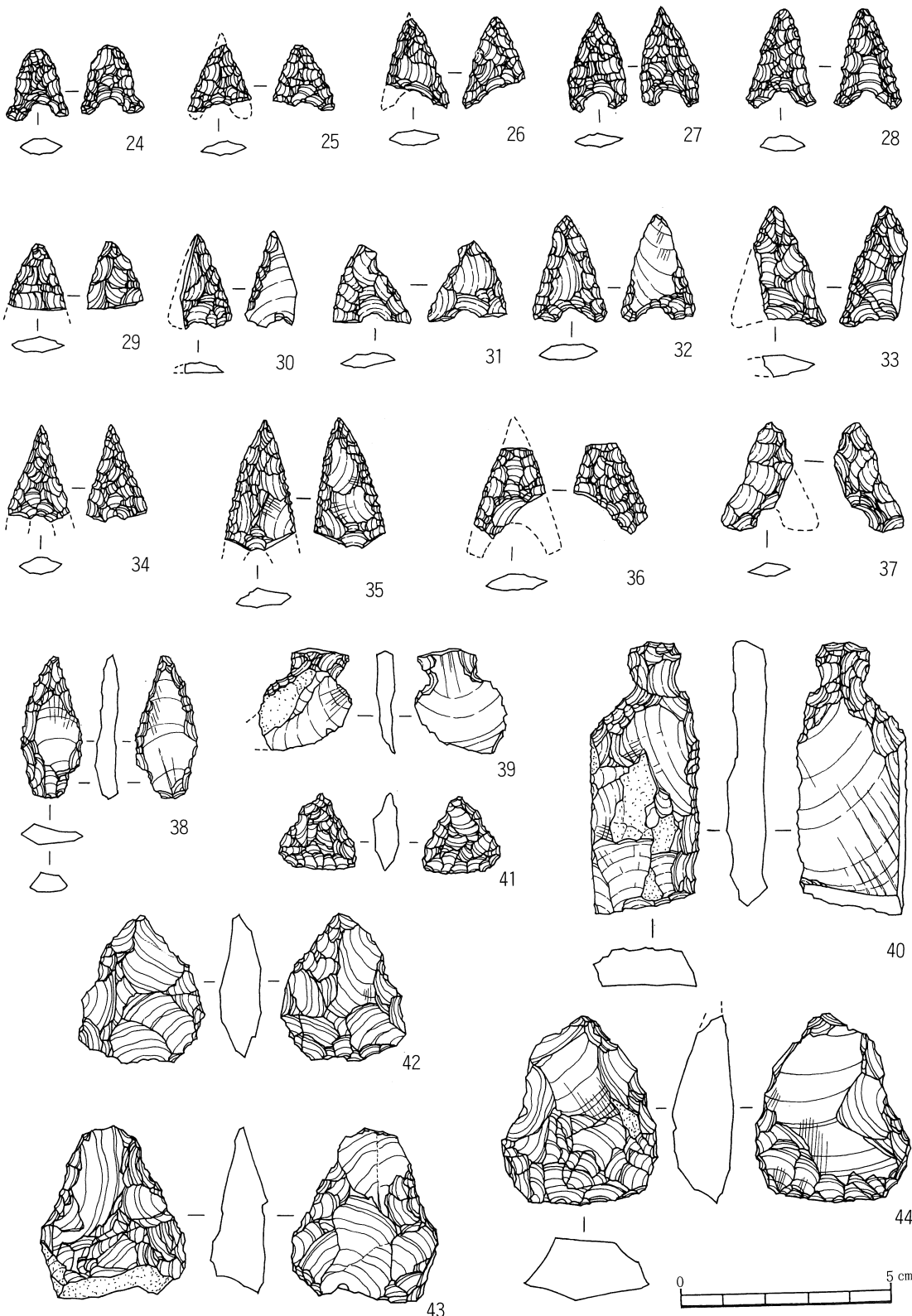
清水宗昭 「姫島産の黒曜石とガラス質安山岩について」『賀川光夫還暦記念論集』1982.12



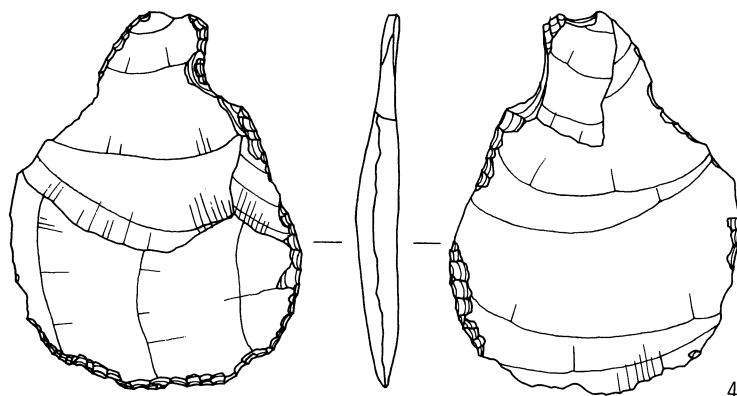
第26图 石器 1



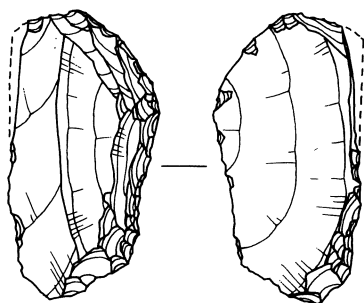
第27图 石器 2



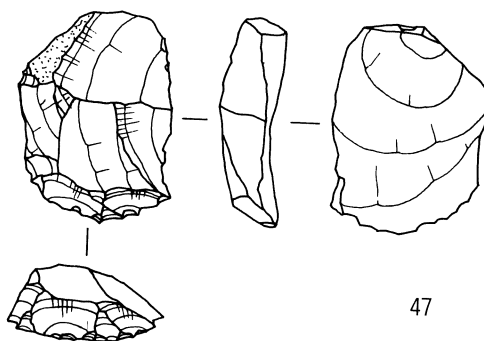
第28图 石器 3



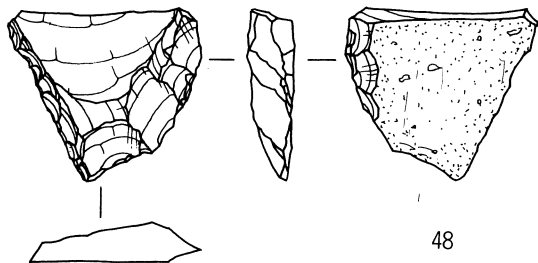
45



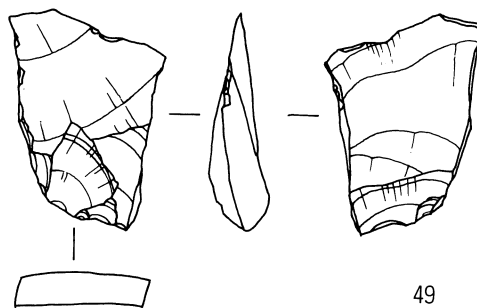
46



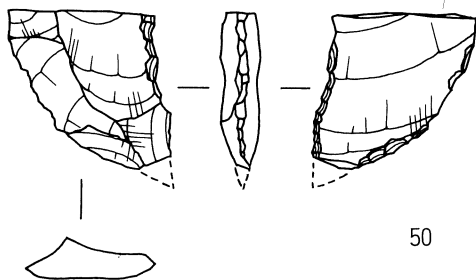
47



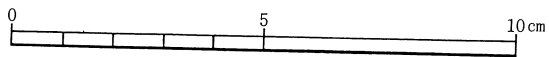
48



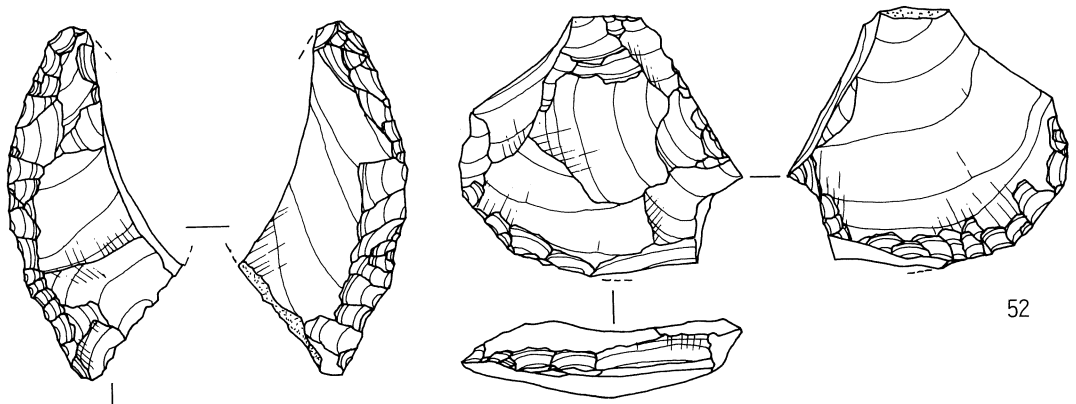
49



50

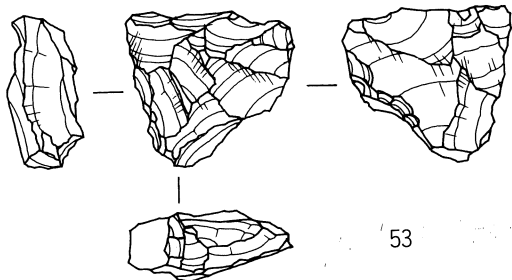


第29图 石器 4

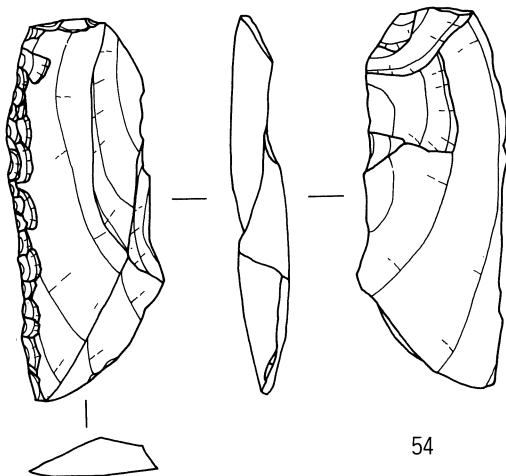


51

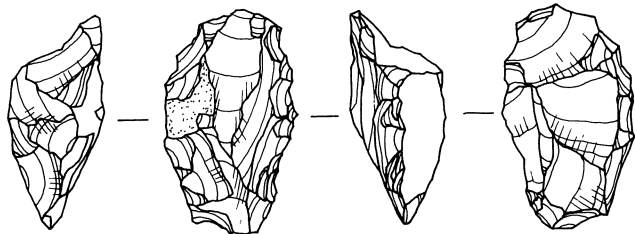
52



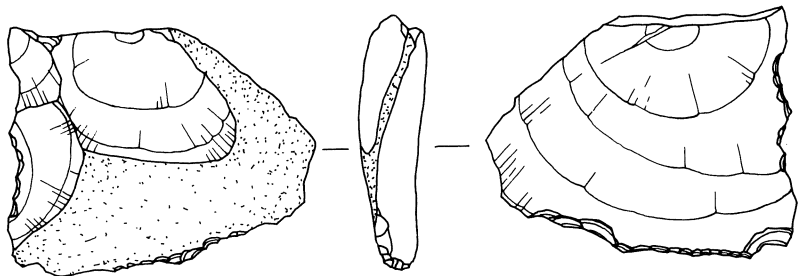
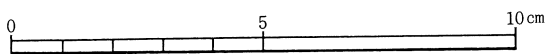
53



54

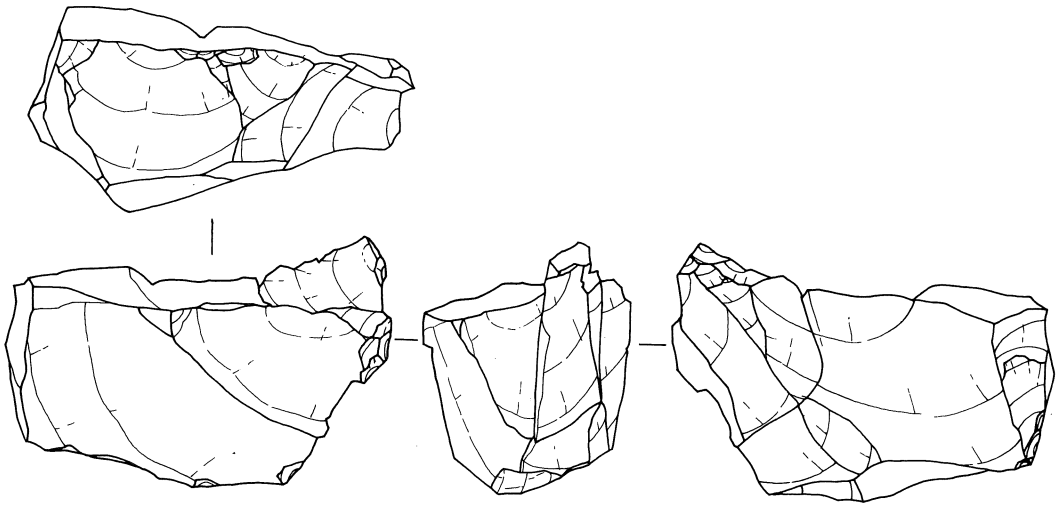


55

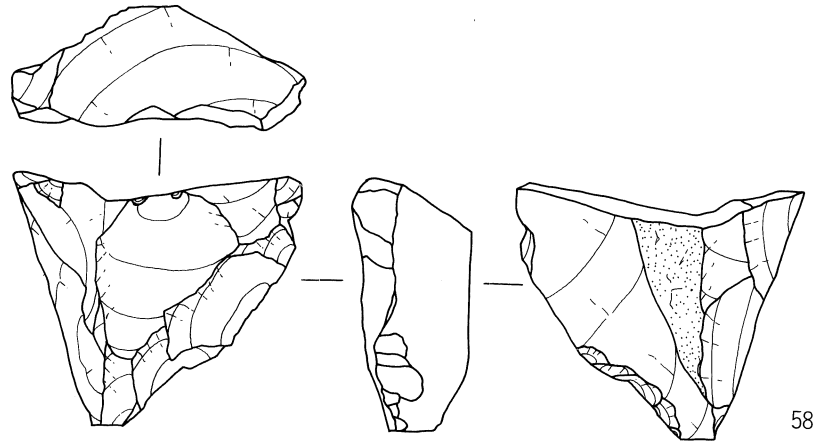


56

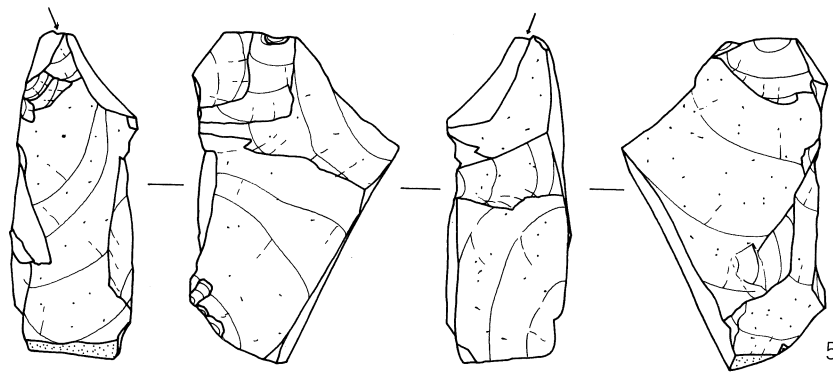
第30图 石器 5



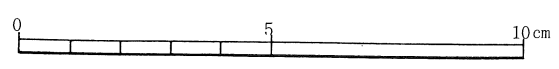
57



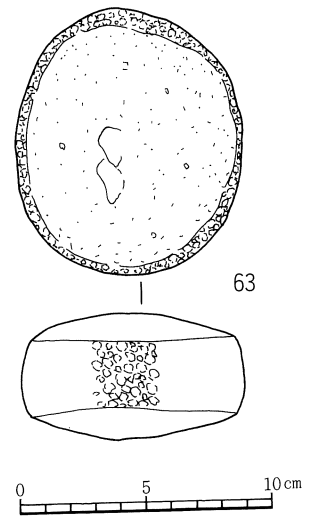
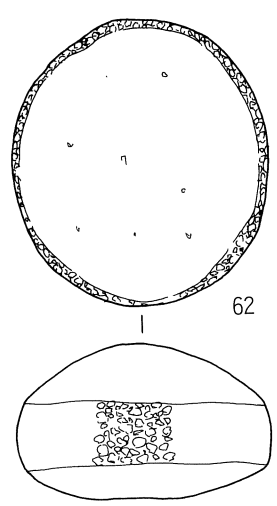
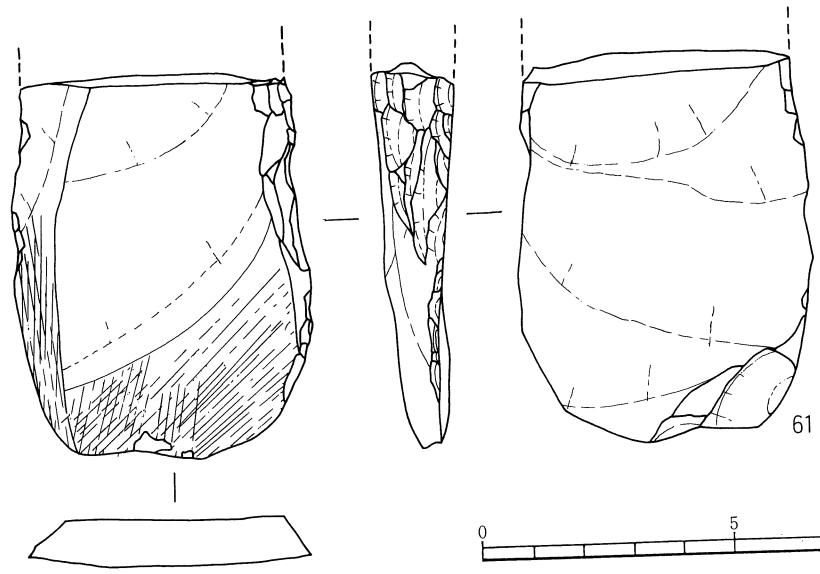
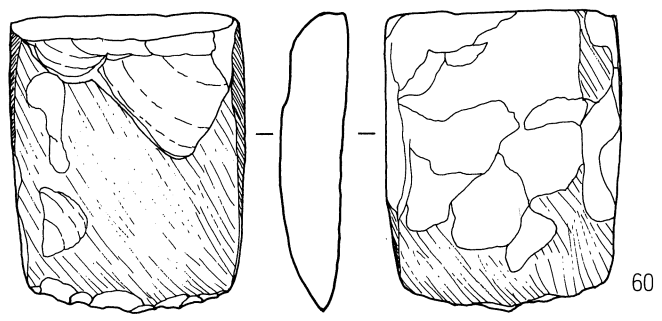
58



59



第31图 石器 6



第32図 石器 7

第三章 まとめ

塩屋伊豫野原遺跡登窯の考古地磁気法による年代推定

伊藤晴明・時枝克安
(島根大学理学部)

1. はじめに

塩屋伊豫野原遺跡登窯は側壁に横口を有する特異な窯跡である。この種窯跡は岡山県下で60数基検出されているが、その他日本各地の報告例を合せると120基以上になる遺構である。岡山県下では近接して製鉄遺跡が検出される例が多く、製鉄遺跡に伴う炭窯とする説が有力である^{1)・2)}。しかし、炭窯とする説に疑問を呈する意見もあり、まだ窯の性格については不明な点が多い。

この種横口付窯跡は、九州地方では太宰府市池田遺跡³⁾(2基)、北九州市丸ヶ谷遺跡⁴⁾(1基)、筑紫野市剣塚遺跡⁵⁾(1基)、筑紫野市原田地区遺跡(1基)の4カ所で発掘調査されている。原田地区遺跡以外は既に報告書が公開されている。最近(1990年10月)、国東町浜崎寺山でも横口付窯跡が発見され、発掘調査が進行中である。

また、昨年(1990年)韓国慶尚南道蔚州郡態村面検丹里山でも横口付近窯跡2基が検出され⁶⁾話題になっている。この検丹里遺跡の横口付窯跡は韓国では最初の発掘例であるが、出土遺物は全くなく、窯の性格や年代は未詳である。日本国内では、少ない出土遺物等からではあるが、6世紀後半から8世紀代に比定される窯跡が多い^{7)・8)}。また、我々の測定による横口付窯跡の考古地磁気推定年代もこれを支持する結果が出ている^{9)・10)}。

2. 考古地磁気年代推定法

窯や炉を構築するときの粘土は、マグネタイト(Fe_3O_4)やヘマタイト(Fe_2O_3)のような磁石になり得る鉄の酸化物(強磁性鉱物)を数パーセント程度含んでいるのが普通である。このような強磁性鉱物を含む粘土が加熱され、強磁性鉱物のキュリー温度(マグネタイトの場合、 578°C)以上になると、最初にもっていた磁性を失い磁石でなくなる。しかし、次の冷却過程でキュリー温度以下に冷却すると、その時の地磁気の方向に磁化して再び磁石となる。これが焼土の熱残留磁気である。このようにして焼土中の強磁性鉱物は地磁気の方向を記録し、過去の地磁気の方向を我々に教えてくれる。

他方、地磁気は一定不変でなく、数十年～数百年のオーダーで方向や強さを変化して来ている。これが地磁気の永年変化である。西南日本では、幸いに過去2000年間の地磁気永年変化曲線が広岡¹¹⁾によって作成されている。この地磁気永年変化図を使えば、焼土の磁化方向から

焼成された時の地磁気の方向が求まり、その年代を読み取ることができることになる。

3. 遺跡の概要

本遺跡は東国東郡安岐町塩屋字伊豫野原(33°26'47" N、131°43'00" E)に位置している。遺構は国東半島の東沿岸で東に張り出した細長い低丘陵の海拔35～45mの斜面で検出された。発掘調査されたのは横口付の1号および2号窯跡の2基である¹²⁾。

1号窯跡

この1号窯跡は出土状態が悪く、長さ6.0mを残すだけであったが、形態や規模等は2号窯跡に類似したものと思われる。横口は1～2認められるのみであったが、焼成度は2号窯跡と同程度であり、壁、床面とも堅く焼きしめられ赤褐色から茶褐色を呈していた。

2号窯跡

2号窯跡は比較的残りが良く半地下式であり、残存する燃焼部全長は8.5m、上面幅0.5m深さ0.5mであった。断面はU字状をなし、壁面は垂直、床面勾配は6°で7孔の横口を残していた。

壁面の堅く焼きしめられた焼土は赤褐色を呈し、厚さは10cm程であった。この焼け方は岡山県下でみられる横口付窯跡に類似し、韓国検丹里遺跡の窯跡焼土にもよく似ていた。これらは何れも高温度での焼成が予想される焼土である。

これら横口付窯跡からは用途や年代を決定できる遺物は出土していないが、2号窯跡より数m離れた斜面で須恵器坏蓋が一個体分出土している。この須恵器が横口付窯跡に伴うものかわからないが、7世紀前半代に比定されている。この年代が窯の操業時期を示す可能性は高いかも知れない。他方、今回の調査区域内では、製鉄操業を裏付ける製鉄炉や鉄滓等は発見されていないが、国東半島の海岸は砂鉄が豊富で採集するのは容易な地域である。

4. 試料採取

考古地磁気測定のための試料採取は1988年1月18日と19日の両日にかけて実施した。試料は焼土を一辺5cm程の立方体状にして回りを掘り下げ、石膏をかけて固める。上面はアルミ板を用いて平面にしておく。石膏が完全に固った後でアルミ板を取り外し、平面の走向・傾斜を測定すれば、焼成された時そのままの状態の焼土試料を採取することができる。ただし、いくら精確に試料を採取しても、窯廃絶後に焼土が動いたり傾いたりしている場合は焼成時そのままの状態ではないので、考古学地磁気試料としては落第である。窯の側の壁焼土は時々内側に傾いている例があり、今回は床面のみから採取した。

1号窯跡は焚口側が完全に切り取られ、残されていたのは窯尻側の約3mであった。試料は残されていた燃焼部床面から22個採取した。2号窯跡では、焚口や煙道部を除く、燃焼部床面

のほぼ全域から42個の試料を採取した。

5. NRM測定

採取試料は実験室で一辺4 cm程の立方体状整形した後、高感度無定位磁力計でNRMを測定した。測定後の信頼できるNRM方向は図1に示してある。1号窯跡より得られたNRM方向と2号窯跡のNRM方向は(第33図-1)ほぼ一致し、違いはほとんど認められない。NRM測定結果は下記の通りである。

1号窯跡	N = 18
	D = -9.1°
	I = 62.4°
	K = 1167.0
	Q ₉₅ = 1.0
2号窯跡	N = 31
	D = -10.7°
	I = 62.3°
	K = 599.0
	Q ₉₅ = 1.0°

ただし、Nは有効試料数、Dは平均偏角、Iは平均伏角、Kは信頼度係数、Q₉₅は誤差角である。採取後に潰れた試料やNRMが異常であったり、方向の偏りが大きい試料はこの測定結果から除外してある。両窯跡共、方向のバラツキが小さくよまとまりを示しているが、伏角が地磁気永年変化曲線になっているのが気になる点である。

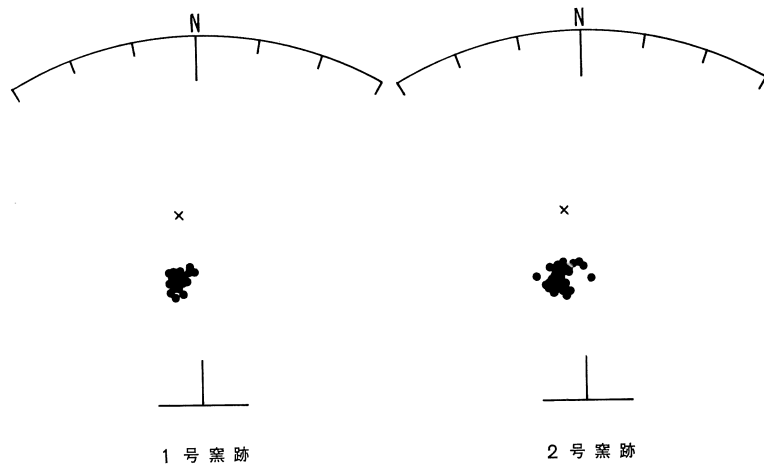
6. 年代推定

年代推定に前述した広岡¹³⁾の地磁気永年変化曲線を使用する。第33図-2は地磁気永年変化図に1号および2号窯跡のNRM測定値をプロットしたものである。推定年代は測定値から近接する曲線に垂線を下し、交点の示す年代を読み取ればよい。第33図-2から読み取れる1号および2号窯跡の推定年代は、

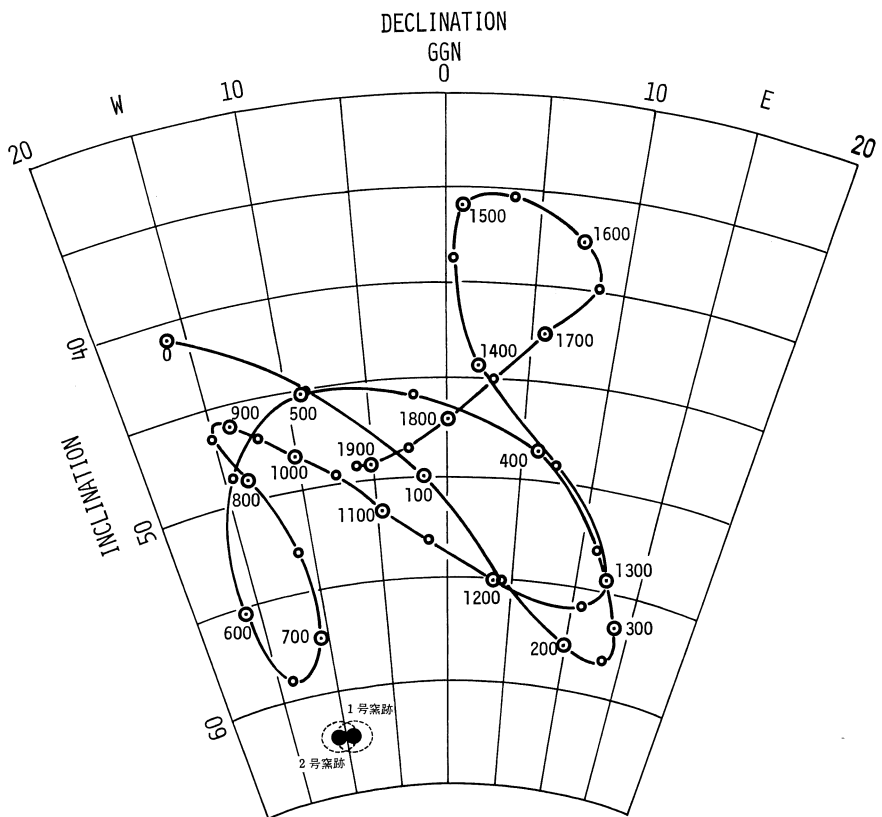
1号窯跡 AD660±20

2号窯跡 AD660±20

である。このように両者の考古地磁気推定年代は完全に一致するが、年代を決定する遺物は1号および2号窯跡から出土していない。しかし、2号窯跡より数m離れた斜面で、7世紀前半代に比定される須恵器坏蓋が一個体分出土している。この須恵器は窯周辺に古墳等の遺跡もないことから、2号窯跡に関係する遺物と考えてよいと思われる。すなわち、2号窯跡は7世紀



第33図 図1 塩屋伊豫野原遺跡のNRM方向



第33図 図2 地磁気永年変化曲線とNRM測定値(●印)

前半代に操業していた可能性があること示唆している。

考古学地磁気法で得られた7世紀中葉の推定年代はこれら窯跡の最終焼成年代を示しているが、この推定年代が須恵器の比定年代に極めて近いことは測定結果の妥当性を裏付けるものであろう。

7. おわりに

最後に、日本各地で発掘調査された横口付窯跡の年代について考察しておきたい。我々が測定することのできた横口付窯跡は岡山、鳥取、広島、福岡県下で13基を数えているが、すべて6世紀後半から8世紀代までの推定年代を得ている。その他の広岡等¹⁴⁾、¹⁵⁾や中島等¹⁶⁾による横口付窯跡(4基)の考古学地磁気推定年代も7世紀～8世紀代となっている。遺跡の発掘状況や出土遺物等によっても横口付窯跡の年代は6世紀後半から8世紀代を示唆する例が多いようである¹⁷⁾。このように、6世紀後半より古い窯跡や8世紀代より新しい窯跡の例は今のところ報告されていない。この点は韓国にある横口付窯跡の年代との関連もあり、興味ある問題であらう。

今後この種遺構の発掘例が増えるにつれて、どこまで古い時期の窯跡が存在するか、という問題と共に地域によって操業年代が少しずつく違いう可能性もあり、データの蓄積が待たれるところである。横口付窯跡に残る焼土の焼成度からみて、この種遺構は他の焼土遺構に比べて遺存する確率が高いと考えられるので、今後の発掘調査に期待したい。

終りに、今回の試料採取に際し、種々便宜をはかっていただいた大分県教育庁文化課の方々、特に現場でお世話になった高橋徹氏に心からお礼を申し上げる。

参考文献

- 1) 兼康保明：古代白炭窯の復原、考古学研究、27巻、73-85、1981.
- 2) 津山市教育委員会：「緑山遺跡」、津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第19集、73-84、1986.
- 3) 福岡県教育委員会：「池田遺跡」、福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集、1970.
- 4) 北九州市教育委員会：「丸ヶ谷遺跡」、北九州市文化財調査報告書 第16集、1976.
- 5) 筑紫野市教育委員会：「通り浦遺跡・剣塚遺跡」、筑紫野市文化財調査報告書 第10集、7-14、1984.
- 6) 鄭澄元・安在皓：カラー図版解説「蔚州検丹里遺跡」、考古学研究、37巻、17-20、1990.
- 7) 岡山県教育委員会：「岩倉遺跡・岩倉古墳群⁽³⁹⁾」、岡山県埋蔵文化財調査報告(14)、1977.
- 8) 文献2に同じ
- 9) 伊藤晴明・時枝克安・松谷郁夫：植松遺跡の考古地磁気測定、「植松遺跡群」、広島県埋蔵文化財調査センター、81-84、1987.

- 10) 伊藤晴明・時枝克安：板井砂奥製鉄遺跡、古池奥製鉄遺跡、藤原製鉄遺跡の考古地磁気学的研究、「水島棧械金属工業団地協同組合西団地内遺跡」、総社市教育委員会、(印刷中)
- 11) 広岡公夫：考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15巻、200-203、1977.
- 12) 大分県教育委員会：「塩屋伊豫野原遺跡」、大分空港新設工事に伴う発掘調査概要報告、1988.
- 13) 文献11に同じ
- 14) 広岡公夫・大崎瑞恵・奥村俊八：森台遺跡窯第5、6号窯の考古地磁気測定、「千葉県山武町森台古墳群の調査」、青山学院大学森台遺跡発掘調査団、172-175、1983.
- 15) 広岡公夫・山本恭子：向林遺跡製炭窯の考古地磁気測定、「向林遺跡・中鎌田墳墓」、津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第29集、25-29、1989.
- 16) 中島正志・夏原信義・渋谷秀敏・川井直人：金井別所遺跡の熱残留磁化による年代推定、「金井別所遺跡」、津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第25集、P 36、1988.
- 17) 文献2、7参照

結 語

塩屋伊豫野原遺跡出土の縄文早期土器

塩屋伊豫野原遺跡C地区出土の土器は、ほとんど押型文土器で、ほかに無文土器、条痕土器等が存在する。

土器の部位では、胴部が圧倒的に多く、口縁部は185点、底部は26点である。口縁部では押型文土器が148点で全体の80%、無文土器が37点で20%となる。押型文土器のなかで各類の比率を検討すると以下ようになる。

まず内面原体条痕文・外面楕円文のⅦ類が、全体のおよそ半分にあたる48%を占める。内外面楕円のⅠ-a類および内外面山形文のⅠ-b類が次に多くそれぞれ約14%で、内外面に文様を施すものとしてのⅠ類全体では28%になる。内面無文・外面楕円あるいは山形文のⅤ類は12.3%で、Ⅱ-a類・Ⅱ-b類は計3%弱とわずかである。

Ⅰ類はいわゆる稻荷山式で、Ⅱ-a類・Ⅱ-b類は早水台式に属し、Ⅲ類、Ⅵ類、Ⅴ類は田村式の範疇に入るものである。

押型文が施された胴部片のうち、外面に楕円文を施すものが全体の70%を占め、残り30%が山形文である。押型文以外には条痕文の胴部片5点、撚糸文の胴部片4点、格子文の胴部片1点とわずかである。

底部は尖底や丸底気味のもものがほとんどで、平底は2点のみである。無文が圧倒的に多く、山形文や楕円文のものはわずか6点である。しかしながら口縁部や胴部片の数からみて、無文として取り扱った底部のなかに本来文様が施されており、その後風化した例もかなり存在すると思われる。

大分県下の縄文早期の土器編年は、賀川光夫によって主体的に行なわれてきた。それは押型文土器を主軸にした編年である。賀川は、昭和22年に行なった佐伯市下城貝塚の発掘調査で、押型文土器を検出して以来、昭和28年の速見郡日出町早水台遺跡、昭和38年の速見郡山香町川原田遺跡と一連の早期遺跡を調査し、縄文早期をⅣ期に分かつ土器編年を樹立した。その結果、県下の押型文土器は川原田式-早水台式-田村式-ヤトコロ式と編年され、その後橋昌信、後藤一重、高橋徹等によって、稻荷山式、下菅生B式、寺ノ前式などの型式が加えられたが、賀川編年の基本的な枠組みは変更を受けていない。しかしながら近年、県下に限っても縄文早期の遺跡調査例が増加しており資料の蓄積もまた著しいものがある。住居跡や集石遺構、石器、生業等々を巡る様々な研究が開始され、その成果も示され始めている。本報告書においては取り扱うことができなかったが、改めて別の機会にそれらの課題について論じるつもりである。

塩屋伊豫野原遺跡において検出した登窯については製鉄に伴う炭窯の可能性を考えてみたいが、発掘における所見による限りでは積極的な証拠はない。窯の年代については島根大学理学

部の伊藤春明、時枝克安両氏に依頼して、考古地磁気法による年代推定を実施した。その結果は報告のとおりである。おおむね妥当な年代と思われる。これまでのところ国東半島における製鉄の考古学的調査、研究は甚不十分であり、本調査結果が今後の研究の一助になれば幸いである。

参考文献

- 賀川光夫 「大分県の押文土器出土遺跡の調査」『早水台』大分県文化財調査第3輯大分県教育委員会 1955。
- 橘昌信他 「稻荷山遺跡緊急発掘調査」大分県文化財調査報告第20・21号輯、大分県教育委員会、1970。
- 後藤一重、高橋徹 『荻台地遺跡』荻町教育委員会、1983。
- 松永幸男 「押型文土器にみられる様相の変化について」古文化談叢1集、九州古文化研究会、1984。
- 坂本嘉弘 『菅無田遺跡』、野津町教育委員会 1986。

図 版
P L A T E S



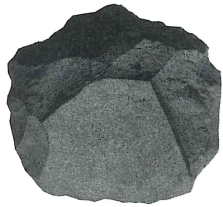
图版 1 C地区発掘状況(上) 1号集石(下)



1



2



3



4



5



6

図版 2 旧石器

*番号は第26図と同じ

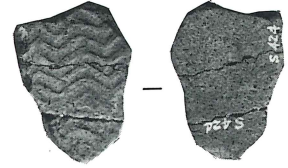
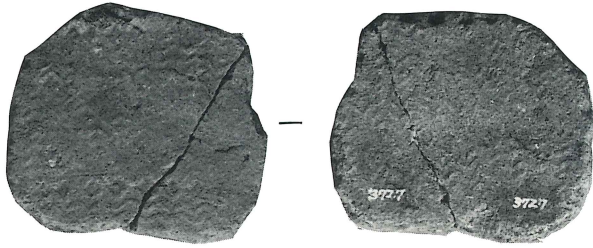
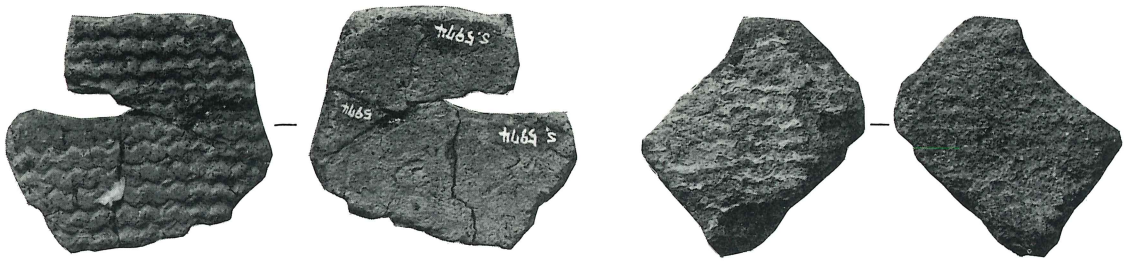


图15-8

图15-12



图16-6

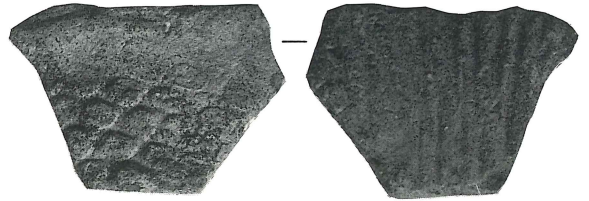


图17-4

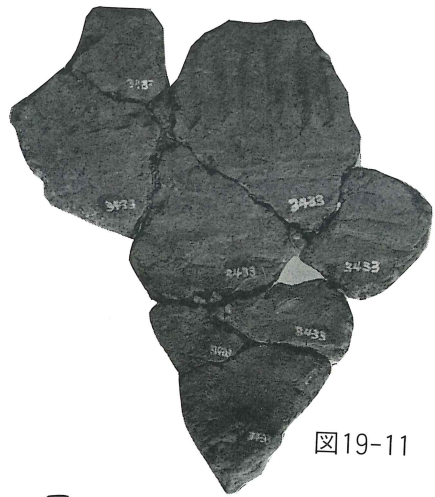


图19-11



图24-4



图24-5

图版 3 押型文土器



図18-1



図21-6

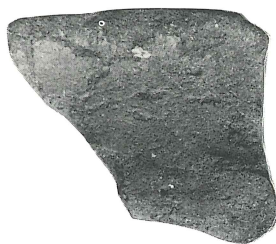


図22-5

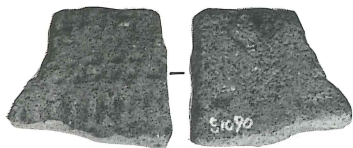


図23-1

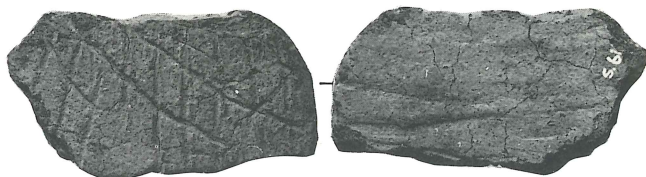


図23-13

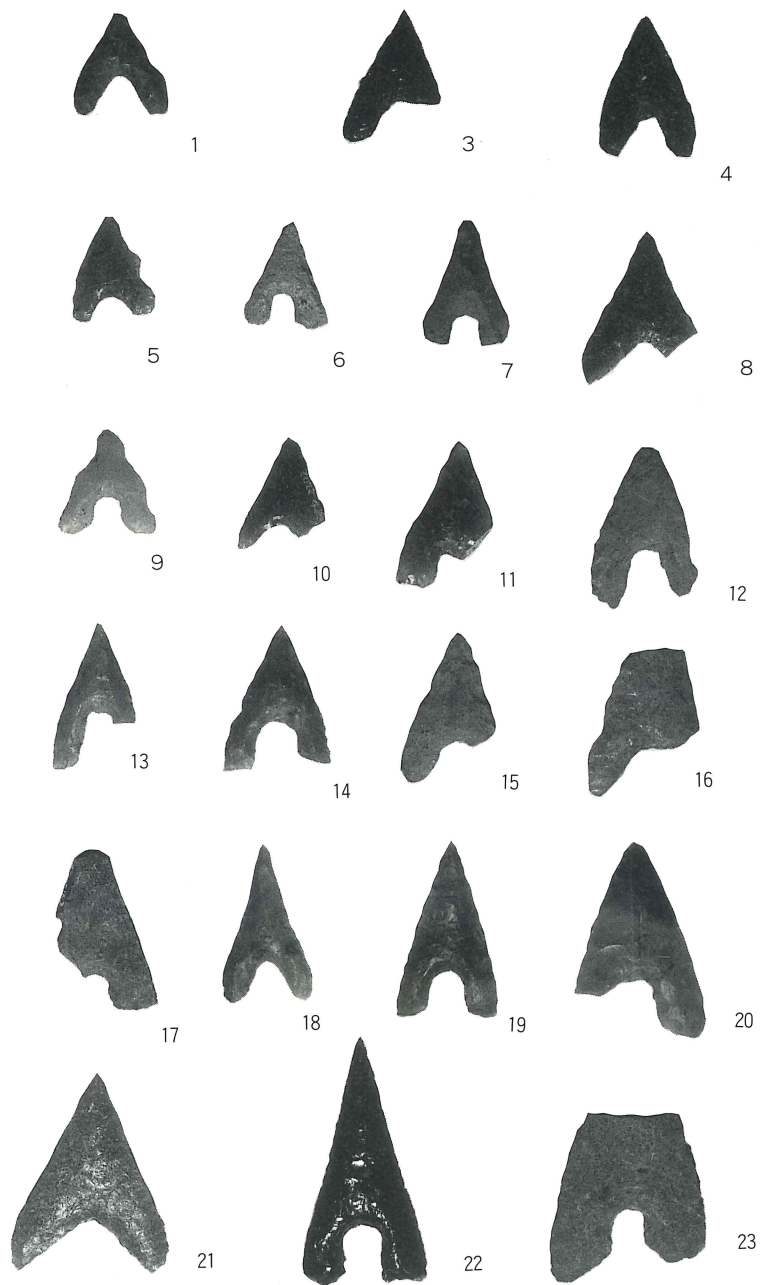


図25-1



図25-4

図版 4 無文土器および須恵器



図版 5 石鏃



45



46



47



48



49



50



60



61



62



63

図版 6 石斧その他

*上二段の番号は第29図と同じ
*下二段の番号は第32図と同じ

会下遺跡、的場2号墳，塩屋伊豫野原遺跡

大分空港道路建設に伴う
発掘調査報告書 I

大分県文化財調査報告書
第83輯

1991年3月31日

発行 大分県教育委員会
大分市府内町3丁目10番1号

印刷 日の丸印刷株式会社